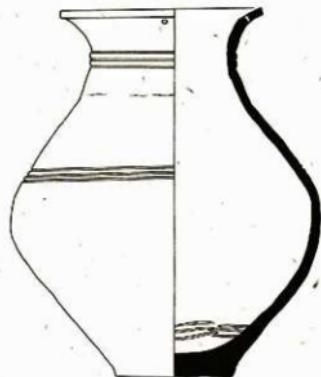


# 東大阪市下水道事業関係 発掘調査概要報告

— 1998 年度 —



1999

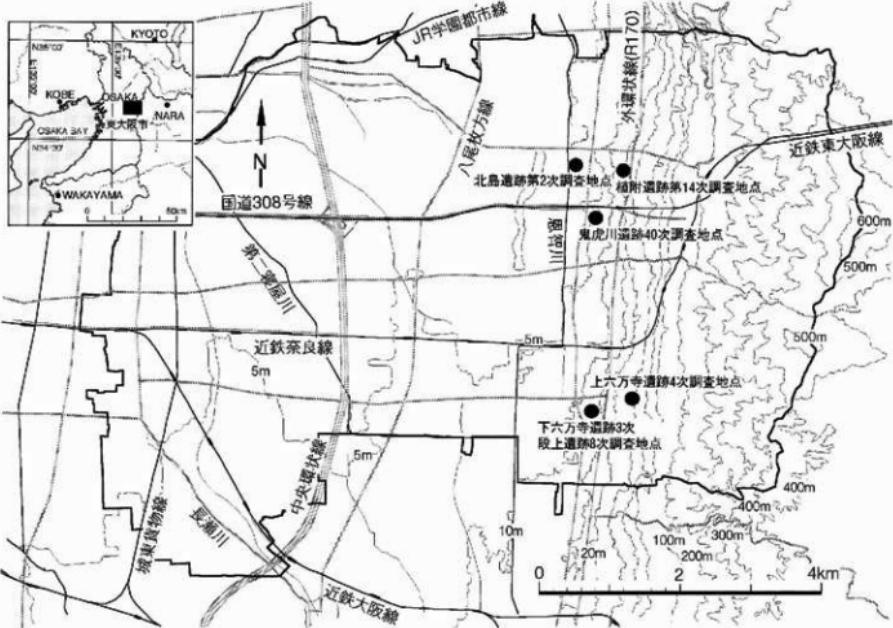
財団法人 東大阪市文化財協会

# 東大阪市下水道事業関係 発掘調査概要報告

— 1998 年度 —

1999

財団法人 東大阪市文化財協会



1997年度の下水道事業関連の発掘調査地点

## 目 次

第 1 章 鬼虎川遺跡第 40 次発掘調査	1
第 2 章 北島遺跡第 2 次発掘調査報告	77
第 3 章 植附遺跡第 14 次発掘調査報告	85
第 4 章 上六万寺遺跡第 4 次発掘調査報告	101
第 5 章 段上遺跡第 8 次・下六万寺遺跡第 3 次調査報告	131
第 6 章 その他の試掘・立会調査	139

## 例 言

1. 本書は財団法人 東大阪市文化財協会が東大阪市の委託を受け、平成 10（1998）年度に実施した発掘調査整理事業の報告書である。本整理事業は「下水道建設予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査に関する平成 10 年度協定」にもとづく。
2. 整理事業の対象となった過年度の埋蔵文化財包蔵地および隣接地における発掘調査は、鬼虎川遺跡第 40 次発掘調査(平成 8 年度)、植附遺跡第 14 次発掘調査(平成 8 年度)、北島遺跡第 2 次発掘調査(平成 9 年度)、上六万寺遺跡第 4 次発掘調査(平成 9 年度)、下六万寺遺跡第 3 次発掘調査(平成 9 年度)、段上遺跡、小若江遺跡、水走遺跡などと、平成 9 年に実施された試掘・立会調査である。
3. 各章の報文は以下の調査担当者が執筆した。井上伸一・若松博恵(第 1 章)、松田順一郎(第 2・3・5・6 章)、池崎智詞(第 4 章)。
4. 鬼虎川遺跡第 40 次発掘調査で検出された動物遺体の同定と所見については、大阪市立大学医学部第二解剖学教室の安部きみ子氏に依頼した。同調査における珪藻・花粉分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。
5. 本書に掲載した現地の遺構、堆積層断面の写真は、各担当者が撮影した。遺物写真の一部は担当者が撮影し、他は株式会社スタジオ GF プロに委託し、撮影した。
6. 現地における測量の基準には原則的に、国土座標第 VI 系を用い、北は座標北を指す。水準高は T.P. (おむね東京湾中等潮位) を用いた。
7. 現地で調査した堆積層・土壤の色調は、「新版 標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修)と对照し、モースの色体系にもとづく色相・明度・彩度の表記に、土色名を付した。堆積物粒子の粒径に関しては、ウェントワースの粒径区分に従った記載もあるが、残念ながら統一できていない。
8. 現地の調査および整理事業にあたっては、東大阪市建設局下水道部の援助とともに、施工業者ならびに調査地近隣の市民各位の御協力を得た。心よりお礼申し上げます。なお、現地調査と整理事業には以下の東大阪市文化財協会嘱託(\*印)と補助員が参加した(五十音順)。  
飯田矩子、石割珠貴\*、今井喬子\*、今林信祐、榎本雅則、大舟明美、岡森雅子、岸田勝行、小林勝人、高良浩、辻康男、富永和枝、永田明徳、西浦完次、夏原宣左子\*、西村和浩、西村慶子\*、根来磨由美、八田美代子、藤崎博子\*、藤野勝久、山田龍太郎、山村然三。

# 第1章 鬼虎川遺跡第40次発掘調査報告

## 1.1 調査に至る経過

平成8年度に東大阪市東部の弥生町と宝町の境界となる市道に、公共下水道管渠築造工事が計画された。当地は1963年に国道170号線建設に伴う水道管敷設工事の際に、土器・石器が発見され、その後数次の調査によって、弥生時代には大規模な集落が形成されていたことが明らかとなった鬼虎川遺跡の範囲内に位置する。

そのため協議を重ね、下水道管渠築造工事に伴って発掘調査を実施することになった。工事はまず推進工法によって下水管を敷設した後、開削工法によってその上部にさらに下水管を埋設する計画であった。調査は西よりNo.1～No.3地区と仮称する立坑部分から着手した。発進立坑であるNo.2地区を平成8年4月30日～6月11日まで、西側の到達坑であるNo.1地区を平成8年5月17日～5月23日まで実施した。東側の到達坑であるNo.3地区は渠注とライナーブレートによる設計であったため、夜間の立会調査となった。またNo.2地区的調査結果から、開削工事の深度では弥生時代の堆積層に達しない

ことが判明し、No.2～No.3地区間の開削工事は立会調査となった。

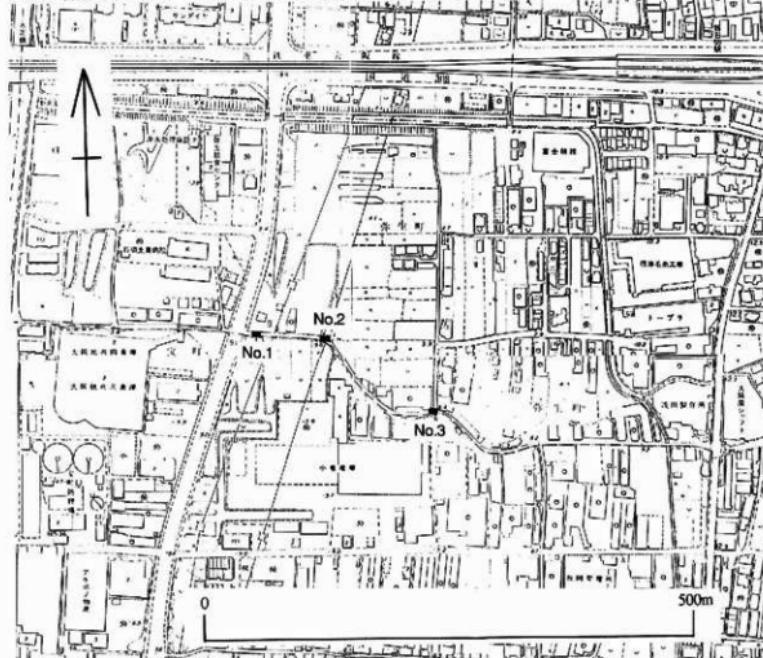


図1.1 調査地位置図

## 1.2 位置と環境

鬼虎川遺跡は東大阪の東部、西石切町・弥生町・宝町・水走にかけての地域に位置し、国道170号線を挟んで南北に広がる縄文時代から江戸時代に亘る複合遺跡である。この地域は現在、国道308号線と国道170号線という東西・南北に走る主要幹線道路があり、阪神高速道路東大阪線、第二阪奈有料道路、近畿日本鉄道（近鉄）東大阪線も通って、その周辺には工場、住宅、病院などが建ちならび、水田・畑地はほとんど見られなくなっている。しかし、十数年前までは大半が低湿地であって、小集落が点在するのみで、掘り上げ田などの水田・畑の広がるのどかな地帯であった。

鬼虎川遺跡の東に広がる生駒山の山麓地域にある草香山・千手寺山・正興寺山・神並・客坊山・山畑・貝花などの遺跡からナイフ型石器または有茎尖頭器が出土しており、旧石器時代後期の遺跡は点在しているが、現在のところ住居などの明確な生活構造は見つかっていない。

約12000年前にはじまった地球の温暖化による縄文海進は、縄文時代前期の約5000～6000年前にはピークに達して、大阪平野の大半が海（河内潟）と化した。鬼虎川遺跡東部の発掘調査などで、この時期の海蝕崖が検出されており、前期の土器とともにクジラ・マダイ・エイなどの海生動物の動物遺体が数多く出土している。縄文時代中・後期以降は徐々に寒冷化して海岸線は後退するとともに、旧の大和川・淀川などの河川が遊び込んできた土砂で湾岸地域は少しずつ陸化していくが、鬼虎川遺跡から西の地域はいまだ湯（河内潟）内であった。このために縄文時代の遺跡の多くは山麓地域広がる段丘および扇状地上などに形成されていた。遺跡としては神並遺跡（早期・後期）、日下（早期、中～晚期）、繩手（中～後期）、鬼塚（後～晚期）、馬場川（後～晚期）などがある。

縄文時代晚期から弥生時代初頭にはさらに陸化が進み、鬼虎川・植附遺跡などの東部の地域だけでなく、南西部の山賀遺跡・西部の宮ノ下遺跡などでも集落が営まれるようになった。また、弥生時代中期には稻作生産の定着化に伴い集落は大きくなり、鬼虎川・瓜生堂遺跡などでは集落をとりまく数条の環濠をはじめ、柱穴・貝塚・方形周溝墓などの構造と、多量の弥生土器、木製品、石製品、金属製品などの遺物が検出されている。

弥生時代後期から古墳時代になると海はさらに後退し、湯西北部（現・上町台地の先端）は狭くなつて湖（河内湖）と化するとともに、南から北流する旧大和川水系（玉串川・吉田川・菱江川・長瀬川・楠根川）や生駒からの諸河川などから運ばれてきた土でその周辺部ではさらに進んでいった。山麓部の馬場川・北島池など、河内湖縁辺の西岩田・意岐部・弥刀などの遺跡があり、鬼虎川遺跡でも南部で多くの遺物が出土している。

古墳時代後期には鬼虎川遺跡においても住居跡はみつかっているが、市尻・西ノ口などの遺跡で集落が営まれているとともに、山畑・客坊山・出雲井などの山麓部に群集墳・植附・段上・山賀など平野部では小型低丘墳が形成されていった。

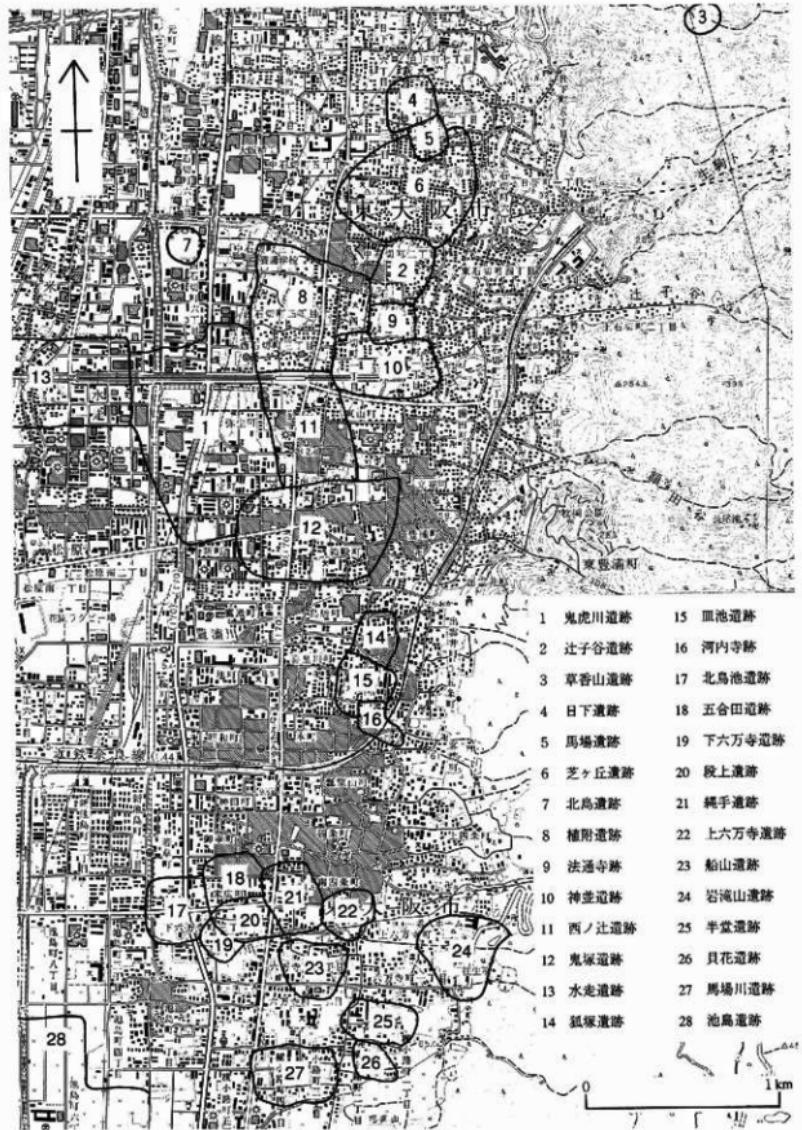


図 1.2 遺跡周辺図

### 1.3 調査概要

#### No. 1 地区

国道 170 号線から東へ約 10m 入った地点に東西 5 m、南北 3 m、面積 15m<sup>2</sup> の到達坑が調査区として設定された。従前の鬼虎川遺跡における調査が国道 308 号線付近の遺跡北部に集中していたに対し、本調査区は遺跡南部に位置する。調査区内のやや東よりで国土座標第 VI 系 X = -146,975、Y = -33,085 が交わる。

本調査区は周辺工場への大型車両の交通量が多く、また迂回路の確保が困難であったため、平成 8 年 5 月 17 日～5 月 23 日まで実働 5 日間の夜間調査を実施した。現地表面は標高約 5 m で、地表下 2.8m までは既設の下水道埋管設工事の際に擾乱されていたため、機械掘削を行った。その後人力によって 1.2m を掘削し、調査を実施した。

#### 層位（図 1.3）

第 1 層は上部を擾乱されており、層厚 24cm が遺存していた。製塙土器、古墳時代の土師器、弥生土器、縄文土器を少量含む。氾濫性の堆積層と思われ、溝 1 の埋土となっていた。

第 2 層は層厚 20cm 以下で、溝 1 の両肩でブロック状に確認されたことから、護岸のために貼り付けられたものと思われる。遺物は出土しなかった。

第 3 層は層厚 10～60cm で、南東部が薄く南西部・北部が厚い。弥生時代前期～中期後葉までの土器、石器、骨製品、動物遺体などの遺物を多量含む。上面は T.P. + 2 m 程度で、古墳時代後期の遺構を検出した。

第 4 層は、次節で述べる No. 2 地区の調査では相当する堆積層から滋賀県 IIIb～IV の土器が出土しており、縄文時代晚期頃にあたると思われる。調査地南東部を残して 12～28cm の深さで掘削されていた。上面で弥生時代中期の遺構を検出した。

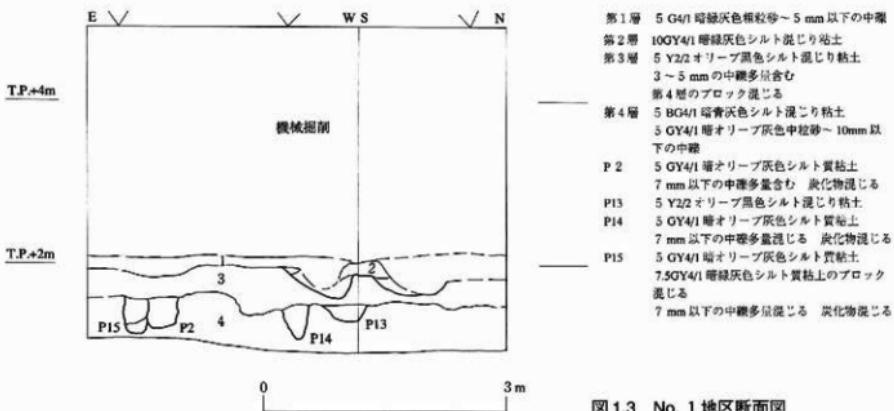


図 1.3 No. 1 地区断面図

### 遺構（図1.4）

古墳時代後期の遺構を第3層上面で検出した。溝は幅48cm、深さ44cmで南東から北西方向に延びる。氾濫による第1層の堆積によって埋没し、掘り直されることなく放棄された。円筒もしくは朝顔形埴輪・製塩土器・弥生土器が少量出土した。

弥生時代中期の遺構を第4層上面で検出した。調査地南東では東西1.4m以上、南北1m以上、高さ28cmの方形の高まりを確認した。これは第4層を掘削して削り出すことによって形成されていた。

ピットは15基確認された。深さは9~45cm。柱根が遺存しているしているものはなかった。ピット内からの遺物は弥生時代中期の土器が主体で、前期のものが少量混入していた他、石器・動物遺体なども出土した。調査地が狭小であつたため建物の復元是不可能であったが、ピットが比較的高い密度で検出されたこと、また切り合ひ関係をもつ重複したピットも確認されたことから、当調査地区が弥生時代中期には建て替えをしながら、居住空間として利用されていたことが判明した。

### 出土遺物（図1.5・6）

コンテナ2箱程度の遺物が出土した。そのうちの大半が第3層およびピット内出土の弥生時代のもので、その他の時期の遺物は極めて少ない。以下、図化した遺物の出土層位を中心に特徴を簡潔に記す。また動物遺体の同定結果については、後節の一覧表を参照いただきたい。

1は円筒もしくは朝顔形埴輪で、溝1から出土した。第1層および溝1の廃絶時期を古墳時代後期に比定できる。

2~5は弥生土器壺の口縁部、6は細頭壺の口縁部でいずれも第3層から出土した。6は口縁部に3条の凹線文を持ち、畿内第IV様式の特徴を示していることから、第3層の時期を弥生時代中期後葉に比定できる。7~12は弥生土器壺の底部で、8がピット12、9がピット4から出土し、その他は第3層から出土した。13は弥生土器壺蓋でピット5から出土し、14はミニチュアの弥生土器高杯で第3層から出土した。15~22は弥生土器壺の口縁部、23~25は壺の底部でいずれも第3層から出土した。弥生土器は図化したものに鉢・水差し形なども出土している。

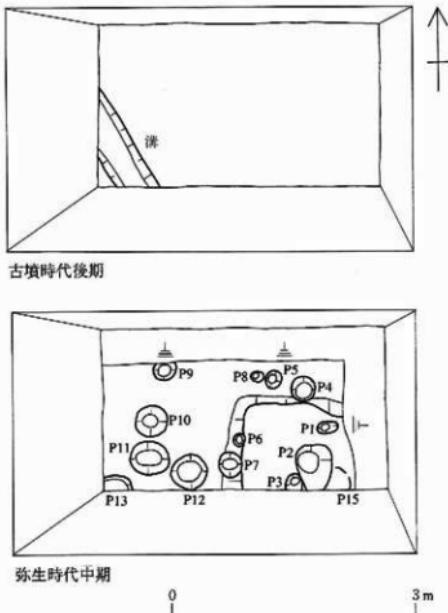


図1.4 No. 1 地区遺構平面図

26は骨製刺突具で、第3層から出土した。体部は磨いて隅丸長方形に、先端部は削った際の刃物痕が無数認められ、四面取りされている。残存長は4.85cm、最大幅は0.7cm。

27は円盤状土製品で、第3層から出土した。体部外面にミガキ調整が施された弥生土器片を利用し、周縁部を打ち欠いて円形に仕上げている。最大幅5.2cm。

28はサスカイト製の横刃型削器で、ビット4から出土した。

29は石包丁で、第3層から出土した。暗緑灰色の色調をした緑泥片岩製で、穿孔がひとつある他、途中で未貫通のまま放棄された直径3.5mmと4.5mmの痕跡が確認できる。

30は縄文土器深鉢で、第1層から出土した。口縁端部に刻目、口縁端部のやや下位に刻目突帯文を持つことから、縄文時代晩期の船橋式に相当するものと思われる。

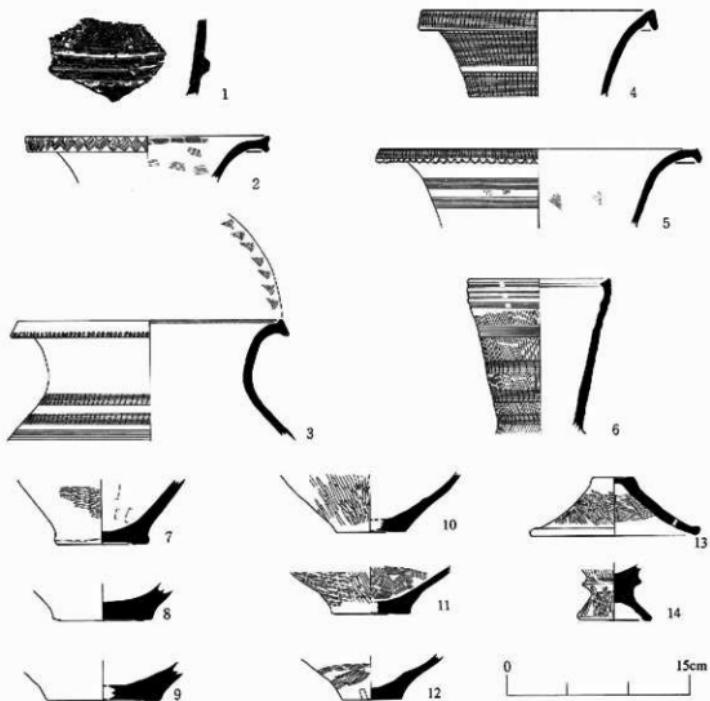


図1.5 No. 1 地区出土遺物 1

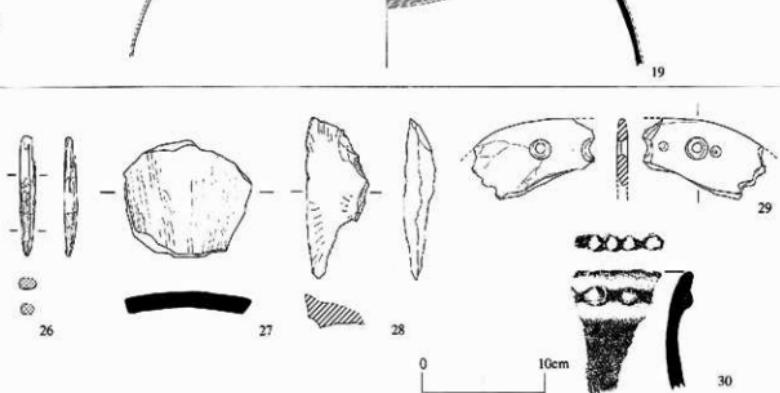
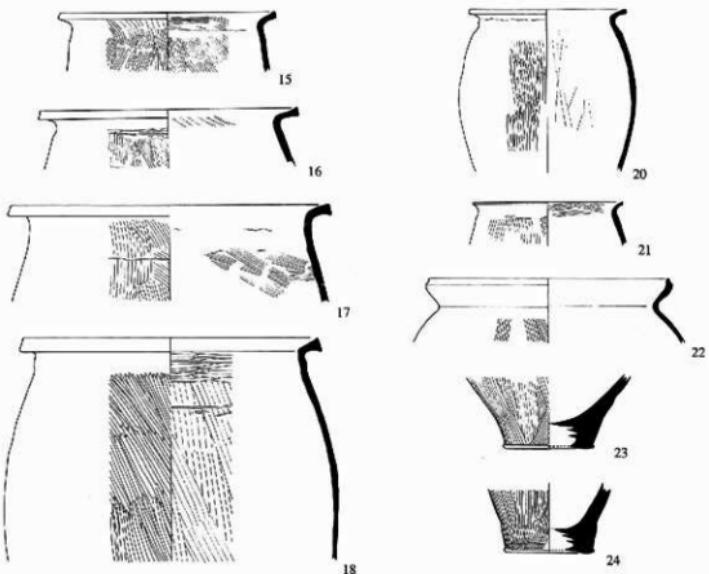


图 1.6 No. 1 地区出土遗物 2

## No. 2 地区

この箇所は下水管埋設に伴う人坑部にあたり、平面形は西辺の南側が突出した鉤状を呈し、調査面積は約 34.5m<sup>2</sup>。調査区内の南東で X = -146,985、Y = -33,025 が交わる。一部が道路上に位置することから、道路部分に覆工板を設置するための一段目の支保工を架設する高さまで夜間に機械掘削および人力掘削によって調査を行なった。調査にあたっては、上部 1.6m を機械掘削によって除去し、以下約 2.6m について人力掘削による発掘調査を実施した。

### 層位（図 1.7）

- 第 1 層 現代の盛土  
第 2 層 近代の盛土  
第 3 層 暗緑灰色(10G 4/1)中粒砂～中疊混じりシルト質粘土  
第 4 層 灰色(10Y 5/1)粗粒砂～中疊混じりシルト～粘土  
第 5 層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト 粗粒砂～中疊混じる  
第 6a 層 暗オリーブ灰(2.5GY 4/1)中・粗粒砂～中疊混じりシルト  
同質の黒色ブロック混じる  
第 6b 層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)中粒砂～中疊混じりシルト  
第 7a 層 灰色(7.5Y 4/1)中～極粗粒砂 細～中疊混じる  
第 7b 層 灰色(5Y 5/1)中粒砂～中疊 第 7a 層と第 7c 層の混層  
第 7c 層 暗緑灰色(10G 5/1)シルト混じり中粒砂～中疊  
第 8 層 暗緑灰色(7.5GY 3/1)粗粒砂～中疊混じりシルト  
第 9 層 黒色(5Y 2/1)中～粗粒砂混じりシルト～粘土 細～中疊含む  
弥生時代中期の整地層 弥生土器、石器、土製品など多量に包含  
第 2 遺構面  
第 10 層 暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)極粗粒砂～細疊 第 3 遺構面  
第 11 層 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト～中粒砂  
第 10・11 層から縄文晩期土器、石器出土  
第 12 層 オリーブ黄色(5Y 6/3)中～粗粒砂  
第 13 層 暗緑灰色(7.5GY 3/1)極粗粒砂  
第 14 層 黄褐色(7.5Y 5/4)細疊とオリーブ灰色(2.5GY 5/1)シルト～中粒砂  
の互層  
第 15 層 暗緑灰色(10GY 4/1)シルト～中粒砂  
第 16 層 灰色(7.5Y 4/1)粗粒砂～中疊  
第 17 层 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト～中粒砂  
第 18 层 オリーブ黒色(10Y 3/1)中～極粗粒砂  
第 19 层 暗緑灰色(5G 4/1)シルト～中粒砂  
第 20 层 黒色(10YR 2/1)極粗粒砂 第 4 遺構面  
第 21 层 暗緑灰色(5G 4/1)極粗粒砂 中疊含む  
第 22 层 暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)極粗粒砂  
第 23 层 灰色(7.5Y 4/1)細～粗粒砂

- 炭化物と黒褐色シルト・中粒砂のブロック混じる
- 第24層 暗オリーブ灰色(5G 4/1)シルト混じり細～粗粒砂
- 第25層 黒色(7.5GY 2/1)細～粗粒砂混じりシルト～粘土
- 第26層 オリーブ黒色(7.5GY 3/2)細粒砂混じりシルト～粘土
- 第27層 暗緑灰色(7.5GY 3/1)中粒砂～細粒砂混じりシルト質粘土
- 第28層 暗緑灰色(10GY 3/1)中粒砂～細粒砂
- 第29a層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)中粒砂～中疊

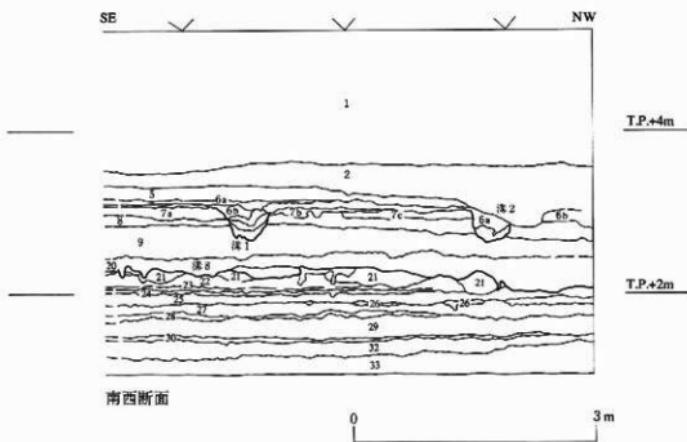
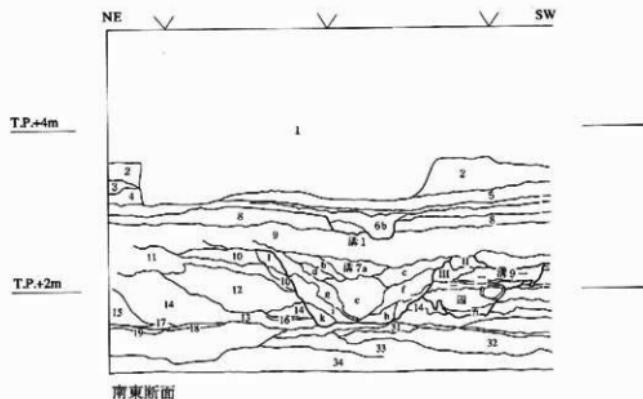


図 1.7 No. 2 地区断面図

- 第 29b 層 灰色(10Y 4/1)中粒砂～細礫
- 第 30 層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)極細～細粒砂
- 第 31 層 暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)細粒砂～細礫
- 第 32 層 黒色(2.5GY 2/1)細～中粒砂混じりシルト 下部砂多い
- 第 33 層 灰色(10Y 5/1)細粒砂～細礫
- 第 34 層 暗緑灰色(10GY 4/1)細礫
- 溝 1a オリーブ黒色(10Y3/1)シルト  
 b 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)中～粗粒砂混じりシルト  
 黒色粘土ブロック含む  
 c 灰色(10Y5/1)中～極粗粒砂  
 d 暗緑灰(7.5GY4/1)粗～極粗粒砂混じりシルト～粘土
- 溝 2 オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂～中礫混じりシルト
- 溝 7a オリーブ黒色(5Y2/2)シルト～粘土  
 b 黒色(10YR2/1)粘土～細粒砂 中礫含む  
 c オリーブ黒色(10Y3/1)粘土～細粒砂 中礫含む  
 d 暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルト～粘土 中～細粒砂混じる  
 e オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質粘土～細粒砂  
 f オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土～中粒砂 中礫含む  
 g 暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土～中粒砂  
 h 暗オリーブ灰色(5G3/1)細粒砂～中礫  
 i 黒色(5Y2/1)シルト～細粒砂  
 j 暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土～中粒砂 中礫含む  
 k 黒色(2.5GY2/1)シルト～極粗粒砂
- 溝 8 黒色(2.5Y2/1)シルト～細粒砂  
 I 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土～極粗粒砂  
 溝 11 の北肩部貼り付け土  
 II オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質粘土 中礫含む 第3遺構面  
 III オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土～細粒砂
- 溝 9 一 黒色(2.5GY2/1)シルト～粘土  
 二 灰色(7.5Y4/1)粗粒砂  
 三 灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト質粘土 矿物含む  
 四 暗オリーブ色(2.5GY2/1)極粗粒砂  
 五 灰黄色(2.5Y7/2)中粒砂

#### 遺構と遺物

##### 第 1 遺構 (図 1.8)

第 7・8 層上面において東から西方向にはほぼ平行して走る 3 条の溝(溝 1～3)を検出した。これらの遺構内から遺物はほとんど出土しなかったが、古墳時代後期ごろの遺構である。

溝 1 は、調査地南部に位置し、幅 0.52～0.57m、深さ 0.25～0.34m、検出長

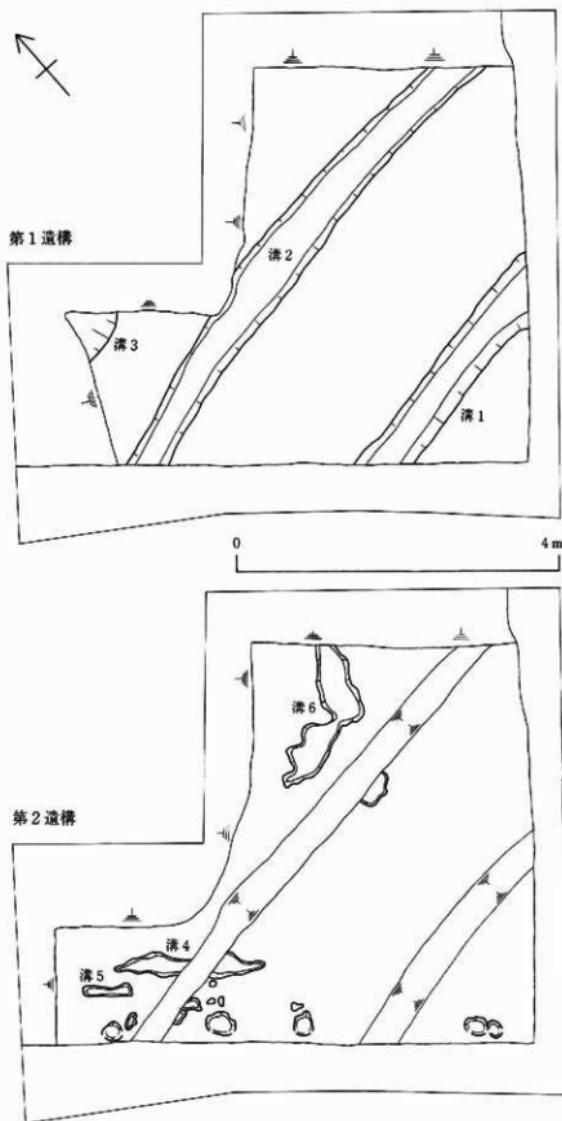


図 1.8 No. 2 地区造構平面図 1

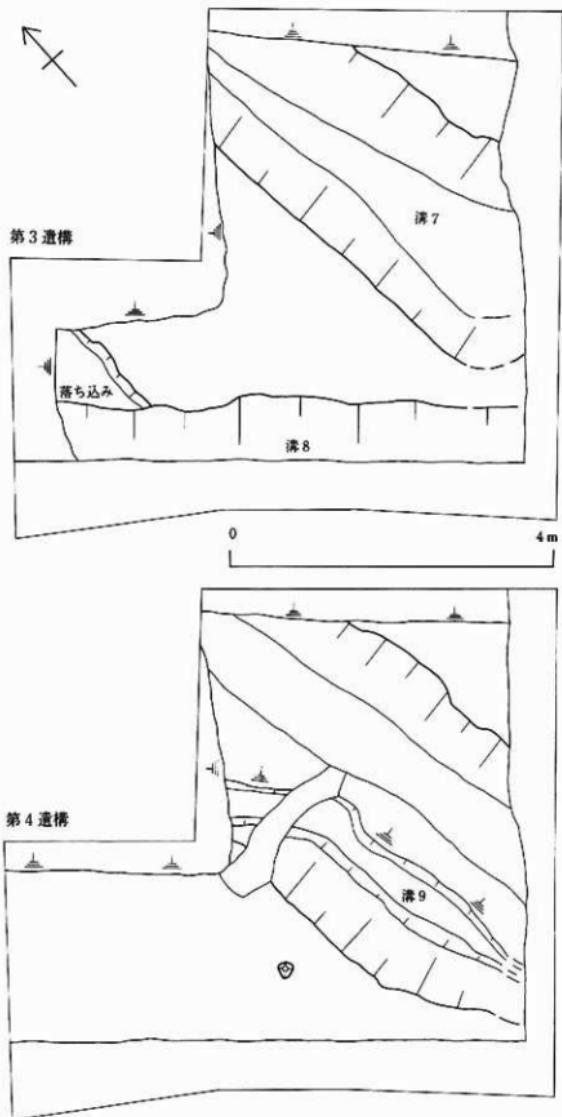


図 1.9 No. 2 地区邊構平面図 2

3.4mを測り、活用時には東から西方向に流れていたと考えられる。

溝2は、調査地のはば中央部を斜行し、やや北西側に弓なり状に膨らんでいた。幅0.42～0.58m、深さ0.27～0.37m、検出長6.3mを測る。

溝3は、北西端部で南側の肩の一部を検出したのみであり、検出深は0.06mを測る。

#### 第2遺構（図1.8）

第9層上面において不定形な3条の溝とピットを13検出した。遺構内からはほとんど遺物は出土しておらず、各遺構の性格は明確ではないが、弥生時代中期ごろのものと思われる。

第9層は黒色中粗粒砂混じりのシルト～粘土で、厚さ0.20～0.45mを測る。弥生時代中期前半の大がかりな整地に伴う層であり、数多くの遺物を包含していた。

出土遺物（図1.10・11）は、前期から中期初頭にかけての弥生土器片をはじめ、サヌカイト製の石鎌（52）、石錐（53）、横刃型削器（54・55）、くさび型石器（56）などの打製石器、磨製石包丁（50）一綠泥片岩一、叩き石（51）一蛇紋岩一、円板型土製品（38）、サヌカイトの石核・剥片、動物遺体など多量の遺物が出土した。弥生土器は壺（31～37・48）、甕（41～44・46・47・49）、鉢（40・45）などが出土しており、大半は前期土器であるが、中期前半のもの（35）も包含していた。31・42・48・49は搬入土器である。

#### 第3遺構（図1.9）

第10層および1・II（弥生時代前期の整地層）上面においても溝2条（溝7・溝8）と落ち込みを検出した。Iは溝7の北肩部の貼り付け土である。

溝7は、南東から北方向に延びる大溝である。幅2.35～2.1m、深さ0.8～1mを測り、断面逆台形状を呈していた。溝内はa～kの11層に分かれ、a～fは埋土であり、h～kは堆積層である。

#### 埋土内出土遺物（図1.12～25・27・28）

埋土内からは多くの弥生土器とともに、縄文土器小片（刻目突帯文土器145）、石器、土製品、シカ・イノシシなどの動物遺体が出土した。

弥生土器は壺、甕、鉢などで、大半は生駒西麓（在地）産のものであるが、搬入土器も含まれている。以下、主な土器について概観していく。

壺は広口壺で、頸部の文様を中心に見てみると、57～61は頸部に文様がないもので、60は不明であるがいずれも胴部上半に1～3条のヘラ描き沈線を施している。61は太頸の広口壺で、58・59は搬入土器である。

62・63は頸部に胴部側を削った段を有し、胴上半部に1～2条のヘラ描き沈線を施している。

64～66は頸部に1条の削り出し突帯を有するもので、64は胴上半部に2条のヘラ描き沈線（以下、沈線とする）を施している。68・70・71・73は頸部の削り出し突帯上に1条の沈線を有し、68・71・73は胴部上半に3～4条の

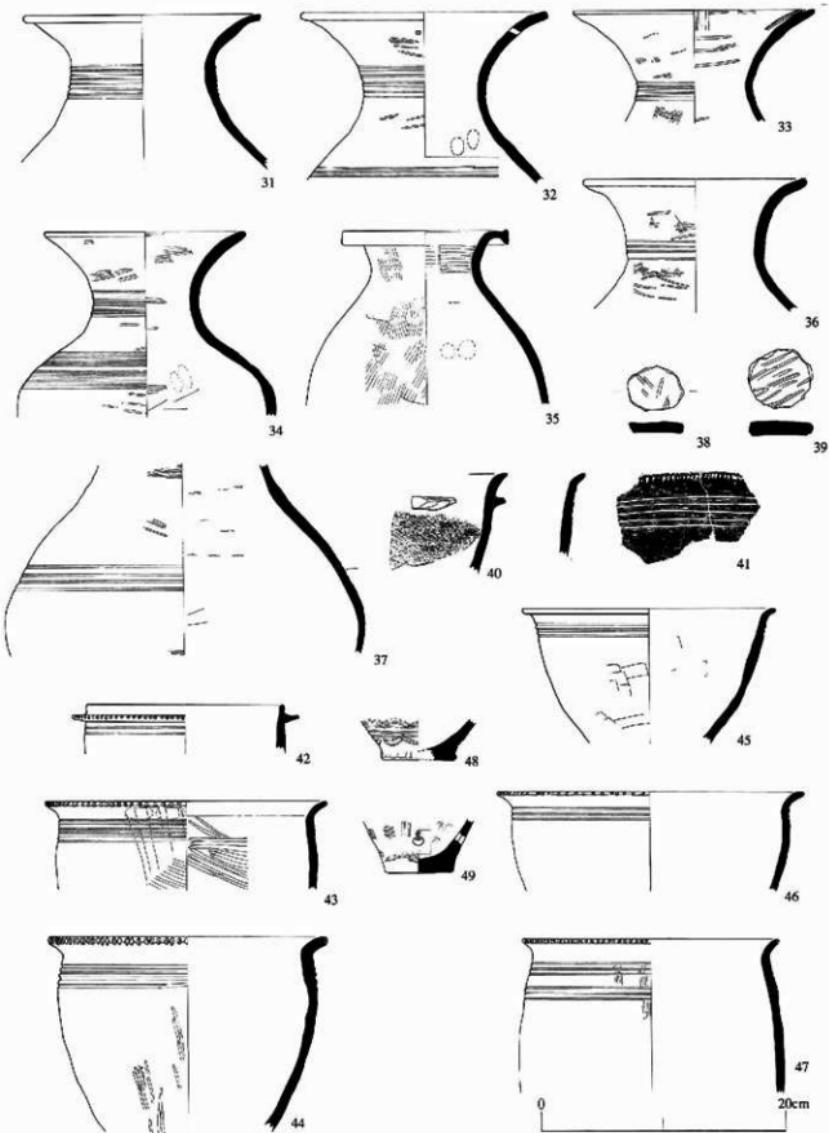


図 1.10 No. 2 地区第 8・9 層出土土器・土製品

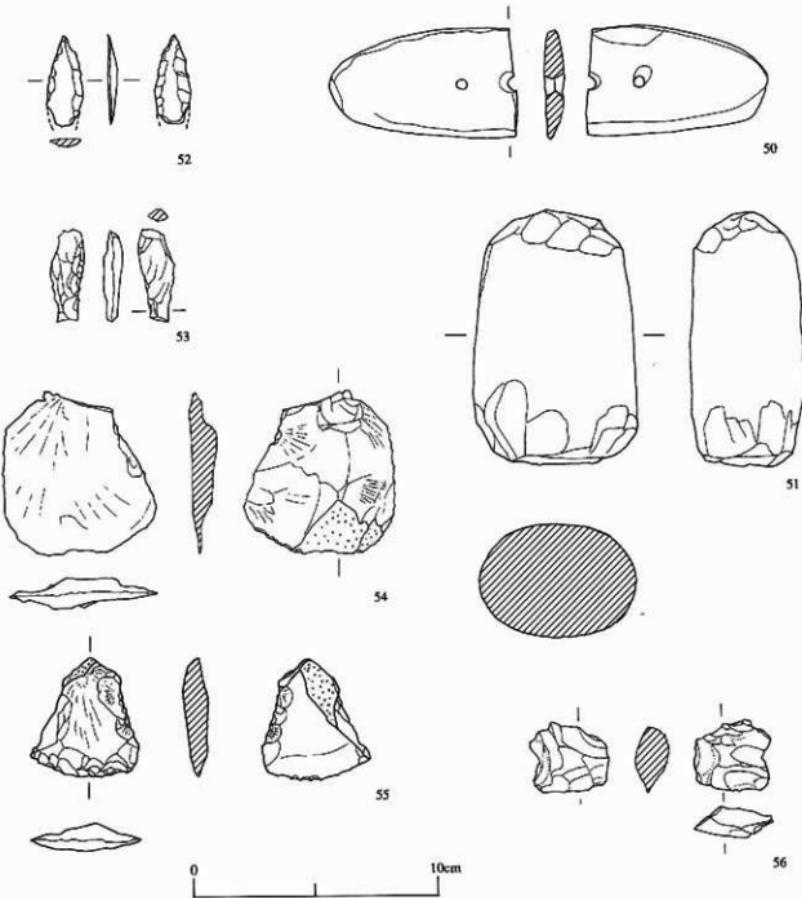


図1.11 No. 2地区第9層出土石器

沈線を施しており、70は口縁端部に1条の沈線を有し、71は頭部側を削り段状を呈している。68は搬入土器である。72・73・75は頭部の削り出し突帯に2条の沈線を有し、75は胴上半部に2条の沈線を施している。76は頭部の削り出し突帯に3条の沈線を有して、胴上半部に5条、胴最径部に2条の沈線を施し、搬入土器である。

77～79は頭部の口縁側を削って段をなし、その下に5～6条の沈線、胴上半部にも複数の沈線を施したもの。77・79は口縁部に円孔を有し、78は口縁が大きく広がっている。

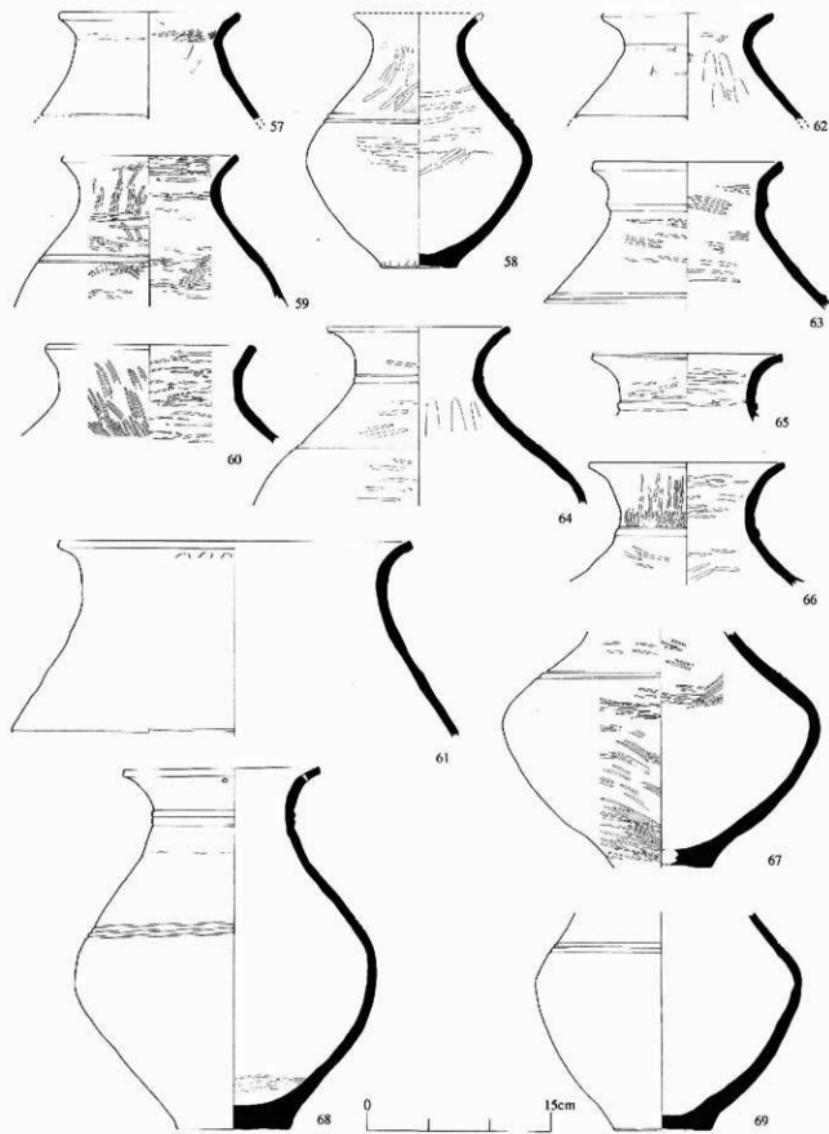


図 1.12 No. 2 地区溝 7 埋土内出土壺 1

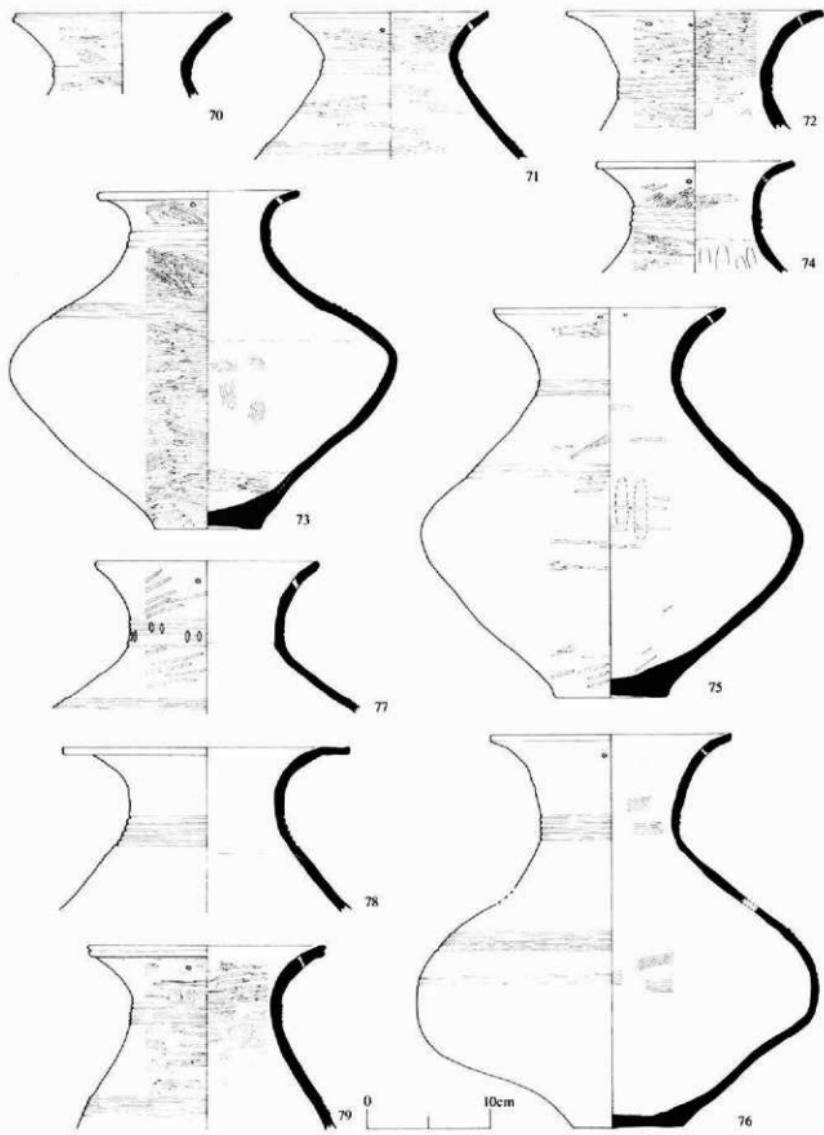


图 1.13 No. 2 地区满 7 埋土内出土器 2

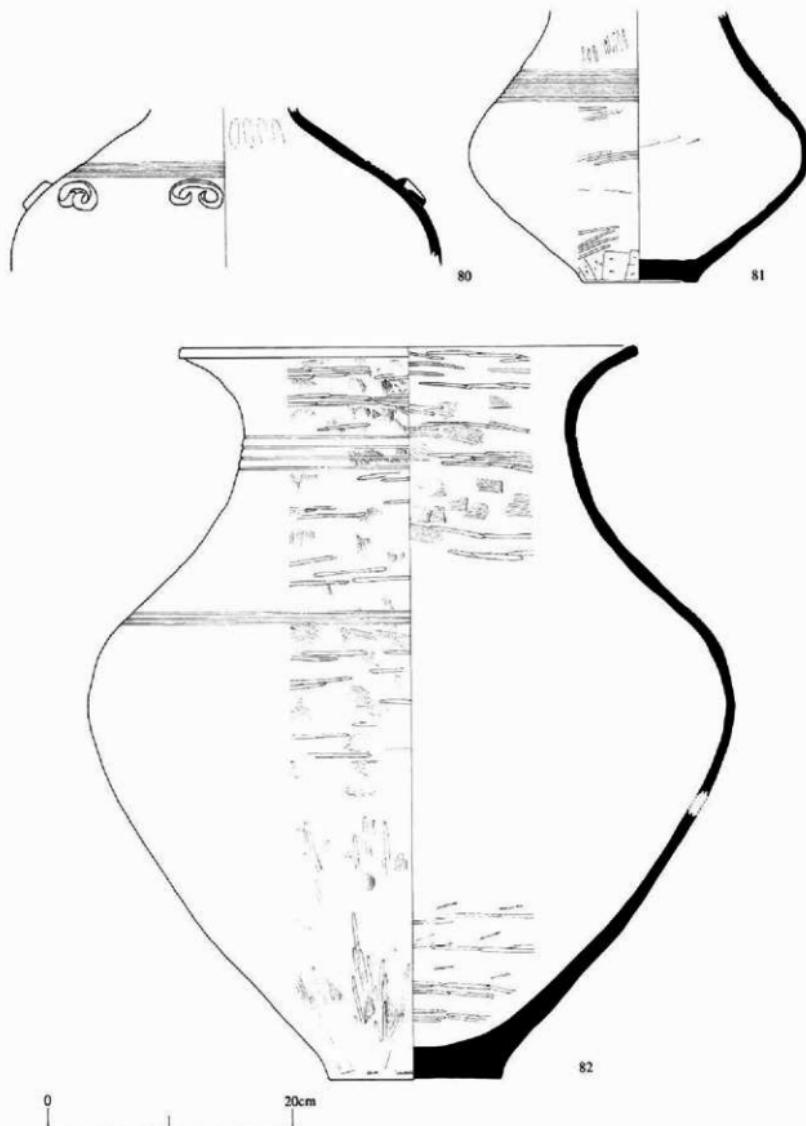


図1.14 No. 2地区溝7埋土内出土壺3

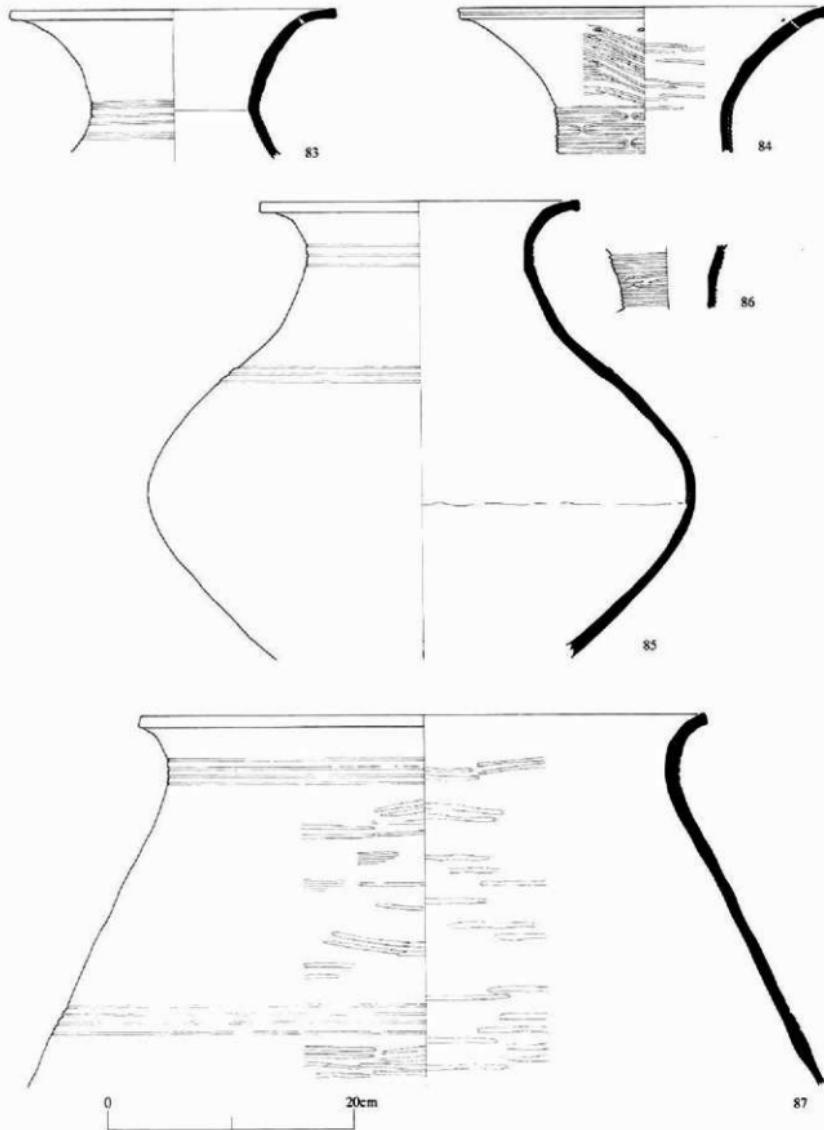


図 1.15 No. 2 地区溝 7 墓内出土壺 4

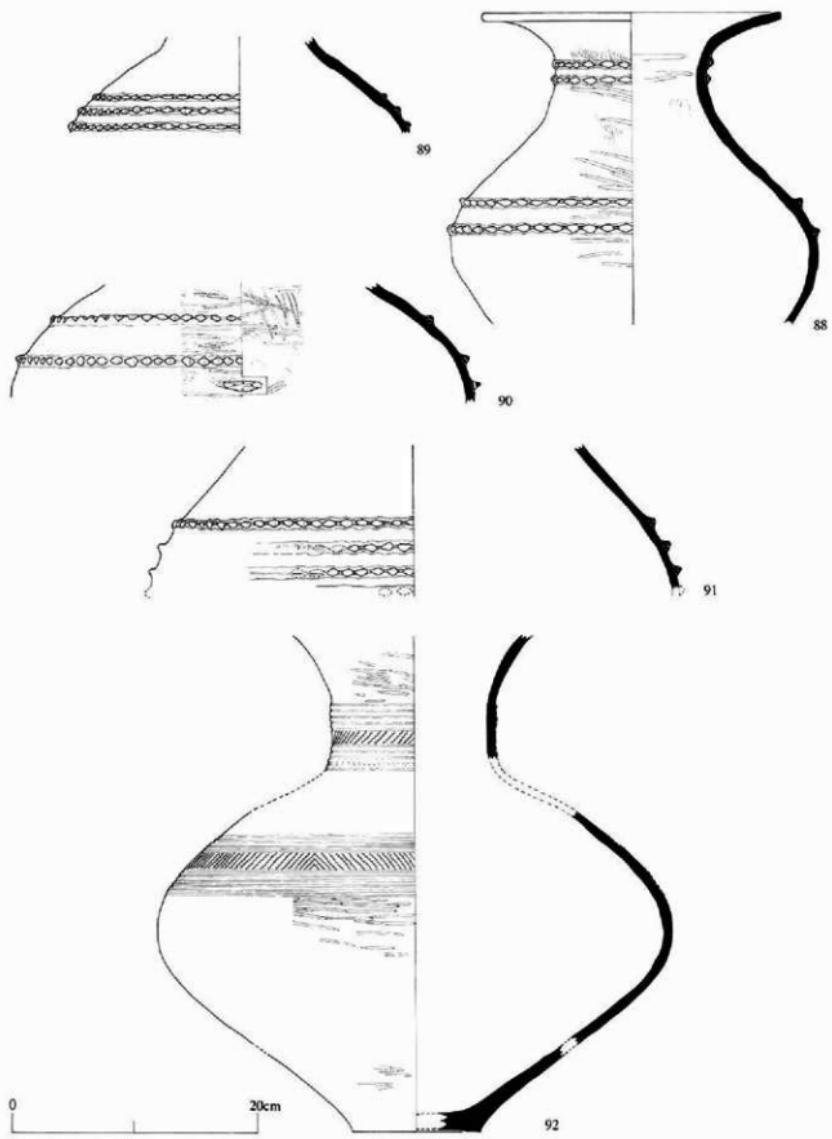


図 1.16 No. 2 地区溝 7 埋土内出土壺 5

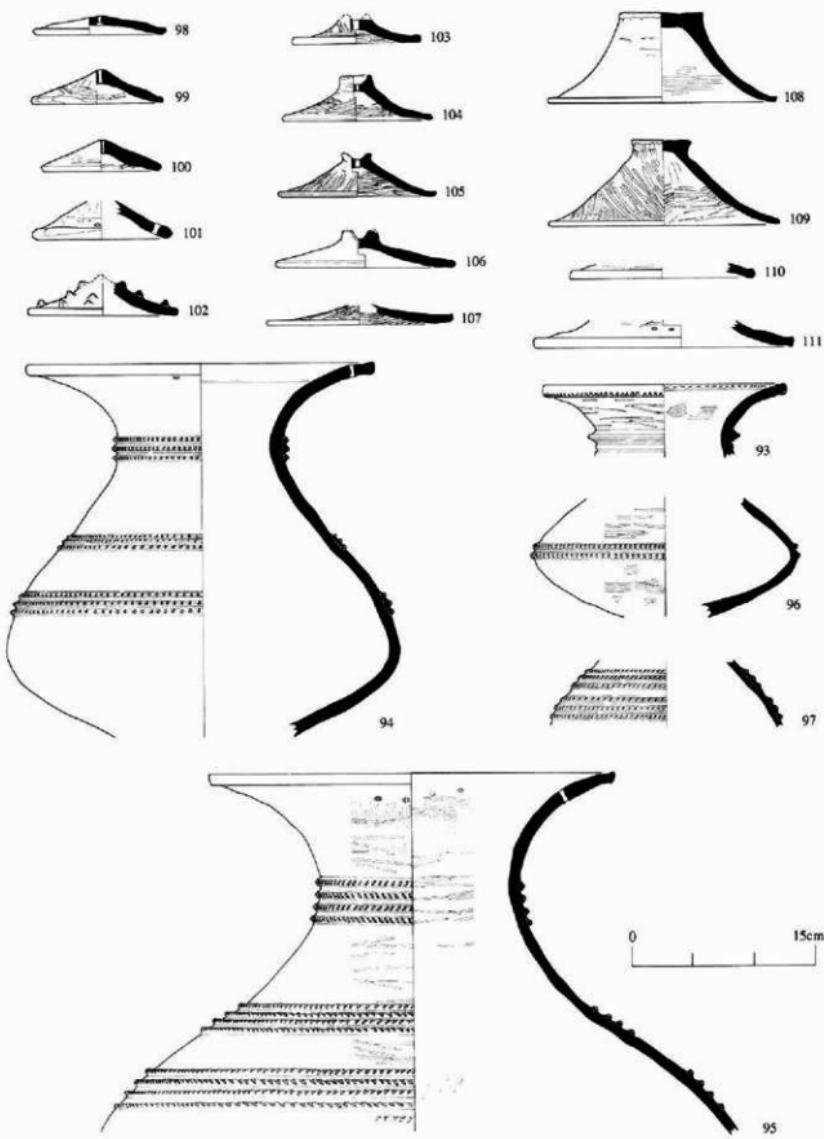
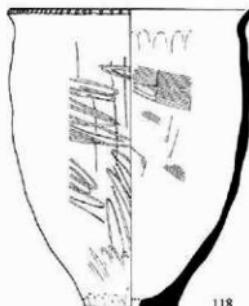
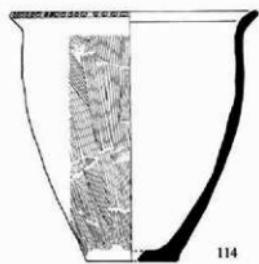
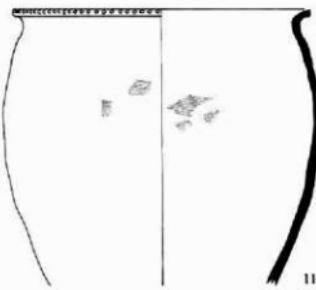
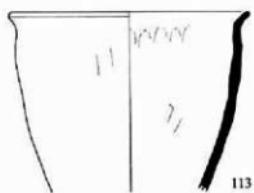
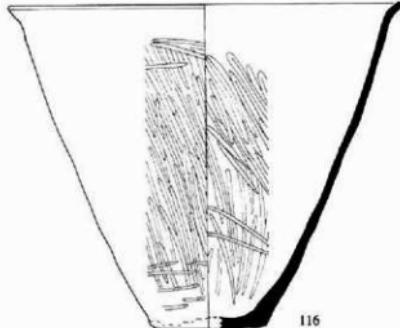
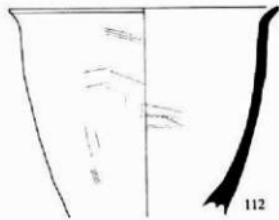


图 1.17 No. 2 地区满 7 埋土内出土 6 · 盖



0 20cm

图 1.18 No. 2 地区满 7 墓土内出土器 1

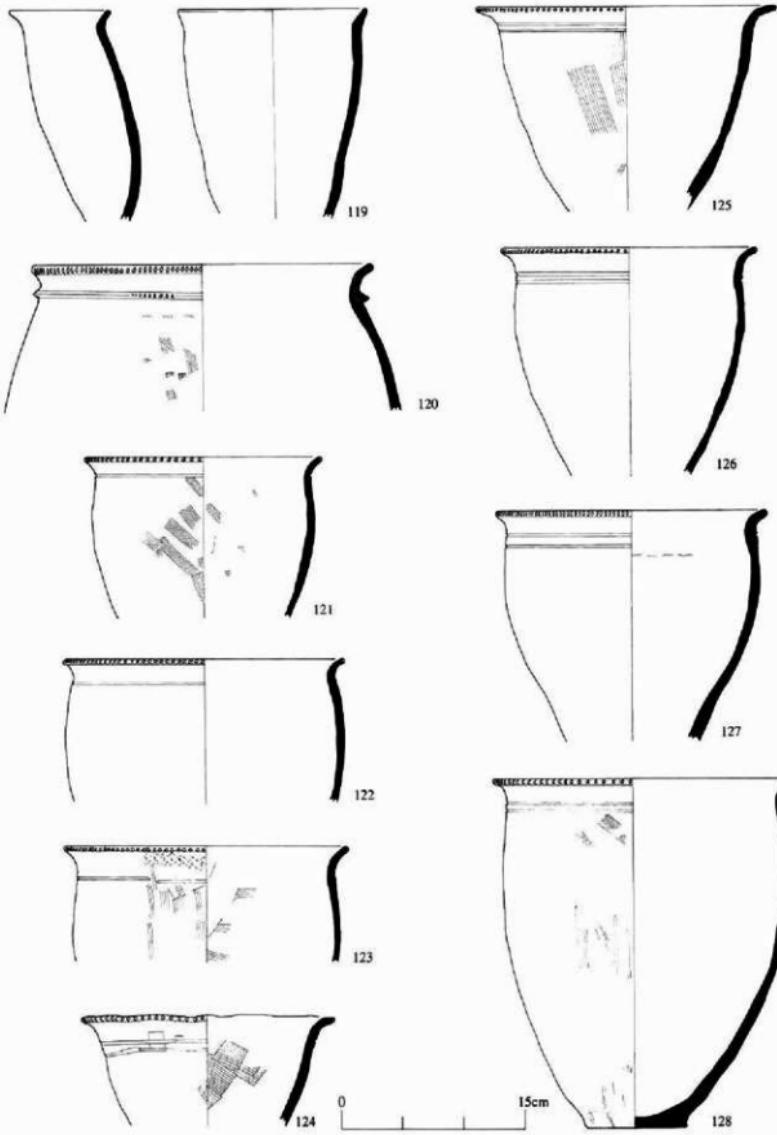


图 1.19 No. 2 地区清 7 埋土内出土甌 2

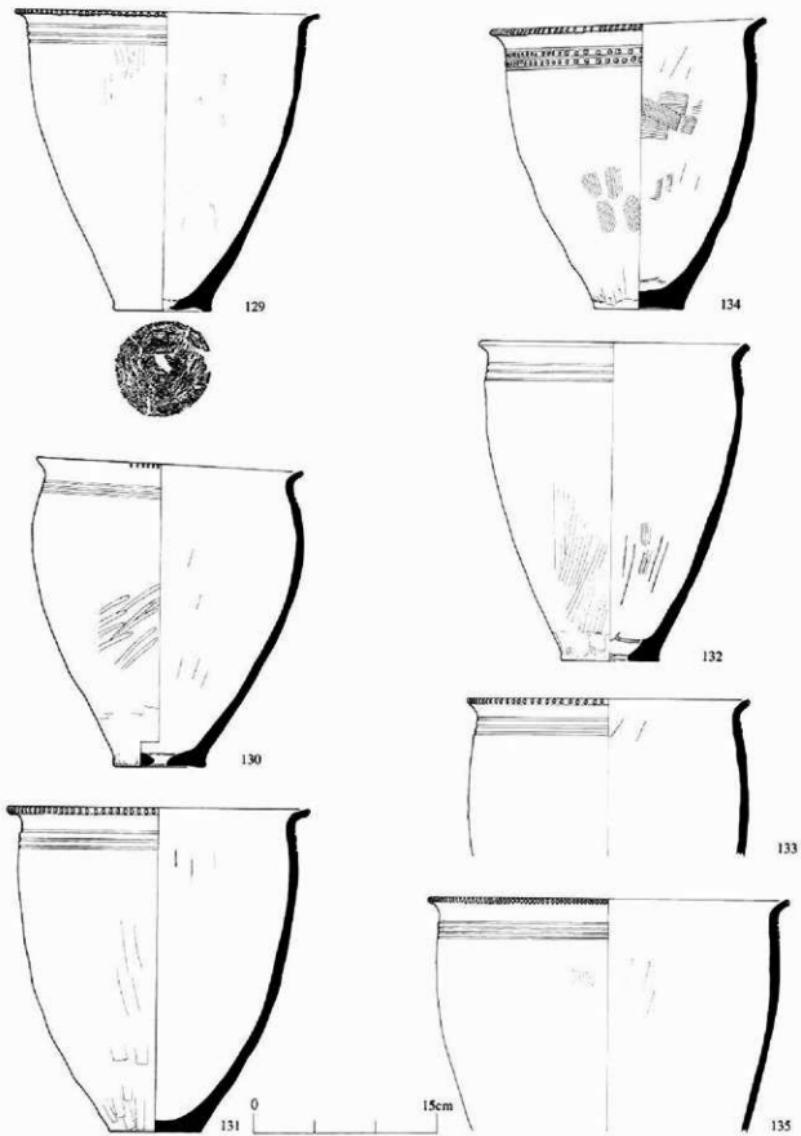


图 1.20 No. 2 地区清 7 埋土内出土器 3

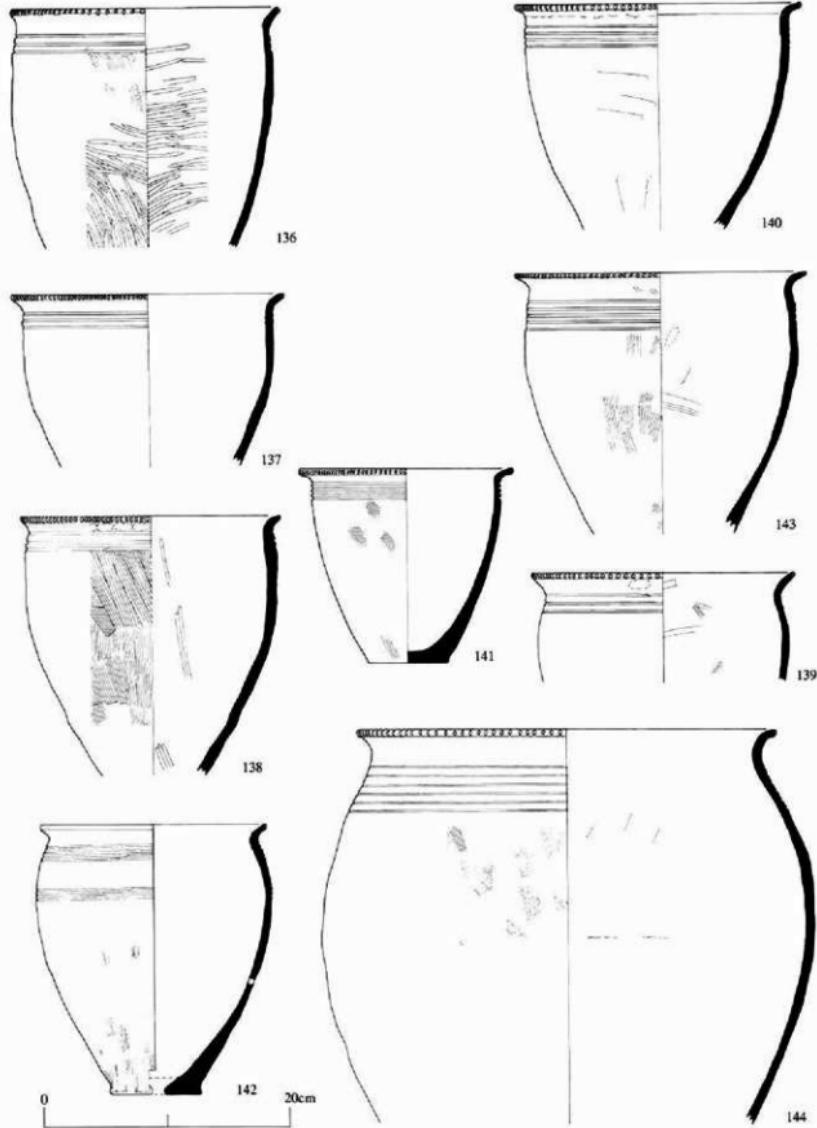


図 1.21 No. 2 地区溝 7 埋土内出土器 4

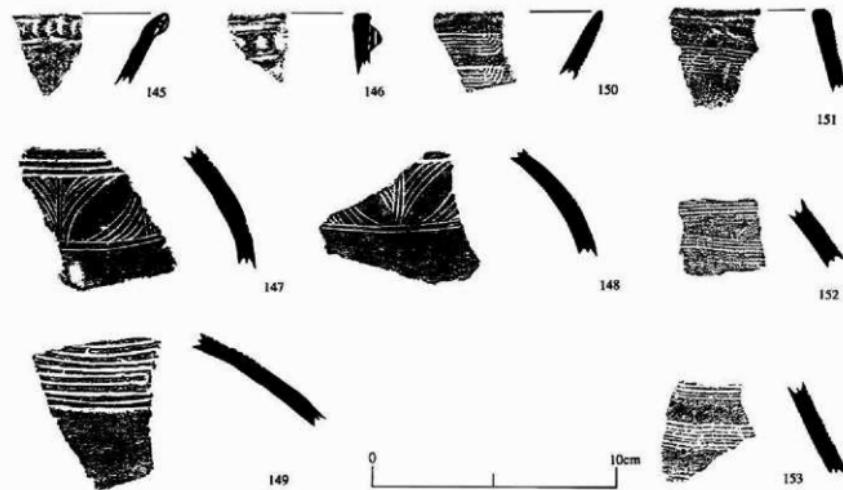


图 1.22 No. 2 地区溝 7 埋土内出土土器拓影

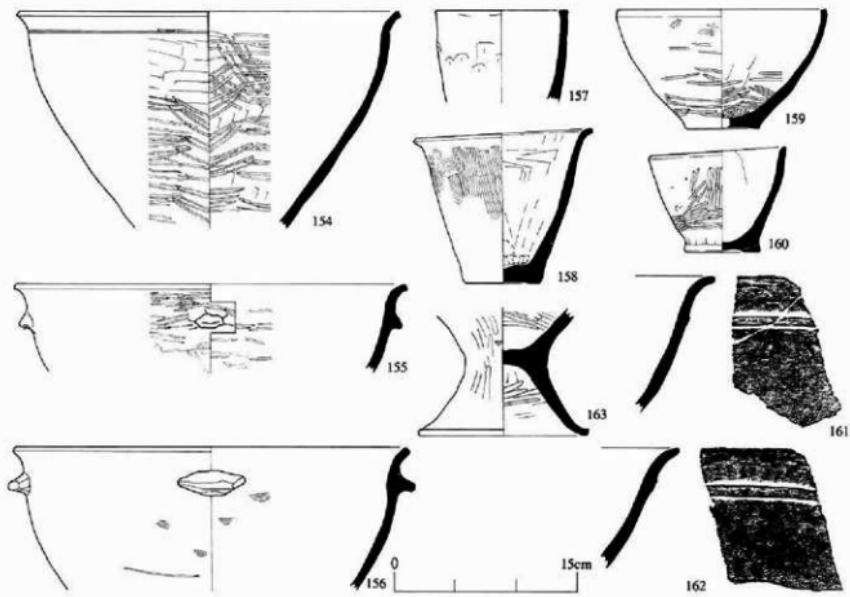


图 1.23 No. 2 地区溝 7 埋土内出土鉢

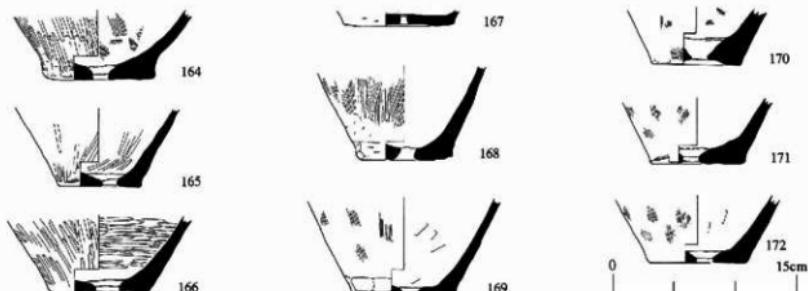


図1.24 No. 2地区溝7埋土内出土底部穿孔土器

80は胴上半部の頸側を削って段をなし、その下に沈線と貼り付け文を施している。

81～83・85・87は、頸部と胴上半部に3～5条の沈線を有するもので、87は大頭の広口壺で搬入土器である。

92はやや長い頸部に3条の沈線のある2帯の削り出し突帯、胴上半部に2段の6条沈線帯があり、各帯間に斜状の波形文を施している。

84・89～91・93～97は、口縁が大きく広がり、頸・胴部に貼り付け突帯を有するものである。84は幅広で沈線文様があり、搬入土器である。84以外は細い数本の突帯を有し、89～91はO字状の刻目、93～97は小V字形の刻目、内に刺突文を施している。88・96は搬入土器である。

蓋は、傘状を呈するもの（98～102・107・110・111）、環状のつまみを持つもの（104）、二股に枝分かれした角状の突起を有するもの（102・103・105・106）－102は外面一帯に突起を貼り付けている一がある。100・103・110は搬入土器である。

108・109は頂部が平坦で大きく据広がりのもので、窓の蓋である。

壺は口縁部の刻目の有無、頸部下の沈線状況、形態に分けて記す。112～114・116・119は口縁が短く外反し、端部に刻目がなく、沈線もない。116は鉢状を呈し、119は焼成時に変形した不良品である。115・117・118は口縁端部に刻目を有して沈線がない。117は口縁が強く外反し胴部も張っている。120は口縁端部に刻目、頸部に貼り付け突帯（部分的に刻目）を有し、胴部が大きく張る。121～123は口縁部に刻目、頸部に1条の沈線を有する。124～128は口縁端部に刻目、頸部に2条の沈線を有し、128は搬入土器である。127～131は頸部に3条の沈線があり、134は沈線間に刺突文を有し、132だけは口縁端部に刻目がない。140～145は口縁に刻目を有し、頸部沈線が140～142は4条（142は胴最径部にも2条）、143・144は5条である。

鉢は口縁が短く外反する大型のもの－154（頸部に1条沈線）、155・156（把手付き）、161・162（頸部下に削り出し突帯）－と、浅鉢の159・160、筒状の157、壺状を呈する158があり、163は台付鉢である。

石器はサヌカイト製の横刃型削器（198～201）・くさび型石器（203・204）などの打製石器と、他にサヌカイトの石核・剥片が出土した。

土製品では、土偶（196）—いわゆる「台式土偶」—、紡錘車（190）、円板形土製品（191～195）、壺・壺などのミニチュア土器（181～185・187～189）が出土した。

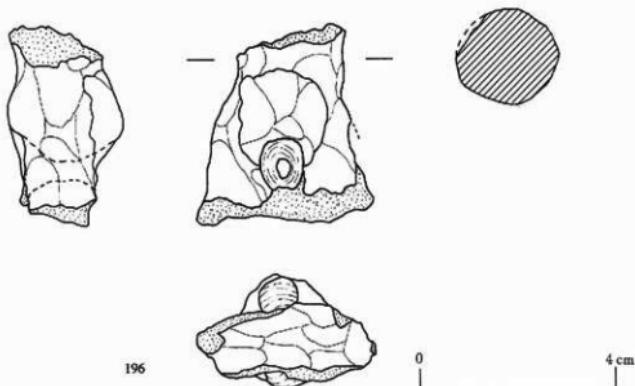


図 1.25 No. 2 地区溝 7 出土土偶

堆積層内出土遺物（図 1.26～28）

堆積層はシルト・砂・礫の層で、特に h'（暗オリーブ灰色細粒砂～中疊）・i（黒色シルト～細粒砂）からは、広口壺（173～176）・小型浅鉢（178）・壺（177）・壺（179・180）、ミニチュア土器の壺（186）、磨製一砂岩一の叩き石（197）、サヌカイトの剥片などが出土した。

溝 7 内出土の土器の大半は前期のもの（畿内第 I 様式中段階～新段階）であるが、埋土内からは II 様式の土器（150～153）も少量出土しており、溝 7 は前期中葉から後葉のものであるが、完全に廃絶したのは中期前葉頃と思われる。

溝 8 は、調査地の南端部ではほぼ南東～北西に延びる溝の北肩などを検出した。検出の幅 0.6～0.8m、深さ 0.25～0.4m を測る。溝内は黒色シルト～細粒砂で、出土遺物（図 1.29）は、壺（205～209）・壺（210～212・216）・鉢（215）などの土器片、円板形土製品（216）などがあり、207・213・215 は敷入土器である。213・215 は中期の土器で、溝は弥生時代前期からのものであるが、廃絶した時期は中期前半と考えられる。

落ち込みは、調査地西南端で北東側の肩の一部を検出した。北側は溝 8 によって切られている。検出の最大の幅 0.9m、深さ 0.14m を測る。落ち込み内から遺物はほとんど検出されなかった。弥生時代前期。

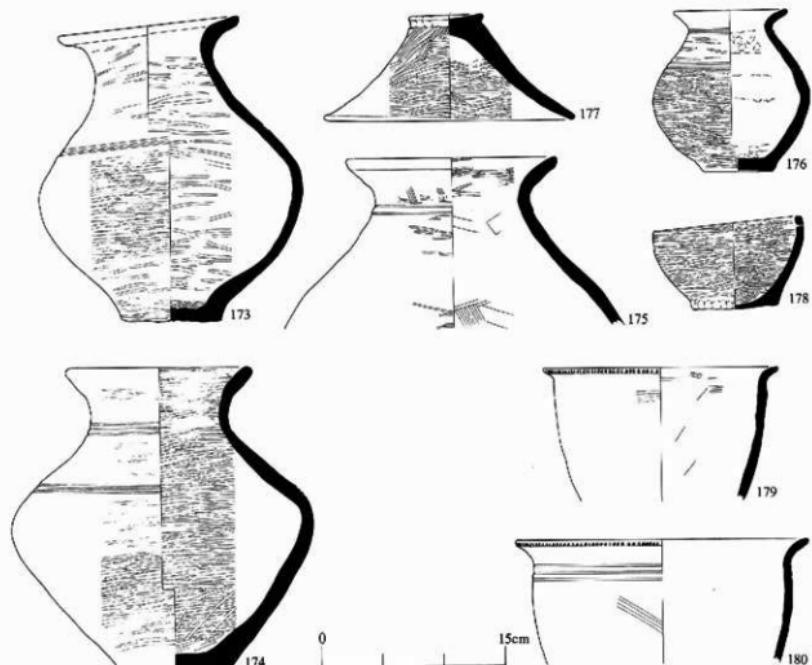


図1.26 No. 2地区溝7堆積土内出土土器

#### 第4遺構（図1.9）

第20層上面において溝1条（溝9）とピット1を検出した。

溝9は、ほぼ南から北方向に延びる溝で、西肩から底部付近まで検出されたが、東肩側は溝7によって切られていた。深さ0.6～1m、復元幅2.2m（検出幅1.8m）を測り、断面は逆台形状を呈して、西斜面は二段になっていた。溝内は一～五の5層に分かれ、一の黒色シルト～粘土は埋上層で、二～五は砂を主体とする堆積層である。

出土遺物（図1.30）は、壺（219～221）・蓋（218）・甕（222）などの弥生土器などがあり、221は搬入土器である。弥生時代前期中葉の溝であるが、短期間で埋没したため北側に改めて溝7が形成された。

ピットは平面不整の円形を呈し、径0.2m、深さ0.09mを測る。ピット内から遺物は出土しなかった。弥生時代前期。

#### 第10～11層出土遺物（図1.31・32）

第10層は暗オリーブ灰色極粗粒砂～細砾、第11層は黄褐色シルト～中粒砂と両層とも自然流路内の堆積層である。この層内からは、滋賀里IIIb～IVの

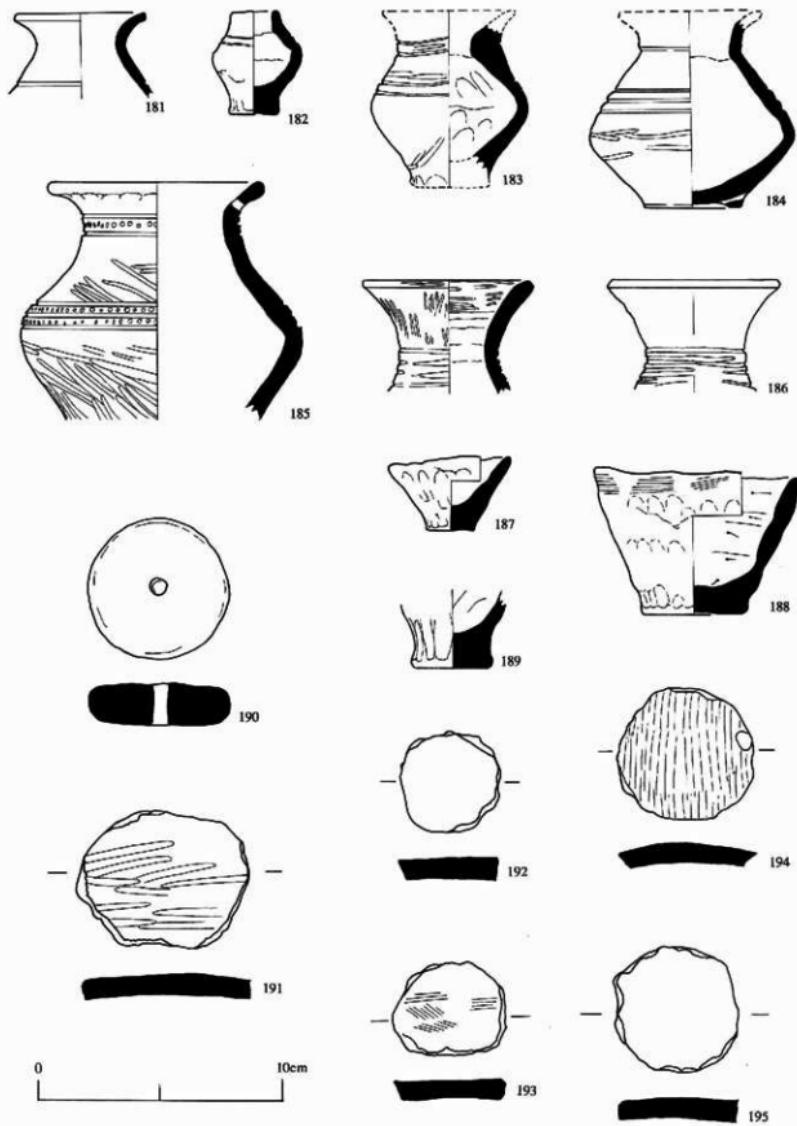
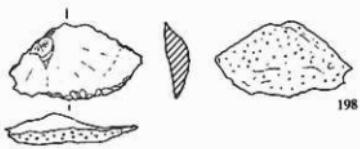
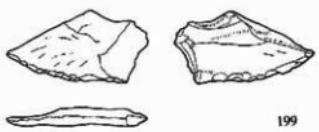


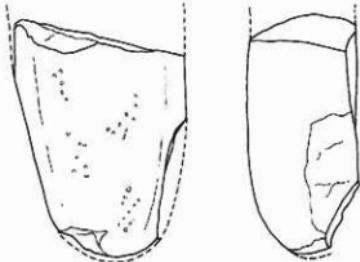
図 1.27 No. 2 地区溝 7 内出土土製品



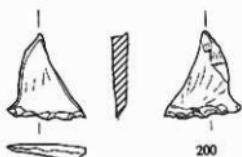
198



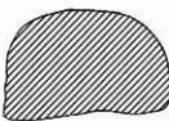
199



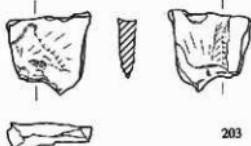
197



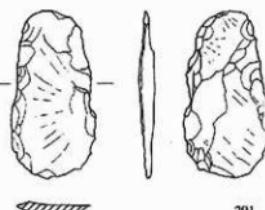
200



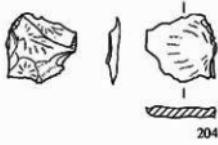
201



203



202



204

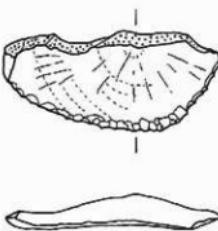


图 1.28 No. 2 地区沟 7 出土石器

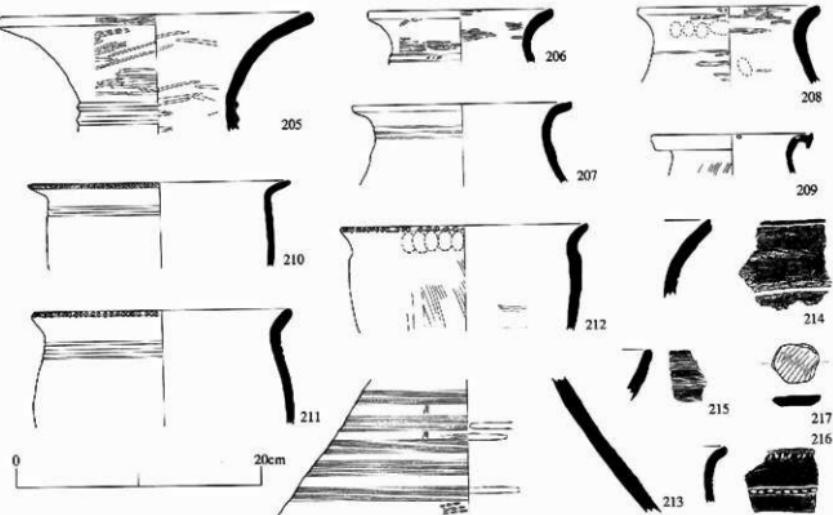


図 1.29 No. 2 地区溝 8 出土土器・土製品

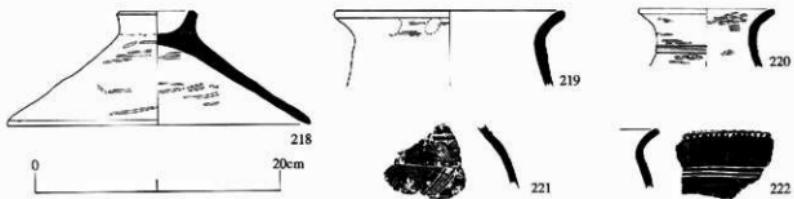


図 1.30 No. 2 地区溝 9 出土土器

粗製深鉢（229～232・245～249・252・253など）、粗製鉢（223・224）、黒色磨研浅鉢（225・226・239～243）、突帯文土器の深鉢（227・228）と壺形（244・253）などの縄文土器片が出土した。いずれの土器もほとんどローリングを受けていないことから、近辺にこの時期の集落があったと考えられる。

#### 立会調査

No. 2～No. 3 地区間の開削工事では、深度が弥生時代の堆積層に達しなかったため立会調査となり、地層の確認だけを行った。

地表下 80～120cm は盛土、その後層厚 30cm の細疊混じりシルト質粘土層、層厚 0～30cm の砂疊層、層厚 20～40cm の細疊混じりシルト質粘土層、砂疊層が続いていた。遺構は確認されず、少量の遺物が出土したが、各層の時期を

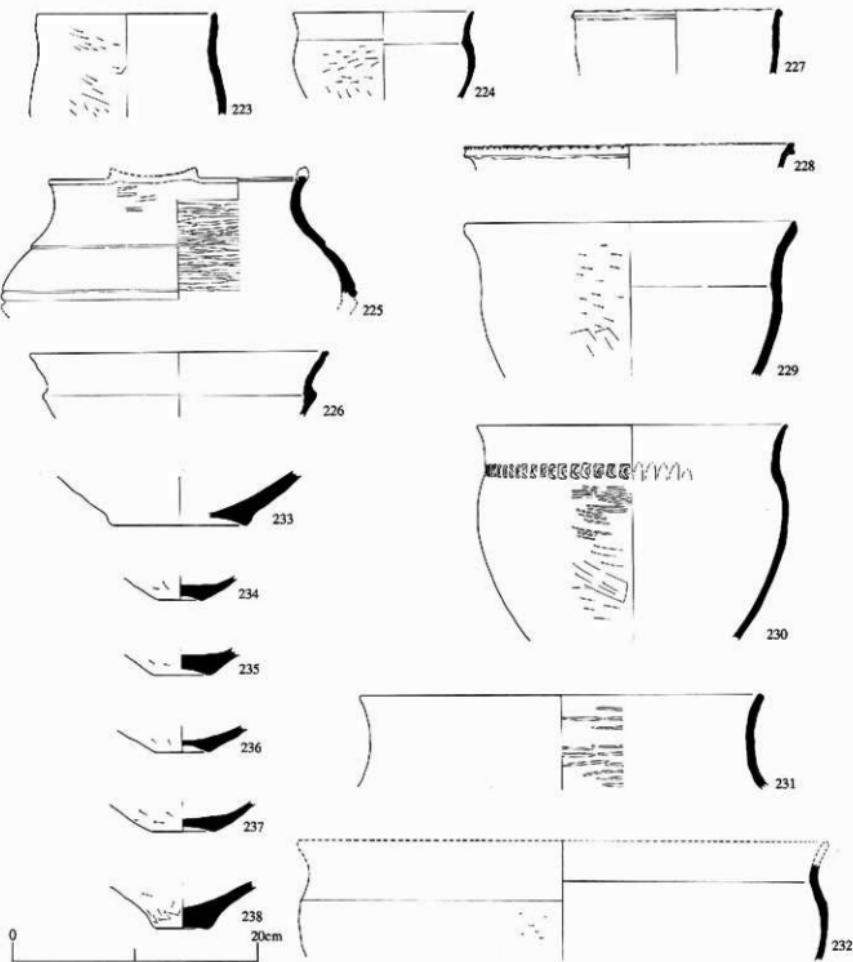


図 1.31 No. 2 地区出土縄文土器

特定できるものはなかった。

No. 3 地区では砂礫層の下で弥生時代の包含層を確認し、体部に円形浮文を施した中期の壺が出土した。

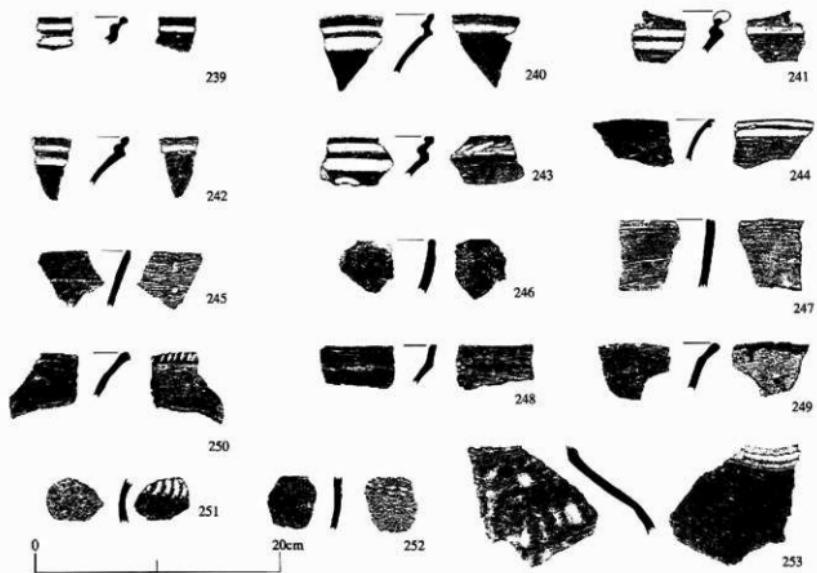


図 1.32 No. 2 地区出土縄文土器拓影

## 1.4 鬼虎川遺跡出土の哺乳動物遺体

大阪市立大学第二解剖学教室 安部きみ子

弥生時代前期から古墳時代にかけて出土した哺乳類はイノシシとシカのみであった。出土骨片は弥生時代前期から中期前葉にかけてのNo. 2 地区溝7からの出土が最も多く、イノシシ、シカとともに最小個体数は2であり、出土部位は頭蓋骨を除くほぼ全身が出土している。弥生時代中期の層からはイノシシの肩甲骨と中手骨または中足骨の一部が、シカでは下頸骨と距骨、踵骨がそれぞれ1片出土しているのみである。古墳時代後期の層からは骨片が出土しているが、種も部位も同定できなかった。

地区	出土層	時期	種名	左右	出土部位	計測値および備考	
No.1	ピット2	弥生中期	イノシシ	右	肩甲骨	関節窓	
No.1	ピット7	弥生中期	不明		骨片		
No.1	第3層	弥生中期	不明			骨角器？	
No.1	第3層	弥生中期	不明				
No.2	漆1	古墳後期	不明		骨片		
No.2	溝7	弥生前期～中期	イノシシ	—	頸椎	後弓	
No.2	溝7	弥生前期～中期	イノシシ	不明	中手骨 or 中足骨	逆位端	
No.2	溝7	弥生前期～中期	シカ	R	頭骨		
No.2	溝7	弥生前期～中期	不明		骨片		
No.2	溝7	弥生前期～中期	不明		骨片		
No.2	溝7	弥生前期～中期	不明		頭骨片		
No.2	溝7	弥生前期～中期	不明		骨片		
No.2	第7	弥生前期～中期	不明		骨片		
No.2	第7	弥生前期～中期	イノシシ	L	上腕骨	骨頭と大結節	
No.2	第7	埴輪層	弥生前期	イノシシ	L	脛骨	逆位部
No.2	溝7	埴輪層	弥生前期	シカ	L	恥骨	近位端
No.2	溝7	埴輪層	弥生前期	シカ	L	恥骨	逆位端
No.2	溝7	埴輪層	弥生前期	シカ	R	月状骨	
No.2	溝7	埴輪層	弥生前期	シカ	R	手の舟状骨	
No.2	溝7	埴輪層	弥生前期	シカ	L	大趾骨	骨幹
No.2	溝7	埴輪層	弥生前期	不明	骨片		
No.2	溝7	埴輪層	弥生前期	不明	骨片		
No.2	溝7	埴輪層	弥生前期	不明	不明	中趾骨	
No.2	溝7	埴輪層	弥生前期	不明	骨片		
No.2	溝7	埴輪層	弥生前期	不明	骨片		
No.2	溝7	埴輪層	弥生前期	不明	頭骨片		
No.2	溝7	埴輪層	弥生前期	不明	指骨	幼体	
No.2	溝7	埴土	弥生前期	シカ	不明	臼齒	未断出
No.2	溝7	埴土	弥生前期	シカ	R	人頭骨	逆位
No.2	溝7	埴土	弥生前期	シカ	L	踵骨	
No.2	溝7	埴土	弥生前期	シカ	L	大脚骨	逆離骨質
No.2	溝7	埴土	弥生前期	シカ	L	骨片	
No.2	溝7	埴土	弥生前期	シカ	L	長骨	
No.2	溝7	埴土下層	弥生前期～中期	イノシシ	L	下顎骨	犬齒歯槽部の後縫からPm1まで
No.2	溝7	埴土下層	弥生前期～中期	イノシシ	不明	下顎骨	臼齒歯槽部 犬臼歯の歯根は残存
No.2	溝7	埴土下層	弥生前期～中期	イノシシ	左右	下顎骨	1歯木洞 Pm 4乳齒
No.2	溝7	埴土下層	弥生前期～中期	イノシシ	不明	中手骨 or 中足骨	逆離遠位端
No.2	溝7	埴土下層	弥生前期～中期	シカ	L	上腕骨	逆位端内側上顎
No.2	溝7	埴土下層	弥生前期～中期	シカ	R	焼骨	逆離遠位端
No.2	溝7	埴土下層	弥生前期～中期	シカ	R	手の舟状骨	
No.2	溝7	埴土下層	弥生前期～中期	シカ	R	跖骨	一部
No.2	溝7	埴土下層	弥生前期～中期	シカ	L	第2-3根状骨	
No.2	溝7	埴土下層	弥生前期～中期	シカ	不明	中手骨 or 中足骨	遠位の一部
No.2	溝7	埴土下層	弥生前期～中期	シカ	不明	中手骨 or 中足骨	遠位の一部
No.2	溝7	埴土下層	弥生前期～中期	イノシシ or シカ	—	胸椎	椎体
No.2	溝7	埴土下層	弥生前期～中期	イノシシ or シカ	—	腰椎	椎体

No.2	渠7 球土下層	弥生前期～中期	不明	長骨	
No.2	渠7 球土下層	弥生前期～中期	不明	骨片	
No.2	渠7 球土下層	弥生前期～中期	不明	骨片	
No.2	渠7 球土下層	弥生前期～中期	不明	骨片	
No.2	渠7 球土下層	弥生前期～中期	不明	長骨片	
No.2	渠7 球土下層	弥生前期～中期	不明	骨片	
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	イノシシ	R	下頸骨 下顎角の一部 焼けている
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	イノシシ	左右	下頸骨 切歯部
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	イノシシ	R	尺骨 滑車切痕部
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	シカ	第1胸椎	椎体 後椎体軸遊離で無し
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	イノシシ or シカ	右	後頸骨 後張筋
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	不明	長骨片	
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	不明	骨片	
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	不明	骨片	
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	不明	骨片	
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	不明	頭骨片	
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	不明	頭骨	椎体
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	不明	大顎骨	滑車の一端
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	不明	長骨	
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	イノシシ	—	胸椎 部位不明
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	不明	骨片	
No.2	渠7 球土上層	弥生前期～中期	不明	中手骨 or 中足骨	遠位遠位端
No.2	渠7 球土上層	弥生中期	イノシシ	—	前臼長 37.53mm Pm2-M3 は斜状 Pm2,3 は原形なし
No.2	渠7 球土上層	弥生中期	シカ	R	下頸骨
No.2	渠7 球土上層	弥生中期	シカ	R	距骨
No.2	渠7 球土上層	弥生中期	シカ	R	遠骨 体部破損
No.2	渠7 球土上層	弥生中期	不明	骨片	
No.2	渠7 球土上層	弥生中期	不明	骨片	
No.2	渠7 球土上層	弥生中期	不明	骨片	
不明			不明	距骨	一部
不明			シカ		
不明			不明		

表 1.1 出土動物遺体同定結果一覧表

出土部位	左右	弥生前期～中期	弥生中期	弥生中期～中期	弥生中期
		イノシシ	シカ	シカ	シカ
下頸骨	右	2*			1
	左	2*			
臼齒	—	1			1
頸椎	—	1			1
第1胸椎	—	1			1
鎖骨	—	1			1
肩甲骨	右		1		1
上腕骨	左		1		1
尺骨	右	1			1
橈骨	右		1		1
月状骨	左		1		1
手の舟状骨	右		2*		
小豆形骨+舟状骨	左	1			1
大顎骨	右		1		1
脛骨	左		1		1
脛骨	左	1			1
踵骨	右		1		1
踵骨	左		2*		1
距骨	右		2*		1
足の舟状骨	右	1			
立脚骨	右	1			
第2・3脚状骨	左	1			
中手骨 or 中尾骨	不明	2	1	2	

\*は小個体数

表 1.2 動物遺体出現頻度表

## 1.5 鬼虎川遺跡第40次調査の古環境復元

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

鬼虎川遺跡は生駒山西麓の沖積低地に立地する、弥生時代前期～中期の集落遺跡を主とする遺跡である。今回の第40次調査区の発掘調査では、弥生時代前期の溝などの構造が確認されており、当時の人の土地利用状況に関する情報が蓄積されてきている。

このような低地における人の活動史を捉える上で、調査域の過去の地理的環境を復元することは重要な課題である。そこで、今回の調査では第40次のNo.2調査区における当時の古環境、および溝の状態に関する情報を得る目的で珪藻分析・花粉分析を実施する。

### 1. 試料

調査は、No.2調査区南西断面の弥生時代中期の遺物を包含する層から下位の堆積物と、南東断面で観察された溝埋積物について実施する。

南西断面では、T.P.1.0m～約3.6mまでの厚さ2.5mほどの土層断面が観察される。土層は色調・土質などの特徴により細かく区分されているが、調査した土層断面において、ほぼ水平な堆積層として捉えることが出来る。発掘時の所見では、盛り土下のT.P.2.8m付近は古墳時代後期以降、T.P.2.5m付近は弥生時代前期～中期と推定されている。試料は、T.P.1.1mからT.P.約2.6mの弥生時代前期～中期と推定される土層とその下位堆積物から、10試料（上位より試料番号1～10）が採取された。

南東断面で観察された溝7と9は、切り合い関係から、一度埋没した後、同じ場所に構築されていることが推定される。いずれの溝も弥生時代前期に掘削され、溝9は前期内に、溝7は中期前葉に埋没したと推定されており、縄文時代晩期と推定される堆積層を切って構築されている。試料は、溝埋積物より採取された10試料（上位より試料番号11～20）である。試料番号18～20は最初の溝9の埋積物、試料番号17～11は埋没後に構築された溝7の埋積物である。

### 2. 分析方法

#### （1）珪藻分析

湿重約10gの試料をビーカーに秤りとり、過酸化水素水と塩酸を加えて加熱しながら泥化および有機物の分解・漂白を行う。分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去する。この操作を4～5回繰り返す。次に、L字形管分離で砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈したうえでカバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体を目安に同定・計数した。なお珪藻殻が半分以上破損したものについては同定・計数は行っていない。珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt(1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot(1986～1991)、Desikachary(1987)などを参考にした。

同定結果は、珪藻の塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類して表に示す。

珪藻化石群集変遷図は、100個体以上検出された試料について、産出した珪藻種の頻度を固化し、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度についても図示した。また、珪藻は一般には水域（水中）に生育するが、一部に好気的環境（直接大気に曝された環境）に生育する種群が認められ、これらを陸生珪藻と呼んで区別している。本分析では、水生珪藻と陸生珪藻の区分を明確にし、それらの比率についても図に示した。なお、陸生珪藻は、伊藤・堀内（1991）の区分に従い、A群、B群およびその他の3つに区分している。

#### (2) 花粉分析

試料を湿重で約10g秤量し、水酸化カリウム処理、簡別（250μm）、重液分離（臭化亜鉛、比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸=9:1）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類(taxa)について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の変遷図として表示する。図中の各種類の割合は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフン（-）で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

### 3. 結果

#### (1) 硅藻化石

珪藻分析を行った20試料のうち、18試料からは珪藻化石を認めたが、南西断面下部の試料番号8・9の2試料については皆無であった。100個体以上検出をみた試料は南東断面溝状堆積物の最上部にあたる試料番号11・12の2試料のみで、南西、南東両断面の他の試料からは低率にしか検出されない（表1.3・図1.33）。

検出された珪藻化石は、若干の海水生種、海水～汽水生種を含むものの、大半は淡水生種で構成される。珪藻化石が比較的多く検出された試料の淡水生の群集の特徴については、生態性（珪藻の3つの適応性：水中の塩分・pH・流水に対する適応性）について整理してみた場合、以下のような傾向が認めら

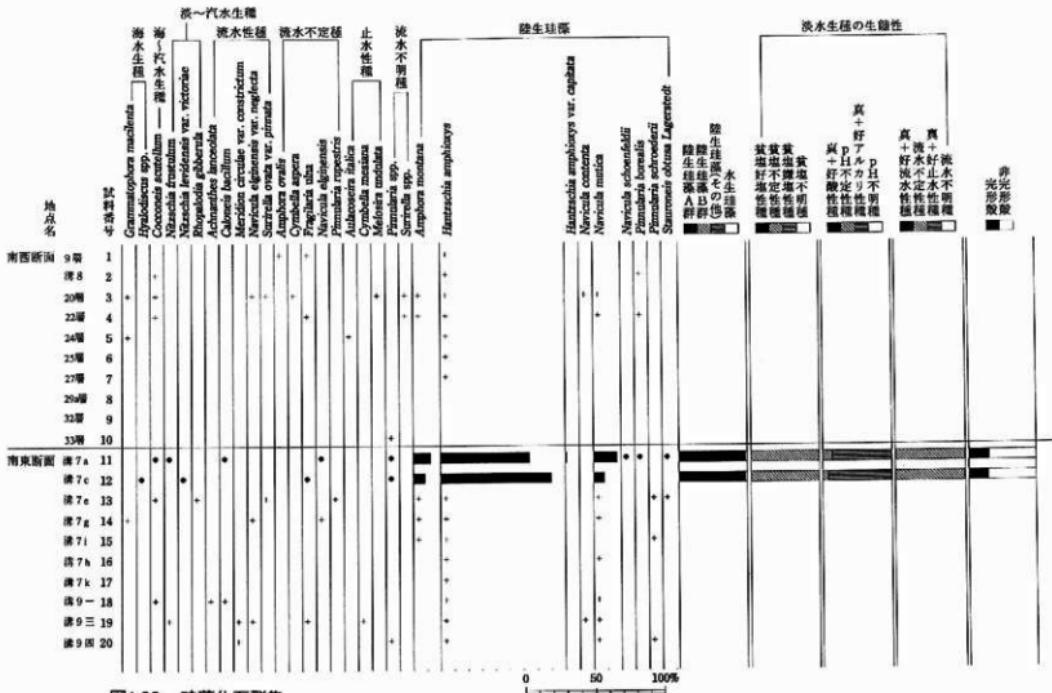


図1.33 珪藻化石群集

海水-汽水-淡水生種出率・各種産出率・完形殻産出率は全體基數、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基數として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

表1.3 珪藻分析結果

種類	生長性	環境	南西新面										南東新面												
			温分	pH	淡水	指標種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
<i>Grammatophora aciculata</i> W. Smith	Euh	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Hyalodiscus</i> spp.	Euh	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Cocconeis scutellum</i> Ehrenberg	Euh, Meh	-	Cl	-	1	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	2	-	
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh, Meh	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Nitzschia levidensis</i> var. <i>victorinae</i> Grunow	Ogh, Meh	al-ii	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ohr.) Müller	Ogh, Meh	al-ii	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Bréb.) Grunow	Ogh, ind	ind	r-ph	K, T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Amphora aestivalis</i> Kraske	Ogh, ind	ind	ind	RA	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	26	11	6	4	1	-	-	-	-	
<i>Amphora ovalis</i> (Kuetz.) Kutzizing	Ogh, ind	al-ii	ind	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Aulacoseira italica</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh, ind	al-ii	1-ph	U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Caloneis boscii</i> (Grun.) Cleve	Ogh, ind	al-ii	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Cymbella aspera</i> (Cleve)	Ogh, ind	al-ii	ind	O, T	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Cymbella mesiana</i> Cholnoky	Ogh, ind	al-bi	1-bi	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Frangilaria ulna</i> (Nitzsch.) Lange-Bertalot	Ogh, ind	al-ii	ind	6	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ohr.) Grunow	Ogh, ind	al-ii	ind	RA, U	8	7	58	10	4	4	2	-	-	-	-	133	101	46	37	20	30	2	9	15	4
<i>Hantzschia amphioxys</i> var. <i>capitata</i> O. Müller	Ogh, ind	al-ii	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Melosira undulata</i> (Ohr.) Kuetzing	Ogh, ind	ind	l-ph	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Meridion circulare</i> var. <i>constrictum</i> (Ralfs) V. Heurck	Ogh, ind	al-ii	r-bi	K, T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh, ind	al-ii	ind	RA, T	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Navicula elginiensis</i> (Greg.) Ralfs	Ogh, ind	al-ii	ind	O, U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula elginiensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krauss) Patrick	Ogh, ind	al-ii	r-ph	U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
<i>Navicula motica</i> Kuetzing	Ogh, ind	al-ii	ind	RA, S	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	35	10	10	2	-	2	-	1	3	1
<i>Navicula schoenfeldii</i> Hustedt	Ogh, ind	al-ii	1-ph	R1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh, ind	ind	ind	RA	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh, ind	hob	ac-ii	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia schroderii</i> (Hust.) Kramer	Ogh, ind	ind	ind	R1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh, unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	-	-	-	-	2	
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh, ind	ind	ind	RR	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Suriellla ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W. Smith) Hustedt	Ogh, ind	al-ii	r-ph	U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Suriellla</i> spp.	Ogh, unk	unk	unk	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
海水生種合計					0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	
海水・汽水生種合計					0	1	3	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2	0	
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
淡水・汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3	0	0	0	0	1	
淡水生種合計					15	8	79	15	5	4	2	0	0	1	204	124	66	45	22	32	2	12	27	9	
珪藻化石総数					15	9	83	16	6	4	2	0	0	1	206	126	70	46	22	32	2	14	28	9	

## 凡例

R.R.:塩の濃度に対する適応性  
 pH:水素イオン濃度に対する適応性  
 C.R.:淡水に対する適応性

Euh:海水  
 Euh-Meh:海水生種・汽水生種  
 Euh-Ind:海水生種・汽水生種・淡水生種  
 Ogh:海水  
 Ogh-Meh:海水生種・汽水生種  
 Ogh-Ind:海水生種・汽水生種・淡水生種  
 Ogh-Hob:海水生種・汽水生種・淡水生種  
 Ogh-Hob-Ind:海水生種・汽水生種・淡水生種  
 Ogh-Hob-Unc:海水生種・汽水生種・淡水生種  
 Ogh-Unc:海水生種・汽水生種・淡水生種

C.I.:海水高塩度指標種 (以上は小杉, 1988)

K:中下層底質・河川底質種・底質付着生種 (以上は安藤, 1990)

S:砂質底質・泥質底質・軟泥質底質 (以上は安藤, 1990)

RA:陸上藻 (RA:海藻, 海:陸藻, RI:未区分海生種、伊藤・堀内, 1991)

れる（図1.33参照）。

塩分に対する適応性は、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方が良く生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いあるいは低いといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。本試料では、貧塩—不定性種で殆どが占められ、貧塩—好塩性種等は皆無に等しい。

次にpHに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。結果は、好アルカリ性種が優占し、約85%以上を占めている。好酸性種は、認められない。

流水に対する適応性は、流れのある水域の基物（岩石・大型の藻類・水生植物など）に付着生育する種群であり、特に常時流のあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。本調査では、流水不定性種が殆どを占め、好止水性種あるいは好流水性種は極めて低率にしか認められない。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区別している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。水生珪藻と陸生珪藻の比率は、全体に陸生珪藻が優占し、いずれの試料においても95%以上を占めている。水生珪藻は極めて低率にしか認められない。

南東断面の試料番号11・12の2試料からは、統計処理が有効な数量の珪藻化石が検出された。群集は、前述のように海水生種等も極めて低率に認められるものの、おむね淡水生種群といってよい。

淡水生種の中では、塩分、pHおよび流水のいずれに対しても不定であり、その多くは陸生珪藻に属す種群である。特に多産した種類は、陸生珪藻の *Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*である。これらの種の生態学的な特徴としては、一般の珪藻が水中や水底等の水中に生育するのに対して、*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*および*Navicula mutica*は、コケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壤の表層部などといった大気に直接触れるような環境に生育する一群である。このような、好気的環境に生育す

表1.4 花粉分析結果

種類	地点名	南西断面										南東断面									
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
<b>木本花粉</b>																					
モミ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ツガ属		-	-	-	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複雑管束亞属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属(不明)		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コウヤマキ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>草本花粉</b>																					
イネ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	4	1	-	-	-	4	-	-	-	-
キク亜科		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
不明花粉		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>シダ類胞子</b>																					
イノモトソウ属		4	2	2	2	1	4	2	-	1	2	-	-	-	-	1	3	-	-	-	1
ミズワラビ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のシダ類胞子		19	4	1	4	4	1	17	1	7	1	1	6	3	-	2	2	3	1	1	1
<b>合計</b>																					
木本花粉		4	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
草本花粉		0	0	0	0	0	1	0	0	0	5	4	1	0	0	0	4	0	0	0	1
不明花粉		0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子		24	6	3	6	5	5	19	1	8	3	1	6	3	0	3	5	3	1	1	2
総計(不明花粉を除く)		28	6	3	9	8	6	19	1	8	8	5	7	3	0	3	9	3	1	2	3

る種群は陸生珪藻と呼ばれ、水中に生育する水生珪藻から便宜的に区分している。特に、本試料から産出した *Hantzschia amphioxys* あるいは *Navicula mutica* 等は、離水した場所の中で、好気的なだけでなく極度の乾燥状態に耐えうることのできる種群とされる（伊藤・堀内、1989；1991）。

## （2）花粉分析

結果を表1.4に示す。分析した試料番号1～20は何れも黒褐色から黒色を帶びた植物片が数多く認められるものの花粉・胞子化石の産出が非常に少ない。産出する花粉・胞子化石としては木本花粉のモミ属・ツガ属・マツ属・コウヤマキ属・ハンノキ属、草本花粉のイネ科・キク亜科・シダ類胞子のイノモトソウ属・ミズワラビ属・属科不詳のため「他のシダ類胞子」として一括した胞子などである。

## 4. 考察

### （1）低地の古環境変遷

弥生時代前期以前の堆積物は、極僅かの珪藻化石を産出するか、無化石試料であり、僅かに南東断面の溝理積物最上部の試料番号11・12の2試料から、解析可能な量の珪藻化石が検出されたに過ぎない。この2試料から産出した珪藻化石のほとんどは、陸生珪藻に属する種群であり、全体の90%以上を占めている。このような陸生珪藻は、古環境を解析する上で極めて重要と考えられ、今回のように堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占（おおむね70～80%以上）する結果が得られた場合、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定されるとしている（伊藤・堀内、1991）。したがって、弥生時代中期前葉の溝理積物最上部は、水の影響が極めて少なく、常時空気に曝した状態にあったものと推定される。

この他の試料についても、産出をみた試料の珪藻化石は、南西、南東を問わず試料番号11および12とはほぼ同様な群集であり、好気的環境下にあった可能性が示唆される。なお、一般には、好気的環境下では、化石として残りやすい珪藻殻も分解消失しやすいことが知られており、全体に低率にしか認められないのはそのためと考えられる。このことは、調査した弥生時代前期以前の堆積物全層準を通して、好気的環境にあったことが推定される。

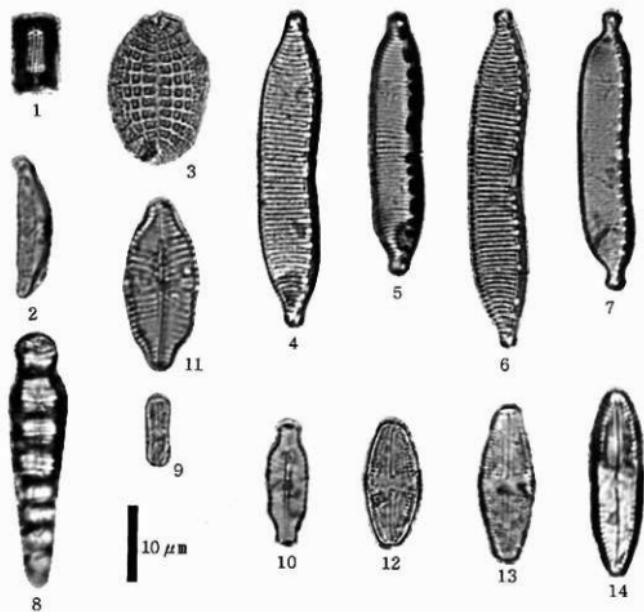
### （2）森林植生

弥生時代前期以前の堆積物から検出された花粉・胞子化石は、木本植物由来がモミ属・ツガ属・マツ属（複維管束亞属を含む）・コウヤマキ属・ハンノキ属、草本植物由来がイネ科・キク亜科・シダ類がイノモトソウ属・ミズワラビ属である。これらの種類は、本遺跡で実施されたこれまでの調査でも確認されている種類であり、当時の調査地周辺や後背の生駒山麓などに分布していたことが推定される。しかし、今回の調査では、何れの試料においても花粉・胞子化石が非常に少ないとから、森林植生やその変遷を解析することは困難である。このように花粉・胞子化石が非常に少なかった要因としては、花粉化石が酸化的な状態において分解・消失し易いことから、堆積時または堆積後に空気

にさらされるような酸化的な環境にあったことが推定される。これは、珪藻化石により推定された堆積環境を支持する結果と解釈できる。

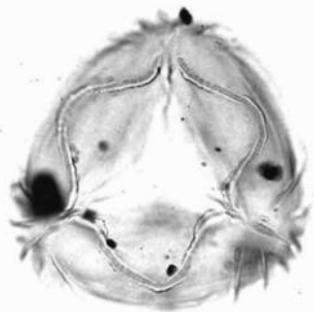
<引用文献>

- Asai,K., & Watanabe,T.(1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2)Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35-47.
- 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理, 42(1990),73 ~ 88,aNN.Tohoku Geogr.Assoc.
- Desikachari,T.V.(1987) Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation,Madras,Printed at TT.Maps & Publications Private Limited,328, G.S.T.Road,Chromepet, Madras-600044.I ~ VI.Plates:22-621A.
- Hustedt,F.(1930) Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs unt der Schweiz,7, Leipzig,Part 1,920p.
- Hustedt,F.(1937-1938) Systematische und okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra.I ~ III.Arch.Hydrobiol.Suppl.,15,131-809,15,1-155, 274-349.
- Hustedt,F.(1938) Systematische und okologische untersuchungen über der diatomeen flora von Java, Bali und Sumatra nach dem material der Deutschen limnologischen Sunda Expedition.Arch.Hydrobio I suppl.
- Hustedt,F.(1955) Marine littoral diatoms of Beaufort,North Carolina.Bull.mar.Lab.Duke. Univ.6,1-67.
- Hustedt,F.(1959) Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz.under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig,Part 2,845p.
- Hustedt,F.(1961-1966) Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichti gung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz,7, Leipzig,Part 3,816p.
- 伊藤良永・堀内誠示(1989) 古環境解析からみた陸生珪藻の検討 ーー陸生珪藻の細分ーー. 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集,17.
- 伊藤良永・堀内誠示(1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.日本珪藻学誌,6,23-44.
- 小杉正人(1986) 陸生珪藻による古環境の解析とその意義ーわが国への導人とその展望ー. 植生史研究,1,9-44.
- Krammer,K., and H.Lange-Bertalot.(1986) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa,2(1),1-876.
- Krammer,K., and H.Lange-Bertalot.(1988) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa,2(2),1-596.
- Krammer,K., and H.Lange-Bertalot.(1990) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa,2(3),1-596.
- Krammer,K., and H.Lange-Bertalot.(1991) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa,2(4), 1-596.

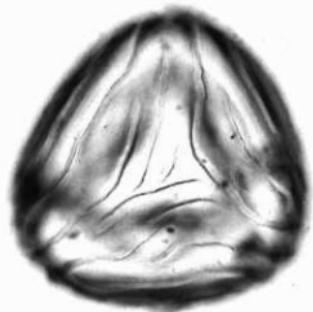


1. *Aulacosira italica* (Ehr.) Simonsen (試料番号5)
2. *Amphora montana* Krasske (試料番号10)
3. *Cocconeis scutellus* Ehrenberg (試料番号4)
4. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (試料番号10)
5. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (試料番号10)
6. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (試料番号3)
7. *Hantzschia amphioxys* var. *capitata* O. Muller (試料番号10)
8. *Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs) V. Heurck (試料番号20)
9. *Navicula contenta* Grunow (試料番号3)
10. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs (試料番号10)
11. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (試料番号14)
12. *Navicula mutica* Kuetzing (試料番号3)
13. *Navicula mutica* Kuetzing (試料番号12)
14. *Pinnularia Schroederi* (Hust.) Kramer (試料番号13)

図1.34 珪藻化石



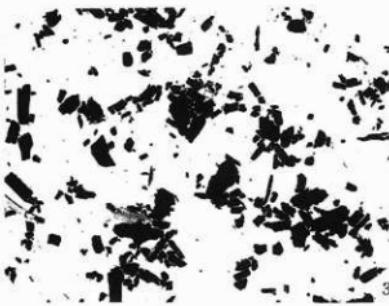
1a



1b



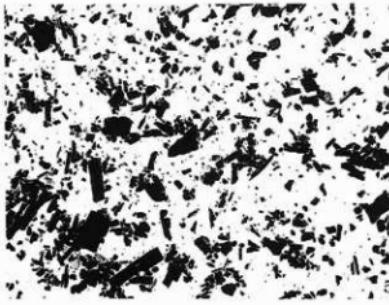
2



3



4



5

1. ミズワラビ属（試料番号1）  
3. 状況写真（試料番号7）  
5. 状況写真（試料番号13）

2. 状況写真（試料番号5）  
4. 状況写真（試料番号9）

50  $\mu\text{m}$   
(1)

100  $\mu\text{m}$   
(2-5)

図 1.35 花粉化石・花粉分析ブレバート内の状況

## 1.6 まとめ

No. 1 地区では古墳時代後期と弥生時代中期の遺構と遺物を確認した。弥生時代中期のピットが多数検出されたことから、当地点が居住域であったことが判明した。

No. 2 地区では、弥生時代前期の大溝などの遺構、前期土器などの多量の遺物を検出した。大溝は、集落を画する溝と考えられ、弥生時代前期の段階で最低2回は掘り返されていた。調査地内での大溝形成以前の状況は、南西側の第20層以下は砂・礫を主体とする層が斜状に堆積しており、これは、縄文時代晩期以前に南東から北西方向に流れていた自然流路が北西側に存在していたことを示している。大溝はこの自然流路部分を利用して、まず溝9がその流れにほぼ平行して掘削された。しかし、洪水などにより短期間のうちに埋没したため、再度溝9にはほぼ平行する形で溝7が掘削されたと考えられる。この溝7の活用時期もそれほど長くなく、中期前葉には埋没している。中期以降の遺構・遺物は少なくなり、集落の中心はNo. 1 地区方向の西および北へ移行していくと思われる。

この状況は、平成11年度に実施された北西側の第46次調査によってもほぼ確認され、さらに北東方向で行われた第45次調査においても前期の溝と遺物が検出されている。

また今回の調査で、鬼虎川遺跡では初出の土偶が検出された。この土偶は上部および両側部が欠損しているが、いわゆる「台式土偶」であり、市内では西ノ辻、鬼塚、官ノ下遺跡に続いて4例目となる<sup>注1</sup>。前3例が扁平であるのに対し、胸部は円筒状を呈し、腹部もふくらみをもって立体感があり、古型を呈している。弥生時代前期土器については第46次調査資料とともに再整理し、型式分類など、今後の課題としたい。

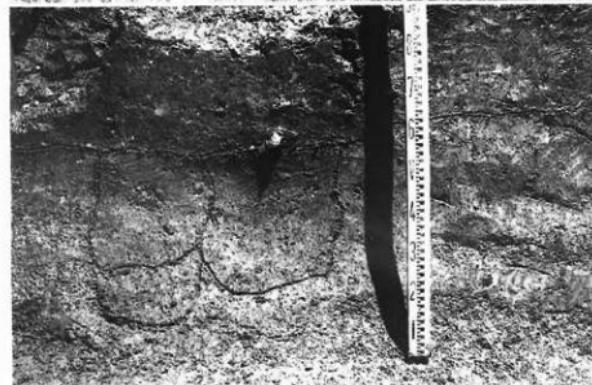
これまで鬼虎川遺跡は、特に弥生時代中期の大集落遺跡として周知されてきた。本遺跡の西端部で行われた第21次・第28次の調査で長原式の突堤式土器を主体とする（弥生前期土器を少量包含）貝塚が検出され<sup>注2</sup>、今回の調査など、遺跡南端において弥生時代前期土器を主体とする遺構・遺物が確認されたことは、本遺跡内における縄文時代晩期後半から弥生時代にわたる集落形成などの推移の状況を窺うことができる。

注1 藤城泰、三輪若葉、若松博恵「東大阪市内出土の土偶・土製品」「光陰如矢—荻田昭次先生古稀記念論集」1999 「光陰如矢」刊行会

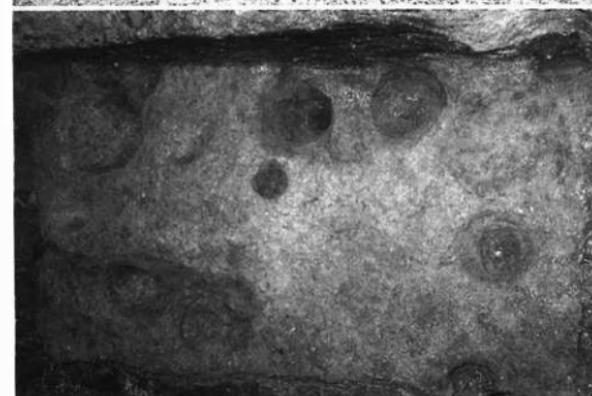
注2 「水走遺跡第3次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告」1997 財団法人東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会  
「水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告—阪神高速道路東大阪親水広ランプ建設に伴う調査一」1998 財団法人東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会



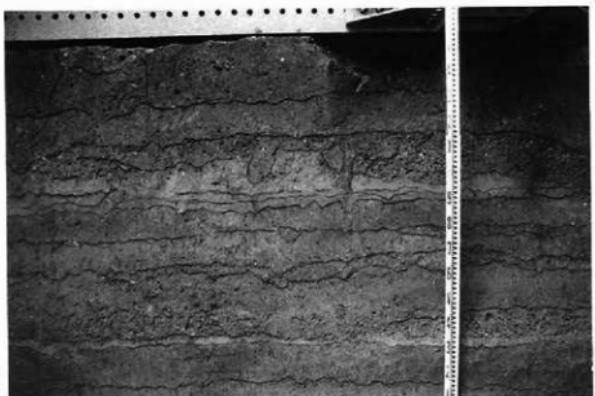
No. 1 地区  
南壁断面



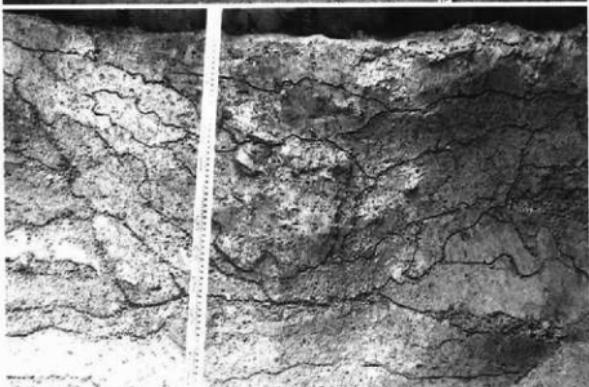
No. 1 地区  
ピット断面



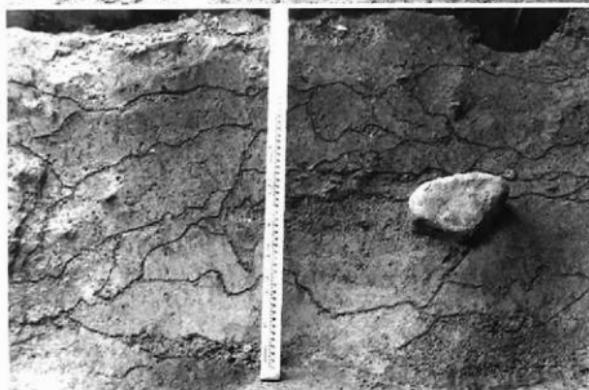
No. 1 地区  
弥生時代中期遺構



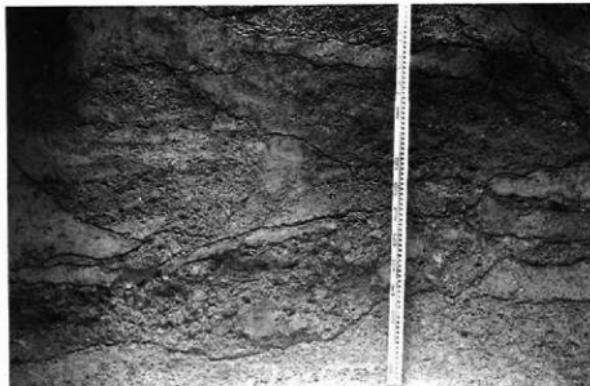
No. 2 地区  
南西壁断面



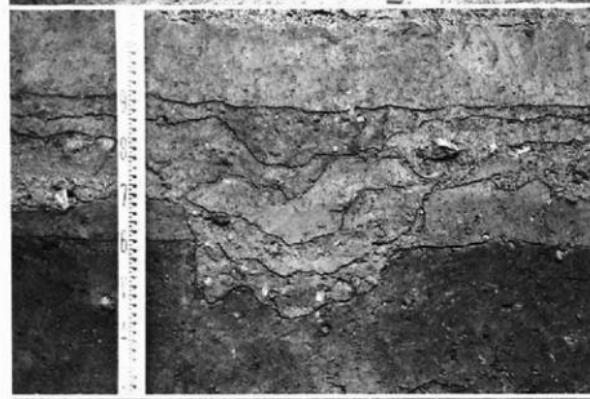
No. 2 地区  
溝 7 断面



No. 2 地区  
溝 9 断面



No. 2 地区  
南東壁断面



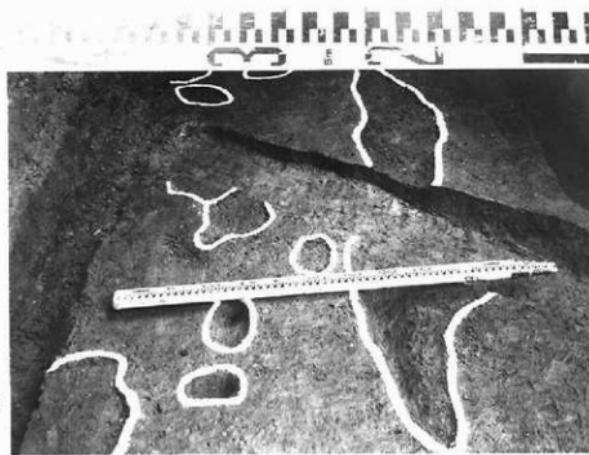
No. 2 地区  
溝 1 断面



No. 2 地区  
溝 1 底部



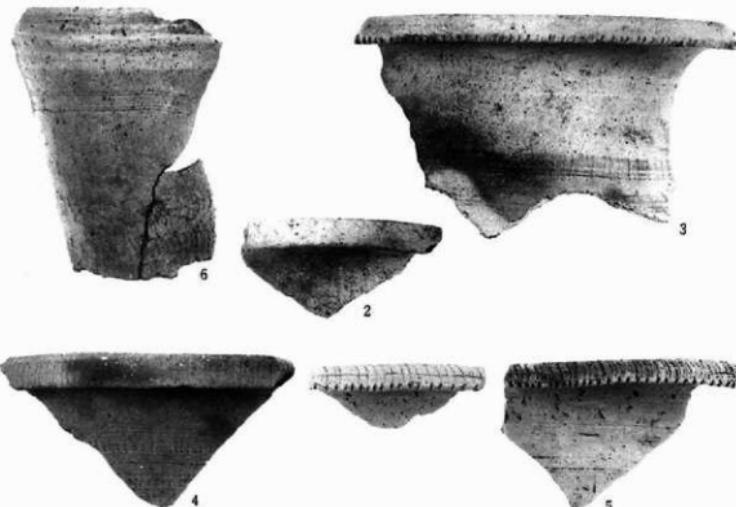
No. 2 地区  
獸骨出土狀況



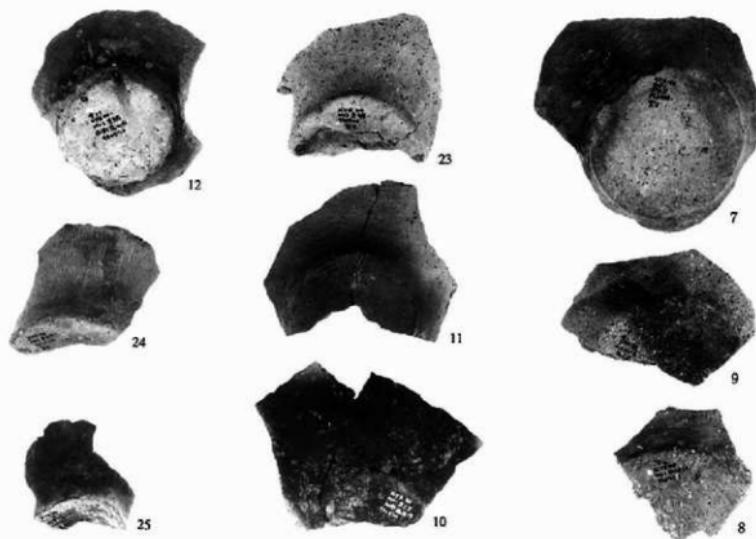
No. 2 地区  
第 2 造構



No. 2 地区  
第 4 造構



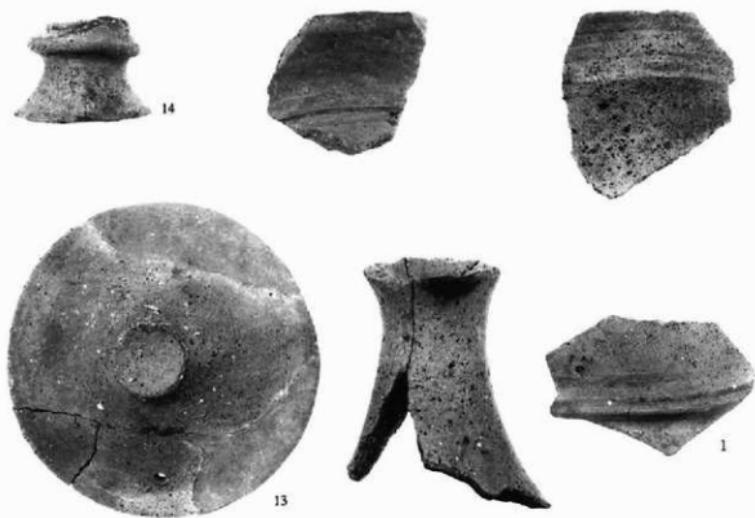
No. 1 地区出土甌



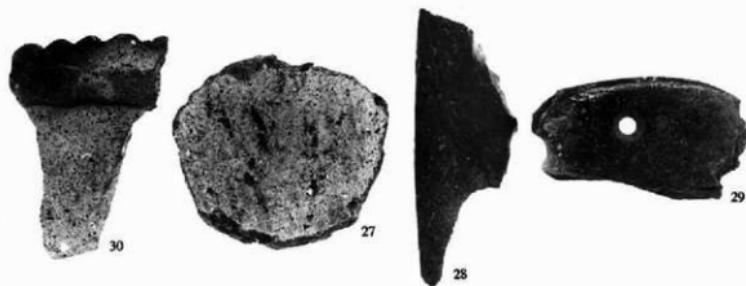
No. 1 地区出土甌·甌



No. 1 地区出土甕



No. 1 地区出土壺・蓋・高杯・埴輪



No. 1 地区出土石器・深鉢・土製品

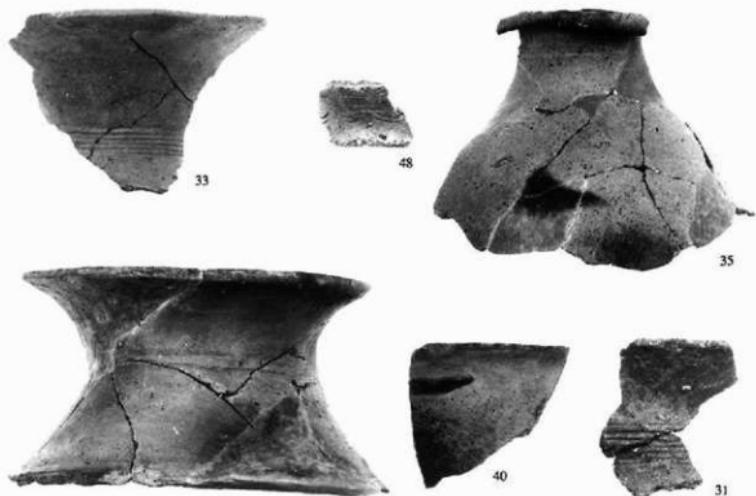


17

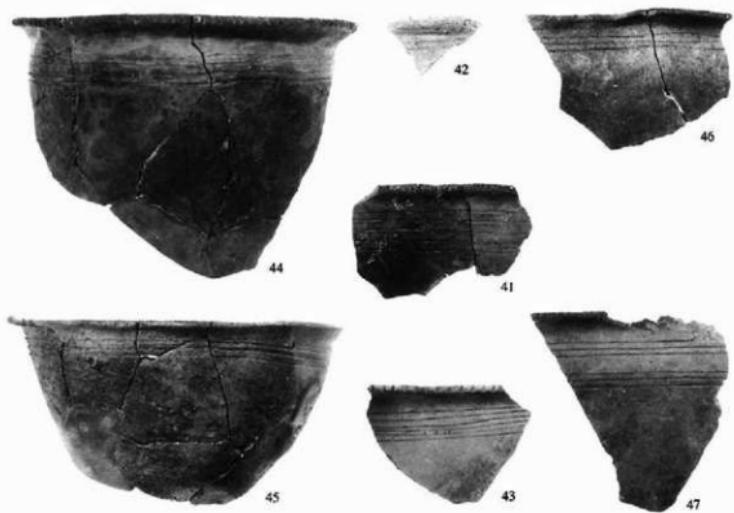


18

No. 1 地区出土甌



No. 2 地区第 9 层・溝 7 出土壺



No. 2 地区第 9 层出土壺



32



57



34



62



64

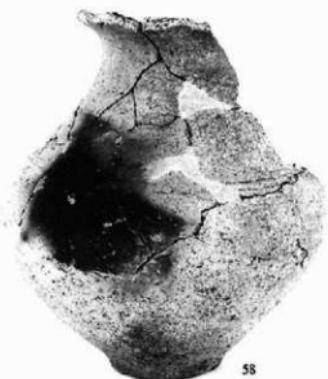


36



66

No. 2 地区第 9 层・溝 7 出土壺



58



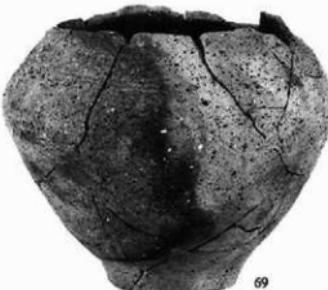
68



75



73



69



81

No. 2 地区溝 7 出土臺



63



76



77



71



72



83



74

No. 2 地区溝 7 出土壺



95



82



88



85

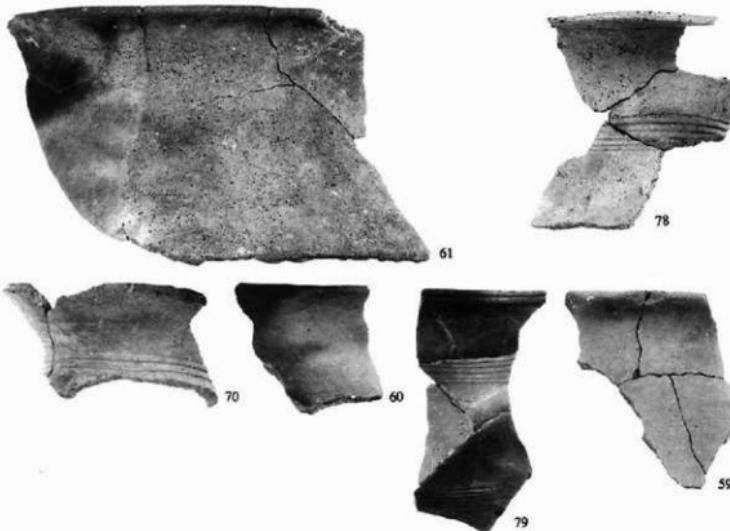


87

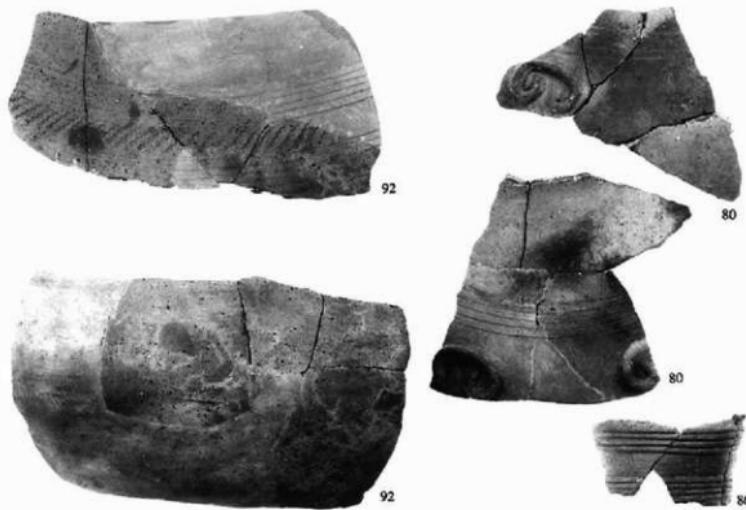


163

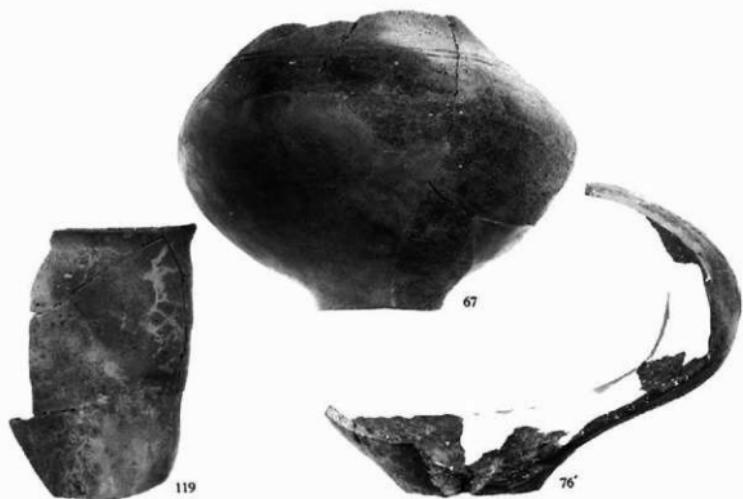
No. 2 地区溝 7 出土壺・台付鉢



No. 2 地区清 7 出土壺



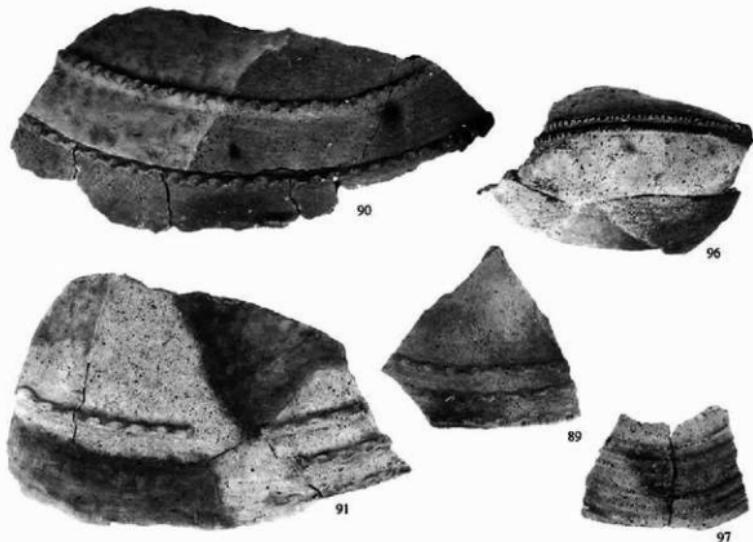
No. 2 地区清 7 出土壺



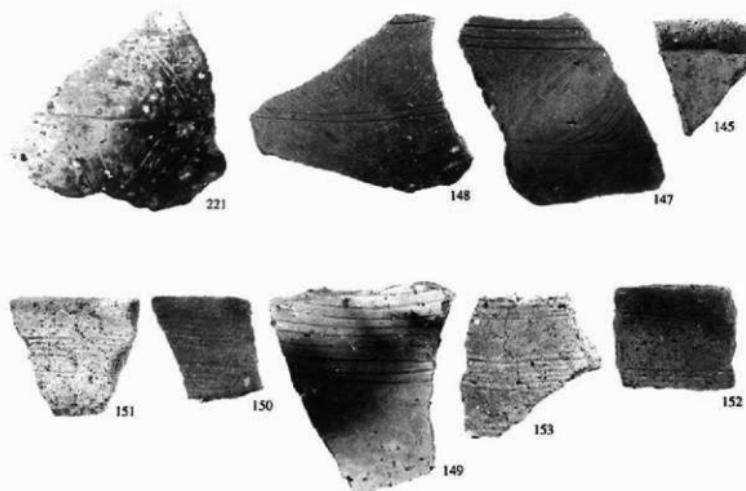
No. 2 地区清 7 出土壺・甌



No. 2 地区清 7 出土壺



No. 2 地区溝 7 出土壺



No. 2 地区溝 7 出土土器片



114



115



114



117



113



127

No. 2 地区 满 7 出土



128



131



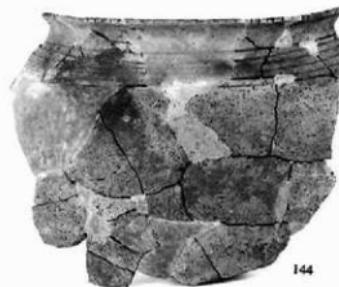
129



141

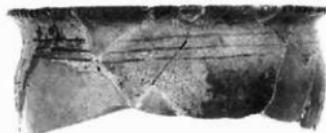


135



144

No. 2 地区溝 7 出土甕



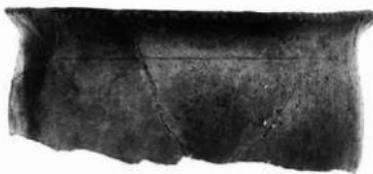
No. 2 地区溝 7 出土甕



No. 2 地区溝 7 出土甕



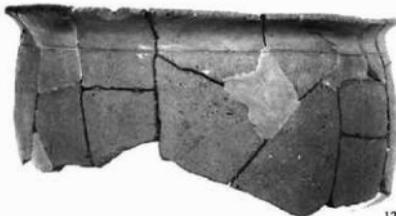
124



123



126



122

No. 2 地区满 7 出土甙



121



137



120

No. 2 地区满 7 出土甙



136



118

No. 2 地区溝 7 出土甌



116'



116

No. 2 地区溝 7 出土甌

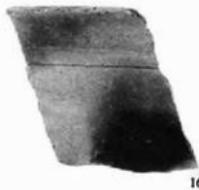


130



132

No. 2 地区溝 7 出土甕



162



161



160



157



154



156



155

No. 2 地区溝 7 出土鉢



No. 2 地区第 9 层·满 7 出土穿孔土器



No. 2 地区第 9 层·满 7 出土穿孔土器



106



104



100



109

No. 2 地区溝 7 出土蓋



107



110



111



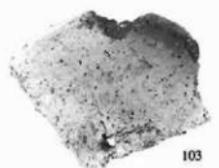
101



98



99



103



105

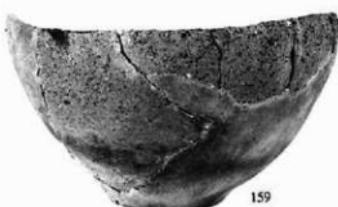


102

No. 2 地区溝 7 出土蓋



158



159



173



174



177

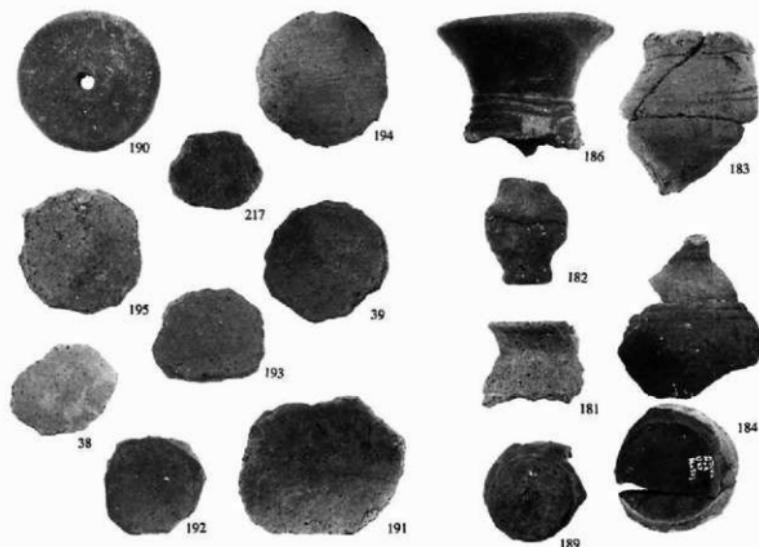


176

No. 2 地区溝 7 出土鉢・壺・蓋



No. 2 地区溝 7・溝 9 出土壺・甕



No. 2 地区第 8～9 層・溝 7 出土土製品



188



187

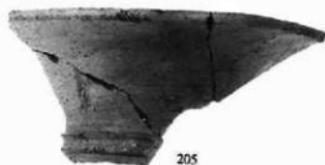


178



185

No. 2 地区満 7 出土ミニチュア土器



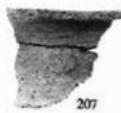
205



208



206



207



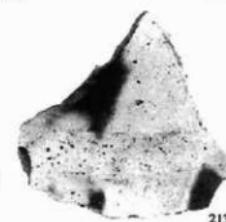
209



214



215



213



212



211



210



216

No. 2 地区満 8 出土壺・甌



196



196'



218

No. 2 地区沟 7 出土土偶

No. 2 地区沟 9 出土盖



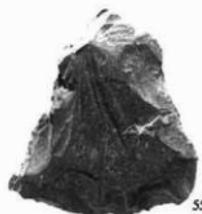
50



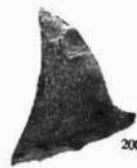
197



51



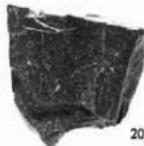
55



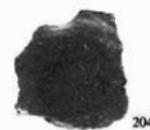
200



198



203

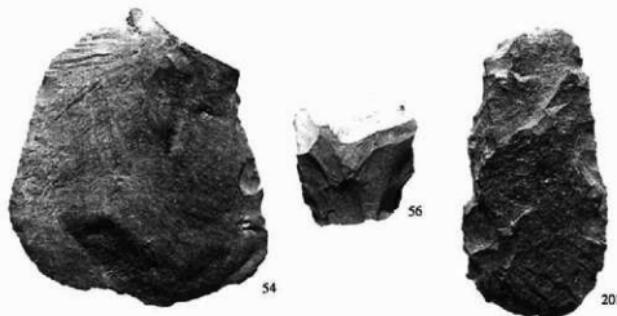


204

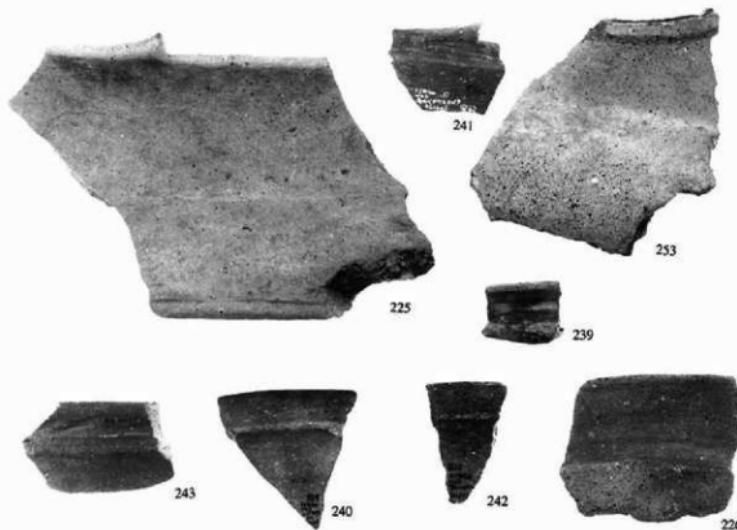


199

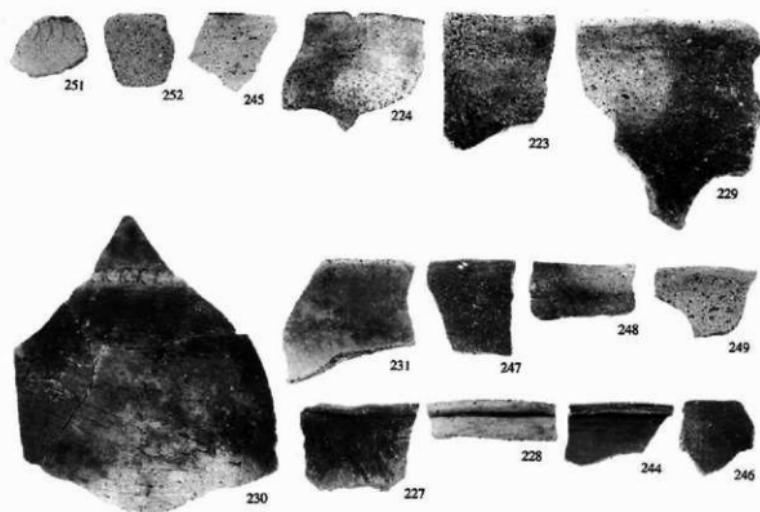
No. 2 地区第 9 层·沟 7 出土石器



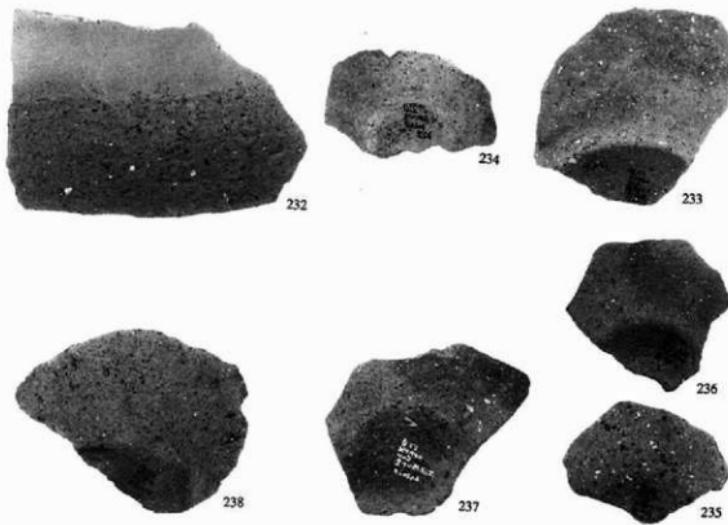
No. 2 地区第 9 层・溝 7 出土石器



No. 2 地区出土繩文土器浅鉢・壺形



No. 2 地区出土繩文土器深鉢・鉢



No. 2 地区出土繩文土器深鉢底部

## 第2章 北島遺跡第2次発掘調査報告

### 2.1 はじめに

北島遺跡は東大阪市中石切町7丁目を中心と/or>る弥生時代から近世にかけての遺跡で、1991年に同地に建設される横附ポンプ場建設に先立つ大阪府教育委員会の試掘調査で発見された。生駒山麓に発達した沖積扇状地の扇端部に近い低地面にあり、現地表面での標高は約4.5m(図2.1)。地表下約10mより上方には、縄文海進の後に累重した海成およびその上位の湖沼性堆積層がみとめられる。湖沼性堆積層の累重中には、山麓から流出した河川堆積物がときおり換まれ、耕作地を中心とする人間活動の痕跡もみとめられる。1992～1994年にはポンプ場の建設範囲約3850m<sup>2</sup>で第1次発掘調査が行なわれ、沖積低地

図2.1 北島遺跡とその周辺

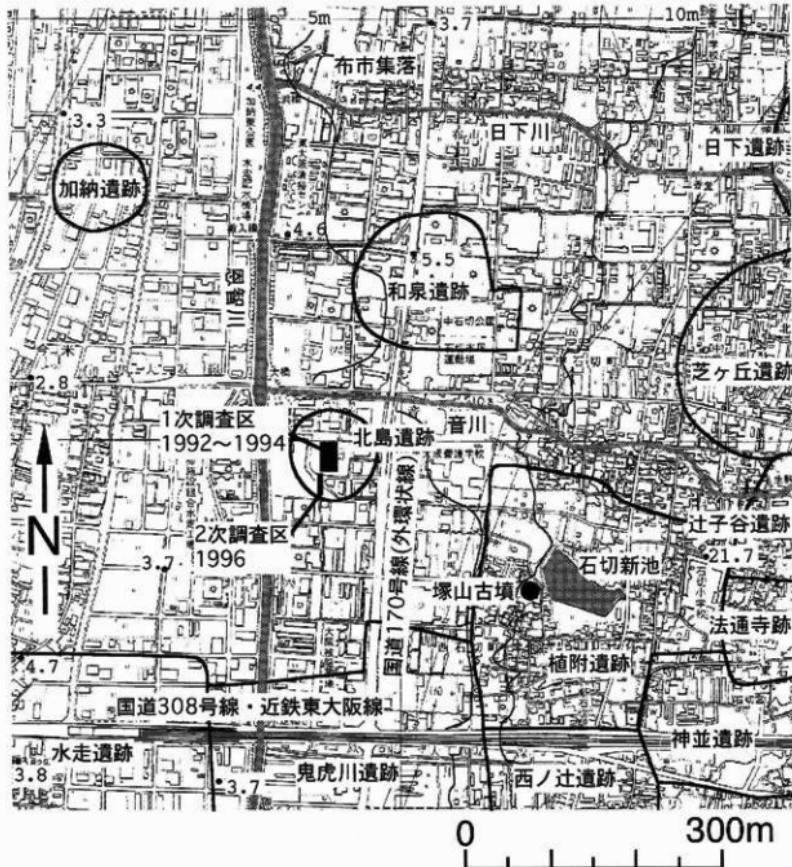




図2.2 調査地の風景。手前のトレンチが調査区(北部)。背後では北島1次調査区となった植附ポンプ場の建設が進んでいる。(北東方向を撮影。以下→NEと表記。)



図2.3 機械掘削中の調査区南半部の。→SE。



図2.4 調査区南部の機械掘削後の状況。→N。

の地形発達とともに形成された弥生時代から近世までの耕作地跡が検出された(松田・池崎他 1996 「北島遺跡の耕作地跡と古環境」,財団法人 東大阪市文化財協会)。中石町切7丁目3、4での今回の調査は、ポンプ場の南西隅に南から引き込まれる管渠建設にともなって実施され、1次調査区内で検出された遺構や堆積層の拡がりを確かめられた。ただし、本調査区は恩智川右岸の堤内地を北流し下流で同川に合流する排水路「大悪川」の流路内にあたっており、その開削によって上層の遺構はすでに破壊されていた。そのため、本調査は1次発掘調査で検出された鎌倉-室町時代の耕作土層の下面以深が調査の対象となった。なお、それより古い弥生時代までの間の耕作土層は本調査地では分布しない。

## 2.2 調査経過・方法

調査区は植附ポンプ場南西隅につながる延長62m、幅4.9mの管渠建設工事範囲であった。調査に先立って、大悪川水路底の深度を確かめる試掘調査が行なわれ、土止め・支保工後、盛土、水路底の堆積物を約3m機械掘削し、その後人力掘削を行なうことになった。機械掘削には、調査担当者が立ち会い、1997(平成9)年5月26日に開始した(図2.2~4)。人力掘削は、6月9日に開始し、7月20日まで行なった。掘削にともなって、地表下約3.5m以深で、鎌倉時代以後の耕作土層、古墳時代初期の木道跡、弥生時代中期の耕作地跡を検出した。また、本調査終了後、工事中に下層の確認を行なった。

屈曲した工事延長に沿い、10m間隔の杭を調査区西側に設置し、これらを基準に調査区内の位置関係と堆積層を記載した。国土座標は、1次調査区内に残存する基準杭を用いて、調査後に確かめられた(図2.5)。

## 2.3 層序

調査区の層序は、1次調査の層序との対比から以下のよう堆積層からなる(図2.6, 7)。

- (1) 鎌倉時代以後の砂礫質粘土質シルトからなる耕作土層  
 (2) 耕作上層下の砂礫層  
 (3) 古墳時代以後、平安時代にかけて堆積したと考えられる暗緑灰色シルト質粘土層  
 (4) (3)の下位に部分的にみられる緑灰色シルト質中粒～極細粒砂  
 (5) 古墳時代中頃までに堆積した暗緑灰色シルト質粘土層  
 (6) 弥生時代後期から古墳時代初頭の亜泥炭層  
 (7) 弥生時代中期の植物遺体のラミナを含む有機物に富む暗灰色～暗緑灰色シルト質粘土層(所によって2、3枚に分層される)  
 (8) (7)にはまれ、上石流堆積物と考えられる弥生時代中期の砂礫質シルト質粘土層  
 (9) (8)の下位にみとめられ、掃流堆積物と考えられる弥生時代中期の砂礫層  
 (10) 弥生時代前期から中期に堆積したと考えられる、植物遺体を多く含むシルト質粘土層  
 (11) 繩文時代晚期から弥生時代中期に堆積したと考えられる有機物に富む黒色シルト質粘土層  
 (12) 上面から穿たれた巣穴が特徴的で、生物擾乱やヨシの根・匍匐茎痕がみとめられる緑灰色シルト質粘土層。

以上の堆積層の累重と調査区における分布を図2.8に示す。図中の丸込みの堆積層番号は、上の記載順に対応する。

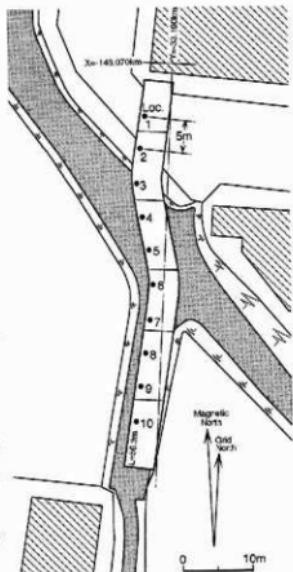


図2.5 調査区の平面形と  
調査地内の地点呼称

図2.6 北島遺跡2次調査地の  
堆積層柱状図

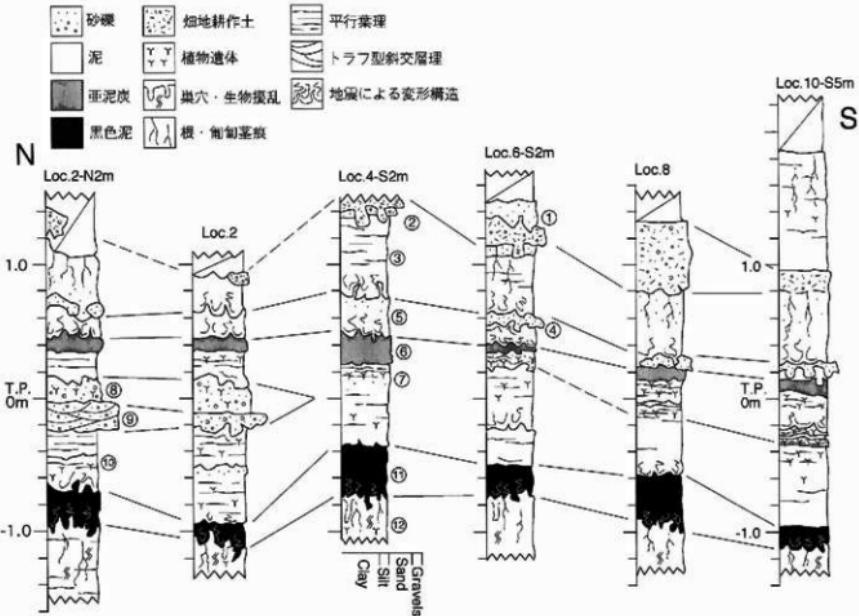




図 2.7 Loc.1 付近の堆積層断面。壁の高さは 1.6m。高さ 1.3m より上位は、現代の水路底の泥だが、写真左に砂礫質の耕作土層がみられる。1m 付近の暗色の層が(6)層。0.7～8m 付近に(8)、(9)層がみられる。下部の暗色の層は(10)、(11)層。→E。

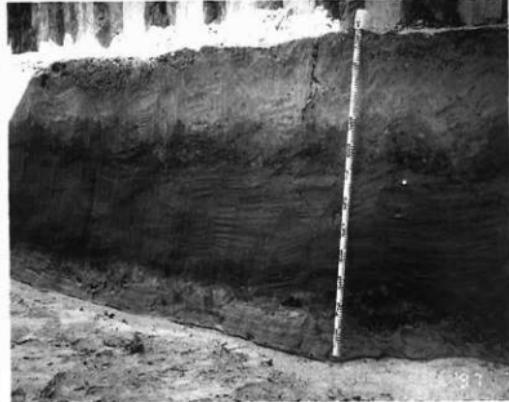


図 2.8 Loc.4-5 間の堆積層断面。壁の高さは約 1.2m。図 2.7 とほぼ同様の層序をなすが、(8)、(9)層はない。→E。

(1) の耕作土層は、調査区の中央部(Loc.4-7 付近)では、比較的残存状態が良く、より北方でも、ブロック土をなして再堆積したものが頻繁にみとめられたことから、調査地一帯が1次調査で検出された畠地に覆われていたことがわかる。調査区の南部の同一層準では、作上層の層相は顕著ではなく、砂礫の混じる水漬かりの泥層になると思われる。また、この層準は南方に向かって低くなる。

(5) の層厚は南部ほど薄く、(4)の砂が(6)の亜泥炭層に直接載る場所もみとめられた。(6)の上面の高度も南に向かって低くなっていた。(10)も、Loc.2 付近で局地的に深いが、同様であった。このことと関連して(7)は、Loc.8 以南では層中に植物遺体が密集する層準となり、またその中に明色の粘土ラミナが挟まれる。このような特徴は、河内平野中央部の同時期の堆積層でしばしばみられる。(8)、(9)は Loc.3-4 間より北の領域分布する。この下面から下位層に発達する足印が多数検出された。

#### 2.4 遺構・遺物

地表下約 3m 付近(T.P.1～1.3m)には、1 次調査で検出された耕作上層がみとめられたが、上位の水路の開削やそのしゅんせつ時の掘削で搅乱され、原位置を保つ場所でも上面が失われていたため、平面の精査は行なわなかった。ただし、Loc.4～6 付近では、耕作土層の上面は失われていたものの、(1)層とその下位の(2)層の上下関係が確かめられる場所があった。そこでは、耕作によって形成されたと考えられるピット上の擾乱が、(2)層の下の(3)層(シルト質粘土層)に達していた。

調査区南部 Loc.8 付近の(6)層上面付近から(7)層中で、調査区を東西に横切るかたちで分布する木材の列を 2 列検出した(図 2.9～11)。各列は 20cm から



図2.9 弥生時代後期の木道。右手前の杭は Loc.8。

スケールは 2m。→ S。

図2.10 木道の木材の分布

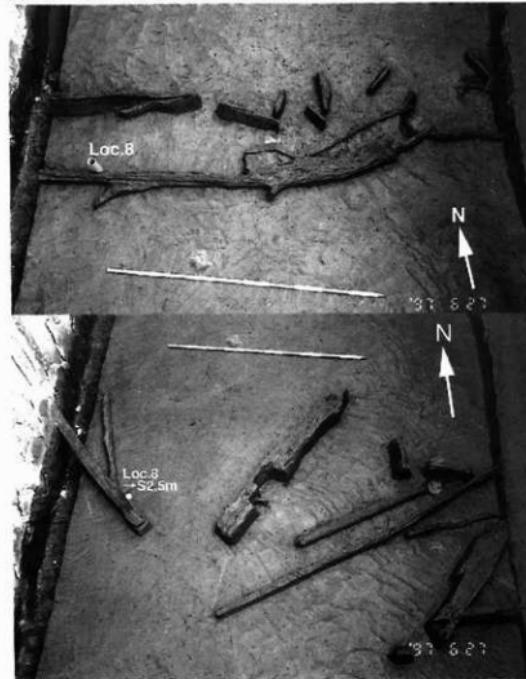


図2.9 木道の木材の種類と高さ

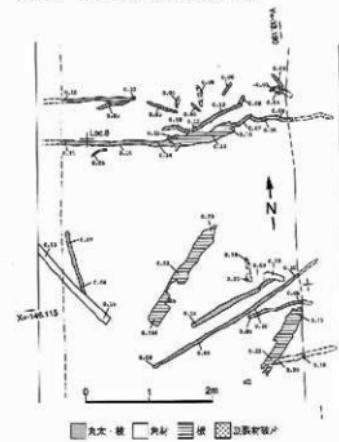




図2.12 調査区北端部における(8)層・(9)層の分布状況。(9)層上面が溝状に落ち込んだ部分を(8)層が充填しているようす。スケールは2m。杭はLoc.1。→N。



図2.13 (9)層(砂礫層)下面の状況。足印が密に分布する。→N。



図2.14 Loc.3付近の行跡。

→ N.(9)層下面。



図2.15 (9)層下面のグルーヴマーク。古流向は西。  
→ SSW。

3mの丸太・枝、角材、割裂材破片などからなり、さほど整然とした配列はみとめられなかつたが、おおむね東西方向に敷き並べられていたことが想像され、木道跡とみなせる。部材を固定するような杭はみとめられなかつた。検出層準からみて、(7)の弥生時代の泥層堆積直後にもたらされており、同層が南方に水深を増すような層相を示すことから、ぬかるむ水ぎわで足が泥に沈むのを防ぐ目的であったと思われる。木材の平面的な分布は、汀線に漂着したようなファブリックを示していなくもないが、比較的大型で多くの木材が静水域に面して自然の営力で集積するとは考えにくい。また、木材の高さに注目すると、角材や丸太の棒状のものは板に比べて沈み込んでおり、自然状態の堆積状況をなすものとは考えにくい(図2.11)。

木道の魔滅後に形成された(6)層の上面付近からは、古墳時代初頭の土師器(庄内式の壺破片(図2.16, 17)が出土した。また、木道の下位の(7)層上部からは、弥生時代中期後半(畿内第IV様式)の土器片(図2.18)が出土した。これら

のことから、木道が形成され廃絶するまでの期間は、弥生時代中期末から後期であったと考えられる。

(8)層と(9)層は調査区北端部のT.P.0m付近に分布する。(8)層は、塊状をなし、砂礫と泥のまじり合った分級の悪い堆積物からなり、異地性の植物遺体や有機物に富む。また、上面には著しい凹凸がみとめられるが、人為的な擾乱とは思えない。いっぽう、下位の(9)層の砂礫上面をほとんど侵食していない。これらのことから、同層は堆積物密度流によって堆積したものと考えられる。この分布範囲は、(9)層が分布する範囲と重なるところが多い。また、(9)層上面に生じた東西方向の溝状の凹みを充填するかたちで堆積している(図2.12)。(9)層下面には、多数の足跡と東西方向にのびる溝状の落ち込みを検出した(図2.13, 14)。また、下位の(10)層上面には(9)層堆積時に生じたと考えられるグルーヴマークが多数みとめられた(図2.15)。Loc.1・2間で、比較低い場所では足跡の踏込面は著しく侵食されていた。1次調査では、この層準で、堤をともなう用水路が検出され、水田跡と認定されたが、本調査区ではヒトの踏込で擾乱された明瞭な水田作上層がみとめられなかった。しかし、水田が並がっていたとするならば、まず強い水流でもたらされた砂礫によって侵食・埋積され、その後に土石流にともなうと考えられる砂礫質泥層によってさらに埋没し、短期間に廃絶したと考えられる。(8)(9)層の堆積範

囲はLoc.3付近までで、これより南では足跡も分布しなかったため、水田の範囲は同地点以北と考えられる。

先述した弥生時代中期後半の土器の出土層準は(8)(9)層より上位であり、1次調査では、造構の盛土から中期前半(畿内第II様式)の土器片が出土していることから、用水路や水田の年代は弥生時代中期の中頃と推定される。

本調査では、さらにT.P.約-1mまでの堆積層を掘削したが、遺構・遺物は検出されなかった。

図2.16 土師器、甕  
古墳時代前期(庄内式)

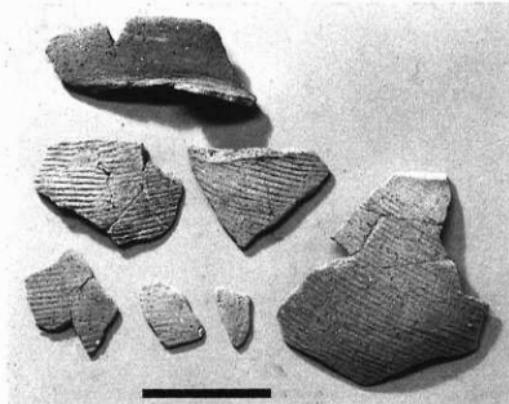


図2.17 土師器、甕  
古墳時代前期(庄内式)





—



—

図2.18 弥生土器、壺、(畿内第IV様式)。  
(7)層下部出土。スケールは5cm。

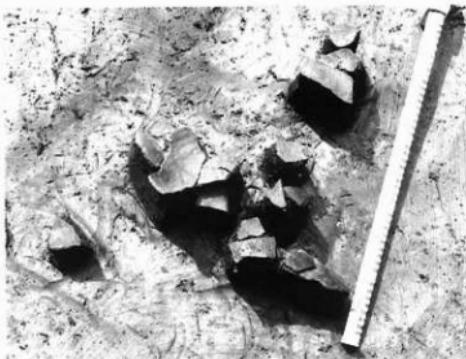


図2.19 (7)層下部での弥生土器の出土状況



図2.20 弥生土器、壺底部、(畿内第IV様式)。  
スケールは5cm。

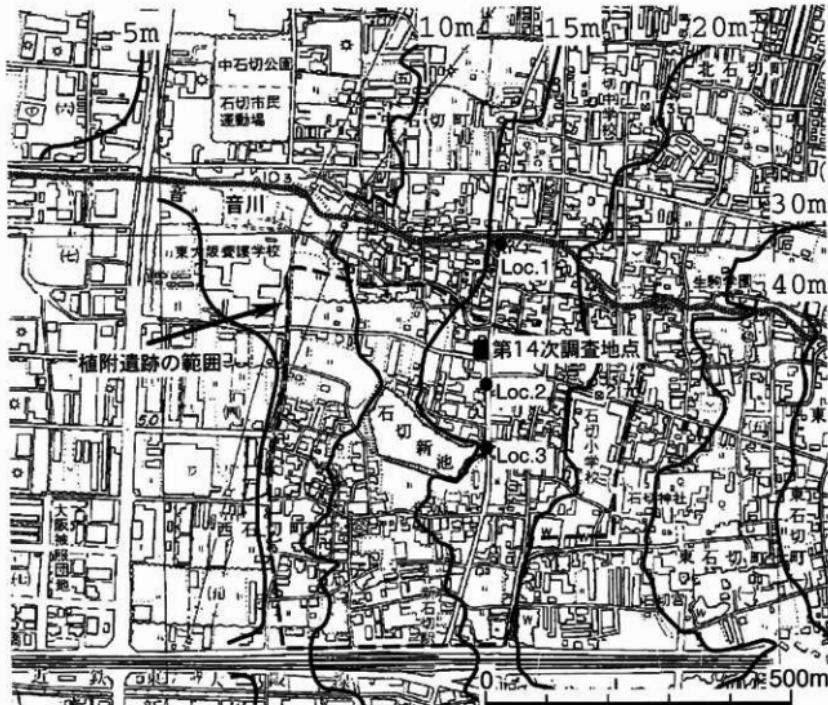
## 第3章 植附遺跡第14次発掘調査報告

### 3.1 はじめに

植附遺跡は東大阪市東部の生駒山麓に発達した扇状地緩斜面上にあり、西石切町・中石切町一带に広がる。現在の標高は約5~20数mである(図3.1)。これまでの発掘調査によって、弥生時代前期から中世までの集落跡が検出されているが、それらは東西・南北約550mの遺跡範囲にそれぞれ偏在している。この領域の表層地質は、遺跡範囲南部・植附集落周辺では1万数千年前の更新統最上部が1mに満たない表土直下にみとめられる。いっぽう、生駒山直下から流下する音川の流路に近い遺跡北部・芝集落周辺では、現地表面と同じ高度でも完新統上部が比較的厚く堆積している。こうしたことから、遺跡形成過程は、最近1万年間でも扇状地発達に影響され、場所によって異なると考えられる。また、扇状地緩斜面には数本の開析谷がみとめられ、すでに埋没した谷もある。過去の人間活動空間はこれらに影響され、分節(分断ではない)していると思われる。

植附遺跡第14次発掘調査地点は、遺跡範囲の北部、芝集落の南のはずれに位置する。発掘調査の結果、古墳時代以後、平安時代までに形成されたと推定

図3.1 植附遺跡第14次調査地点、立会調査地点  
(Loc.1~3)とその周辺



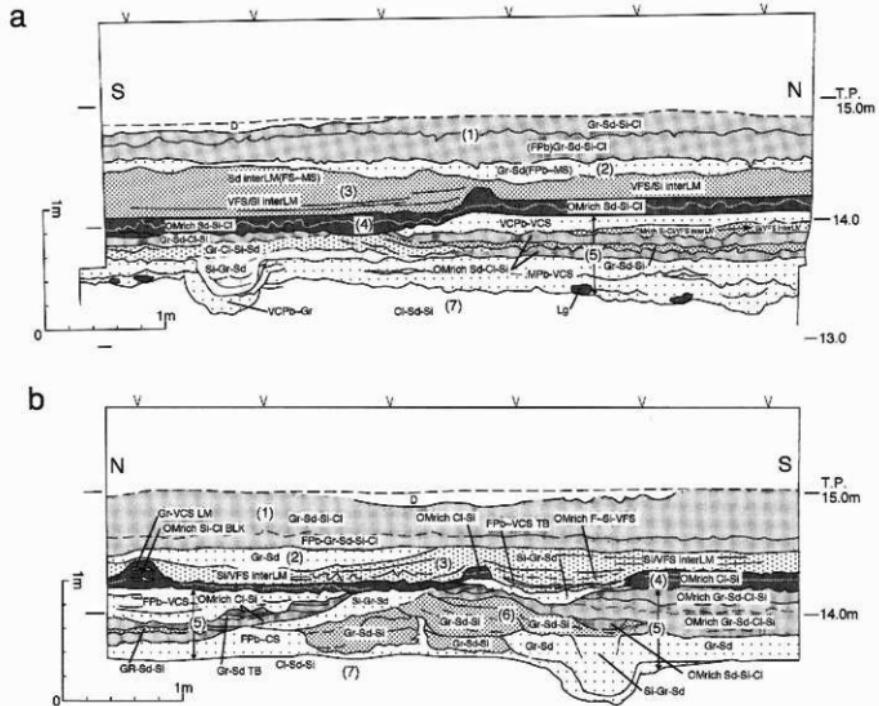


図3.2 調査地の堆積断面

a: 西断面、b: 東断面、c: 北断面。MPb: 中粒の中礫、FPb: 細粒の中礫、Gr: 細礫、VCS: 極粗粒砂、CS: 粗粒砂、MS: 中粒砂、FS: 細粒砂、VFS: 極細粒砂、Si: シルト、Cl: 粘土、interLM: 葉層の互層、OMrich: 有機物に富む、Lg: 偽礫、TB: 薄層。“”は「質」と読みかえる。( )番号は本文層序の記載に従う。

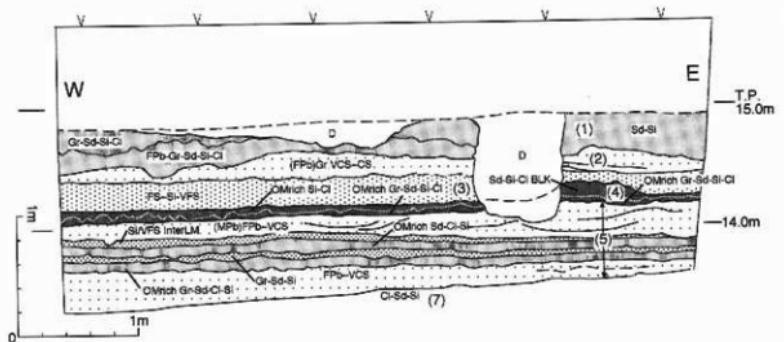
される耕作地跡、古墳時代中期末から後期にかけての流路・溝と、それらを覆い、遺物を多数含む砂礫層が現地表面下2~3mで検出された。これより下位にも弥生時代から绳文時代に累重したと考えられる堆積層がみられた。

### 3.2 調査経過・方法

調査は中石切町3丁目4で行なわれた推進工事用の堅坑(発進坑)掘削とともに1997(平成9)年2月11日から2月20日にかけて実施した。旧国道170号線沿いの堅坑は、約6×6mの矩形で地表面下(以下“GL-”と表記)5mまで掘削された。堅坑の東半は道路敷にかかり、その部分の上部の掘削は夜間に行なわれた。GL-1.2mまでは機械掘削を行い、それ以深のGL-3mでは遺物採集のため人力掘削を併用し(「潮干狩り」と蔑称される)、さらにGL-5mまでを再び機械掘削した。遺構検出原則として掘削後の断面観察によった。

### 3.3 層序

本調査地では現代の盛上・近世～近代の耕作土層の下に、以下のようない堆積層(単層および複層群)の累重がみとめられた(図3.2～5)。



(1)擾乱された淘汰の悪い砂礫質シルトおよび砂礫質シルト質粘土層。耕作土層とみなされ、調査地周辺における中世以後の人為的な改変にともなって形成されたと考えられる。土師器、瓦器の細片が若干出土した。酸化鉄の斑紋が発達し、灰黄褐色を呈する。層厚40~60cm。

(2)浅いトラフ型斜交層理をなす砂礫層。細粒の中疊~粗粒砂からなる。古墳時代から中世までの間に堆積したと考えられる。暗緑灰色を呈する。最大層厚30cm。

(3)水平層理・葉理をなす細粒砂とシルト質板細粒砂の葉層の互層。異地性の植物遺体破片の葉層が2、3枚挟まる。(2)層とともに、下位の耕作地を急速に埋没させたと考えられる。緑灰色を呈する。最大層厚50cm。

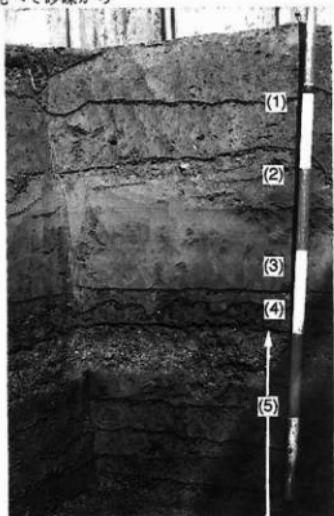
(4)有機物に富み、暗褐色を呈する砂質シルト質粘土層。本層は畦畔をともなう耕作土層をなす。上部下部の上面は著しい凹凸がみられ、耕作時の踏込みによるものと考えられる。水田か畑かは不明。本層下部は上部に比べて砂礫が多い。暗灰褐色を呈する。平均的な層厚20cm。

(5)トラフ型斜交層理をなす砂礫層と植物遺体・有機物に富む砂礫混じり粘土質シルト層の互層。暗緑灰色を呈する。前者は極粗粒の中疊~極粗粒砂からなる。また、本層の基底部の(7)層直上には、主に粘土質シルトの偽礁が点在する。古墳時代中期から後期の遺物を多量に含む。最大層厚80cm。

(6)人為的な擾乱を受け、ブロック土からなる砂礫質シルト層。(5)層中に挟まれるかたちで、とくに後述する溝・流路の消長と並行して累重した盛上と考えられる。(5)と同様、古墳時代中期から後期の遺物を多量に含む。おもに調査区中央部から東に分布し、その上面は緩やかな尾根状の起伏をなす。暗灰黄色を呈する。最大層厚50cm。

(7)弥生時代から古墳時代までに堆積したと考えられるわずかに粘土質で、異地性の植物遺体の薄層を挟む砂質シルト層。古墳時代後期の構造のベースをなす。暗緑灰色を呈する。

図3.3 調査区北西隅の堆積層断面。断面の高さは約1.2m。( )番号は本文の層序記載に従う。



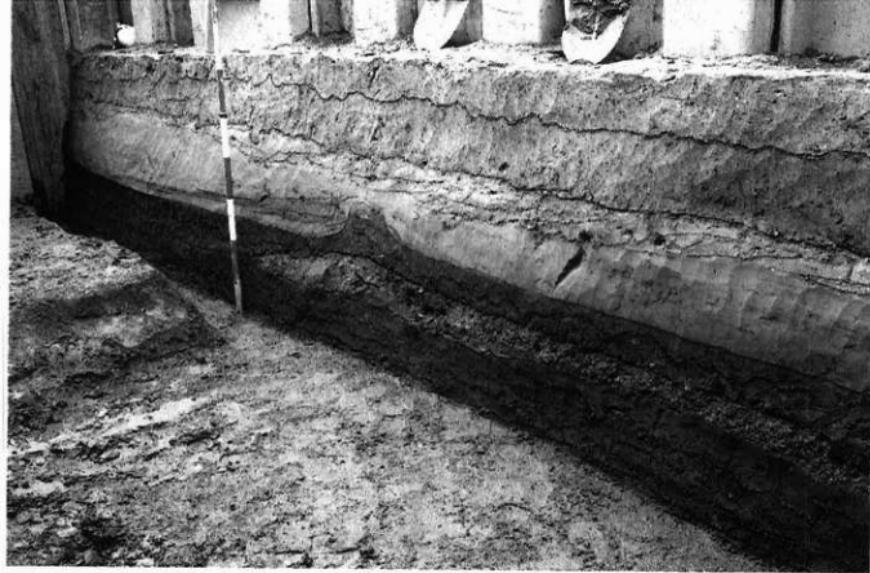


図3.4 西断面。断面の中央に畦畔がみられる。



図3.5 東断面。中央右寄りに畦畔がみられる。



層厚 70cm。

T.P.13.5m から 11.2m までの(7)層以下の累重(図3.6)の最下部では、調査区の南東部で、シルト質粘土、砂質シルト、シルト質砂からなり、ほぼ水平層理をなす、更新統最上部と考えられる堆積層がみとめられた。これらは北西に約 40° で傾く、開析谷壁と考えられる侵食面に境され、その上位、北西側は、カット・アンド・フィルが繰り返されたトラフ型斜交層理をなす砂礫と、流速の弱い流路縁辺に堆積したと思われる有機物に富む泥質砂、シルト質砂の互層、およびその上位の、塊状の砂質泥とこれをマトリクスとした中疊以細の礫のクラスターからなる上石流堆積物とで充填されていた。さらにこの谷埋めの堆積物の累重の上部は、北東-南西方向の流路形で下刻され、それを大疊からシルトまでを含む淘汰の悪い流路充填堆積物が埋め、ふたたびこれが侵食された凹部を中疊まじりシルト質砂とその上位の(7)層が充填していた。この層相は、低地の蛇行河川でみられる放棄流路のように、上流側の開塞や流路変更によって流速が弱まり、他の流路からの氾濫堆積物あるいは、周辺のウォッシュロードを集めるかたちで充填されたと推測される。

### 3.4 遺構

上述の(4)層の堆積物で形成された耕作地跡(T.P.14.3m 付近)は、調査区の東・北・西壁に残された各堆積層断面でみとめられ、畦畔が確認された(図3.7、8)。畦畔は高さ 20 ~ 30cm、基部の幅 50cm で、台形の断面をなす。東断面では中央部と北端の 2か所でみられた。前者の延長は西断面中央部でみられ、後者の延長は、北断面東端部で延び方向に斜交した断面としてみられた。これら 2本の畦畔の間隔は東断面で 2.8m あるが、北側畦畔は西北西-東北東方向に屈曲して延びているので、2本の畦畔は平行しないと判断される。東断面の

図3.6 (7)層下半以下、工事掘削底までの堆積層断面。  
T.P.13.5 ~ 11.2m。左が西断面。写真はおもに開析谷内の堆積層。更新統最上部の堆積層は画面左下端にわずかに見える。

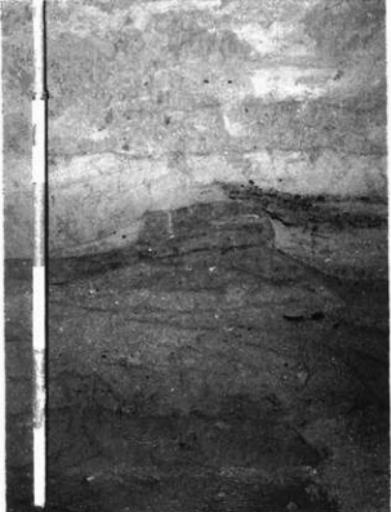
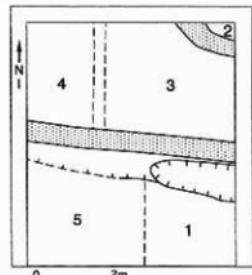


図3.7 東断面にみられた畦畔。ほぼ水平に盛土を重ねた後、削って形を整えたように見える。  
スケールの塗り分け一つは20cm。



図3.8 西断面にみられた畦畔。頂部は侵食をうけたためか不明瞭であった。

図3.9 調査地内における耕作地の復元図。点バターンの部分は畦畔。破線は不明瞭な畦畔あるいは耕作区画の境界。数字は耕地面の高度の順位。



南部では中央の畦畔の南側で耕作土層が切れ、幅1.2mの流路状の落ち込みとなっている。その南側では、耕作土層の上面が一段高く、中央部の畦畔の頂部とほぼ同じ高さになっている。北断面では、北東部の畦畔の西側では耕作土層上面は一段低い。また、北東部の畦畔と断面西端部の中間にわずかな畦畔の高まりがみられ、西側がわずかに低い。西断面では、中央の東西方向の畦畔を境に、北側の耕地面が高く、南側のそれは低い。東断面でみられた流路状の落ち込みは畦畔の南側にわずかな凹みとしてみとめられる。以上のような畦畔の配置と、耕地面の高度差から、図3.9に示すような5つの耕作区画と水溜めからなる棚田状の耕作地を復原することができる。

古墳時代(5世紀後半から6世紀)の遺物を含む(5)(6)層中および下面では、(7)層を掘り込み、東西方向に延びる幅60～70cm、深さ40～50cmの溝を検出した(図3.11、12。図3.2参照)。この溝は上述した耕作地跡で調査区の中央南寄りを東西に延びる溝状の凹みと同位置に伏在する。(5)層の堆積と並行して2、3回の掘り直しが行なわれている。

(5)(6)層以下の堆積層は、調査区北寄りの低所に堆積する傾向があり、それは上位の上位の耕作地が形成されるまで続く。これに抗するかのように溝の北岸で、調査区東寄りには盛土が施され、水路を固定しようとする意図が読みとれる。このようなことから、主として調査地の北西側に流路をとろうとする谷埋めの堆積作用が続くななく、上流から河流を引き込み、下流側の耕作地に給水するような目的で、溝が掘られたと推測される。河流の引き込みは、扇状地斜面の間欠的な土砂流出によって、幾度かの溝の埋積とともに、後述するような遺物の堆積状況を生じたと考えられる。

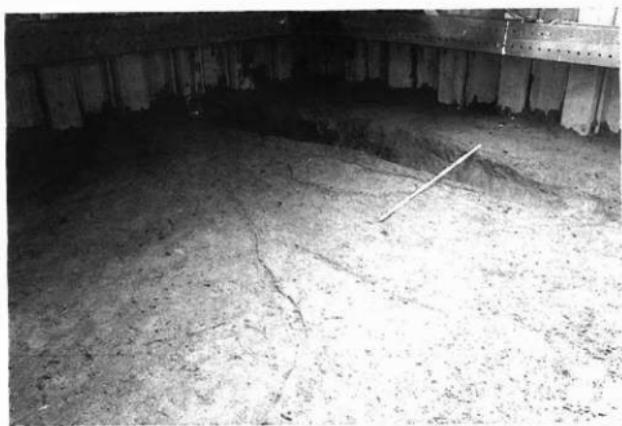


図3.10 (7)層直上(上面ではない)における溝の検出状況。南東方向に撮影。スケールは2m。



図3.11 (7)層直上における溝の検出状況。北北東方向に撮影。

### 3.5 遺物

ほとんどの出土遺物は(5)、(6)層から出土した。とくに遺物の分布密度が高かったのは、(5)層中の調査区南東部のT.P.14m付近に分布する有機物に富む砂礫質粘土質シル層、東方から調査区中央部にかけて分布する(6)層、および(5)層最下部にあたる砂礫層の中位であった。この層準での砂礫層は、図3.12に示すように、調査区南部の東西溝に沿って東から流入し、調査区の西半部を覆うように分布していた。南東部と北東部では、(7)層が高まりをなしていった。砂礫層は北西部で層厚がもっとも大きく、基底をなす(7)層上面の低所を埋積していた。土器片は砂礫堆積域の中央部に近いと思われる調査区西辺付近に多く、外側(岸側)に木片、堆積域の縁辺ではコンターラインに沿って炭片が多く分布していた。このことは、砂礫の流入とともに、遺物が運搬され、堆積したことと示し、自然の營力によるいわば「二次堆積の秩序」をなす。また、このようなコンターラインに沿った遺物の分布は、本調査区の西側に、砂礫の流入

図3.12 (5)層下部、(7)層直上の水平断面における堆積層および遺物の分布を示す模式図。

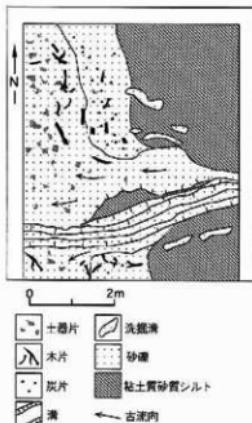




図3.13 (5)層下部で出土した古墳時代  
須恵器。



図3.14 (5)層下部で出土した古墳時代須恵器と  
土師器破片。

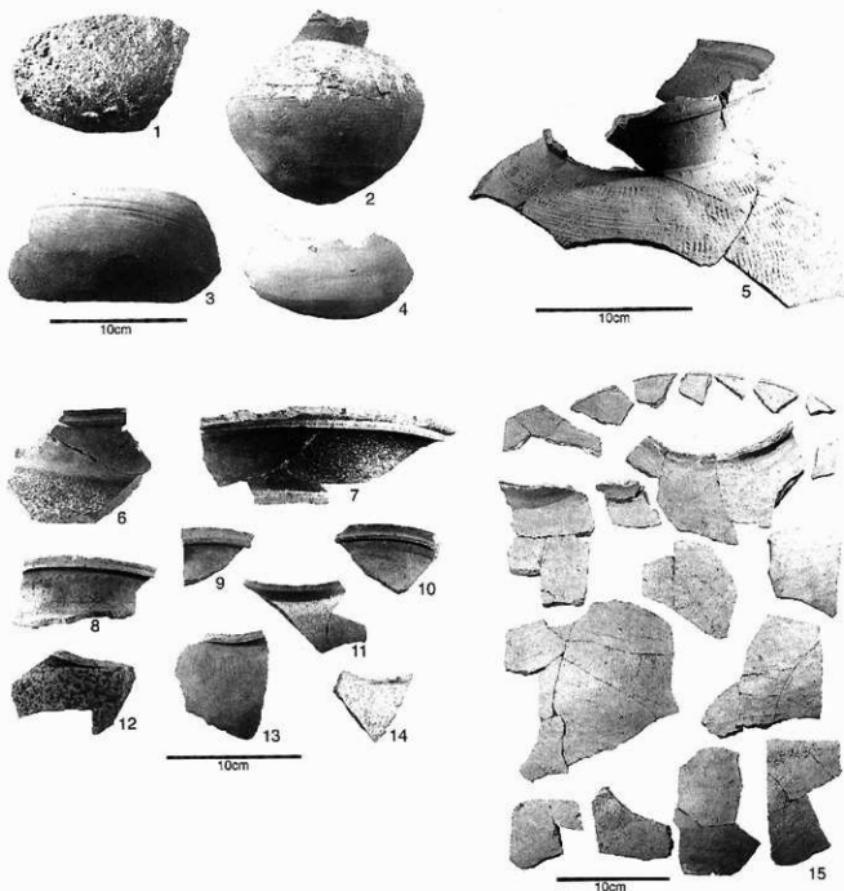
時に水位が上昇するような凹地ないしは池状の地形が存在したことを示唆する。同砂礫層の下底付近では、遺物はほとんど出土しなかった。

出土した土器は、図3.15～21に示すように、古墳時代中期後半と、後期に属する土師器、須恵器で、比較的の破片が大きく、破面は新鮮であり、完形に近いものも含まれることから、近傍の廃棄地点から移動したものと考えられる。本調査地点の南東約60mの地点で1988年に行なわれた第3次調査では、同時期の住居跡が検出されており（菅原章太 1997「植附遺跡第3次発掘調査概報」（財）東大阪市文化財協会）、それを含む集落が遺物の供給源と考えられる。また、古墳時代の土器に混じって、畿内第III～IV様式の上器片がわずかに含まれ、現在は所在が確認されていない弥生時代の集落が上流側に存在することを示唆している。

### 3.6 平成9年度に継続した立会調査の結果

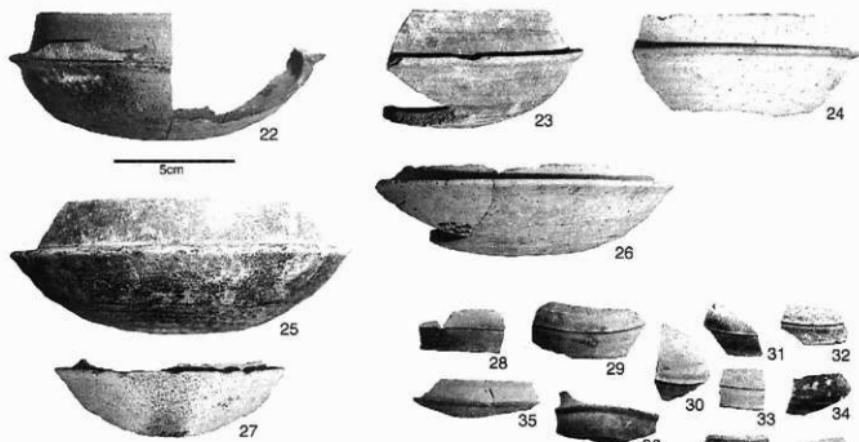
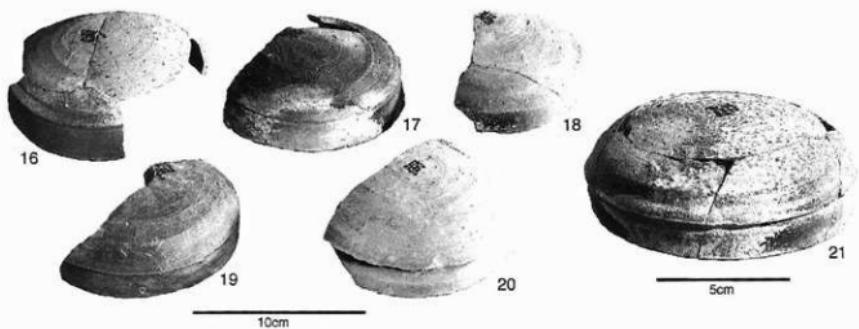
発進坑の調査後、旧国道170号線に沿って推進工事が進められ、到達坑の掘削工事が同年9月までに行なわれた。これらの内、3か所で掘削際して立会調査を行った。いずれの豊坑でも地表下約3～3.5mまでの堆積層について観察し、造構・遺物の有無を確かめるとともに、過去の堆積環境や微地形について検討した。調査地点（Loc.1～3）を図3.1中に示した。調査日は6月11・12日、7月23日、9月23日で、道路敷での掘削のため、いずれも夜間調査であった。

調査区間の北端で音川の左岸にあたるLoc.1では、古墳時代以後の音川の砂礫層と土壤発達をともなう砂質シルト層がみとめられた。調査区間の南端、開析谷を堰止めて造成された石切新池の北東隅に隣接するLoc.3では、道路建設時の盛土下に、中世から近世の耕作土層、更新統の最上部を下刻した開析谷の谷壁上部を加工した段などがみとめられた。これらの豊坑の中間で芝集落と植附集落の中間に位置するLoc.2では、中世に堆積したと考えられる砂礫層の上位に、近世以後の耕作土層、道路敷の盛土がみとめられた。また、更新統最上部の堆積層上面は、直径2.4mの豊坑南側でGL-1.4m、北側で-1.8mで検出され、北に傾斜する侵食された斜面をなしていた。北方30mに位置する発進坑の断面下部でみられた開析谷の谷壁斜面の連続すると考えられる。



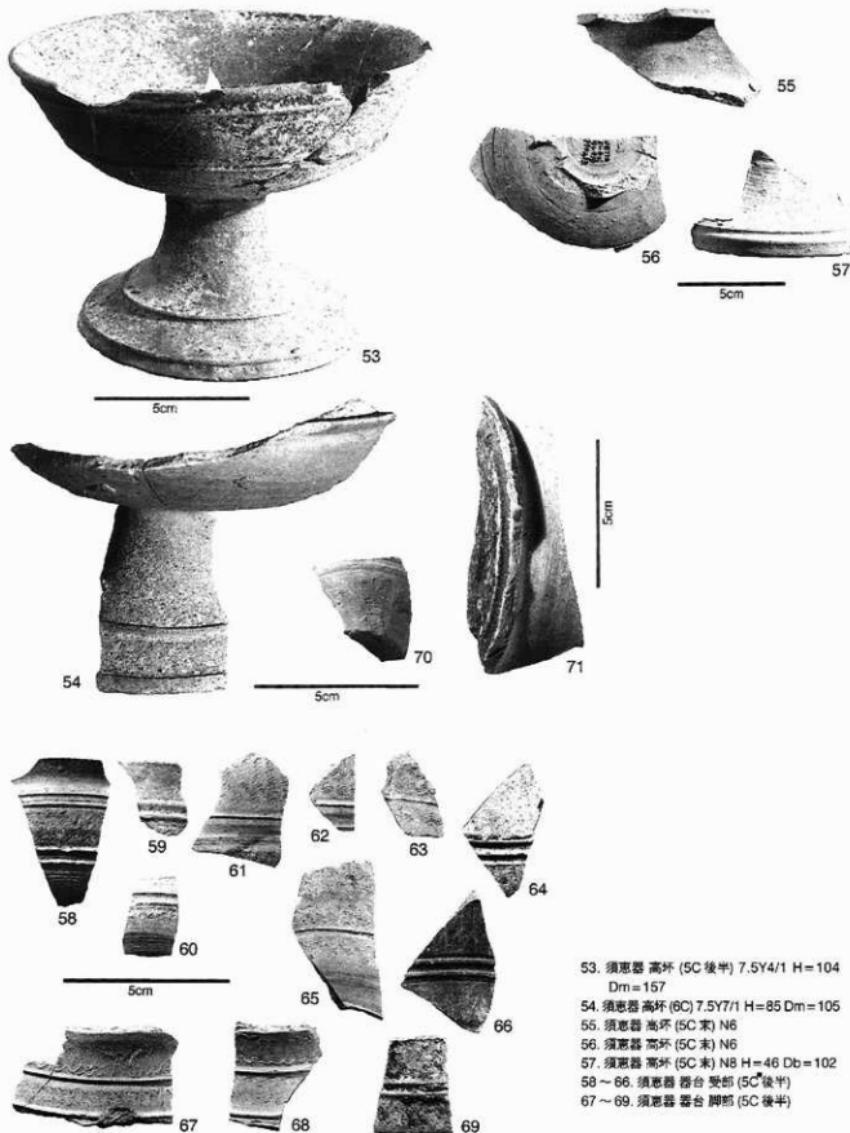
1. 須恵器 壺 脊部 (5C) 5Y5/1
2. 須恵器 壺 脊部 (6C) N5 H=125
3. 須恵器 壺 脊部 (6C) 2.5GY7/1
4. 須恵器 壺 脊部 (6C) N8
5. 須恵器 壺 口縁部～肩部 (6世紀初頭) 7.5Y7/1  
H=133 Dm=170
6. 須恵器 壺 口縁部 (5C中頃?) N5 H=75  
Dm=220
7. 須恵器 壺 口縁部 (5C中頃?) 10GY5/1  
H=66 Dm=226
8. 須恵器 壺 口縁部 (5C末～6C) 7.5Y6/1  
H=49 Dm=184
9. 須恵器 壺 口縁部 (5C中頃?) N7 H=30
10. 須恵器 壺 口縁部 (5C中頃?) N5 H=30  
Dm=123
11. 須恵器 壺 肩部 (5C末～6C) N6 H=42  
Dm=106
12. 須恵器 壺 肩部 (5C末～6C) 7.5Y6/2
13. 須恵器 壺 肩部 (5C末～6C) 5GY7/1
14. 須恵器 壺 肩部 (5C末～6C) 7.5Y8/1
15. 須恵器 壺 口縁部～肩部 (5C後半) 7.5YR6/6,5YR7/1 Dn=340

図 3.15 出土遺物 (1)



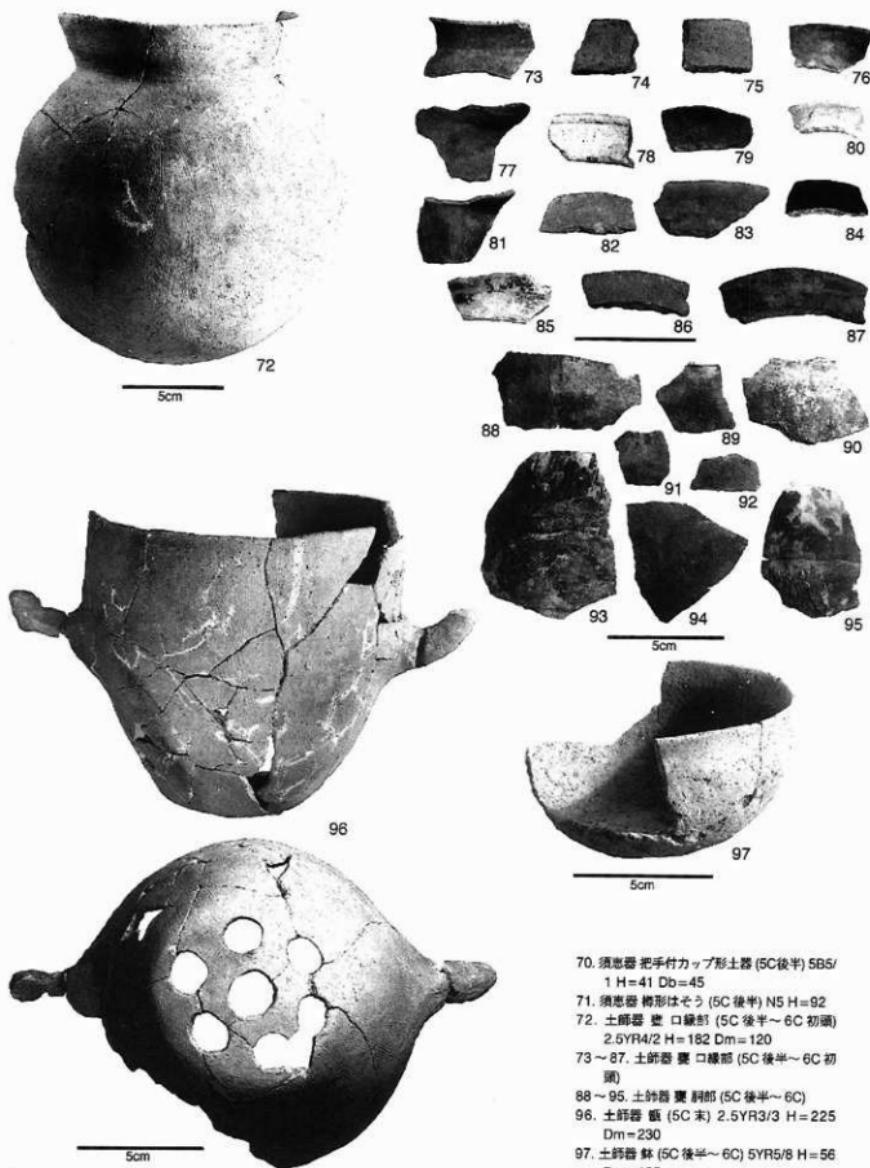
16. 須恵器 盆 (5C末) 6Y7/1 H=49 Dm=125  
 17. 須恵器 盆 (5C末) 10Y4/1 H=42 Dm=125  
 18. 須恵器 盆 (5C末) N7 H=42 Dm=1120  
 19. 須恵器 盆 (5C末) 10YR4/1 H=43  
 $Dm=120$   
 20. 須恵器 盆 (5C末) SY7/1 H=45 Dm=124  
 21. 須恵器 盆 (5C末) 7.5Y7/1 H=44  
 $Dm=113$   
 22. 須恵器 环 (5C後半) 7.5Y7/1 H=50  
 $Dm=112$   
 23. 須恵器 环 (6C中頃) 5PB6/1 H=50  
 $Dm=120$   
 24. 須恵器 环 (5C末) N8 H=39 Dm=122  
 25. 須恵器 环 (6C中頃) 5PB6/1 H=55  
 $Dm=124$   
 26. 須恵器 环 (6C後半) N6 H=43 Dm=140  
 27. 須恵器 环 (6C末) N7 H=37 Dm=104  
 28~34. 須恵器 盆 (5~6C)  
 35~52. 須恵器 环 (5~6C)

図3.16 出土遺物 (2)



53. 須恵器 高环 (5C 後半) 7.5Y4/1 H = 104  
 $Dm = 157$   
 54. 須恵器 高环 (6C) 7.5Y7/1 H = 85  $Dm = 105$   
 55. 須恵器 高环 (5C 末) N6  
 56. 須恵器 高环 (5C 末) N6  
 57. 須恵器 高环 (5C 末) N8 H = 46  $Db = 102$   
 58 ~ 66. 須恵器 番台 懸部 (5C 後半)  
 67 ~ 69. 須恵器 番台 脚筋 (5C 後半)

図3.17 出土遺物 (3)



70. 須恵器 把手付カップ形土器 (5C後半) 5B5/  
 1 H=41 Db=45  
 71. 須恵器 椭形はそう (5C後半) N5 H=92  
 72. 土師器 親 口縁部 (5C後半～6C初頭)  
 2.5YR4/2 H=182 Dm=120  
 73～87. 土師器 親 口縁部 (5C後半～6C初  
 頭)  
 88～95. 土師器 親 瓶部 (5C後半～6C)  
 96. 土師器 瓶 (5C末) 2.5YR3/3 H=225  
 Dm=230  
 97. 土師器 林 (5C後半～6C) 5YR5/8 H=56  
 Dm=105

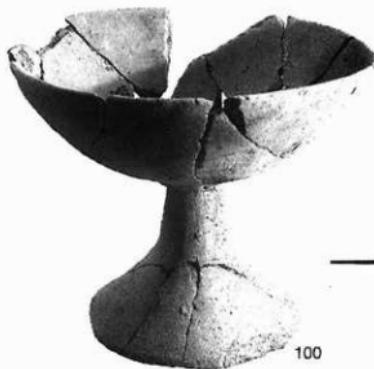
図3.18 出土遺物(4)



98



99



100

5cm



101



102



103

98. 土師器 高杯 (5C後半～6C初頭) 7.5YR7/  
6 H=121 Dm=130  
99. 土師器 高杯 (5C後半～6C初頭) 2.5YR7/  
8 H=114 Dm=135  
100. 土師器 高杯 (5C後半～6C初頭) 5YR6/  
6 H=116 Dm=136

101. 土師器 高杯 (5C後半～6C初頭) 7.5YR5/  
6 H=110 Dm=130  
102. 土師器 高杯 (5C後半～6C初頭) 7.5YR8/  
3 H=82 Dm=117  
103. 土師器 高杯 (5C後半～6C初頭) 5YR6/  
6 H=109 Dm=130

図 3.19 出土遺物 (5)

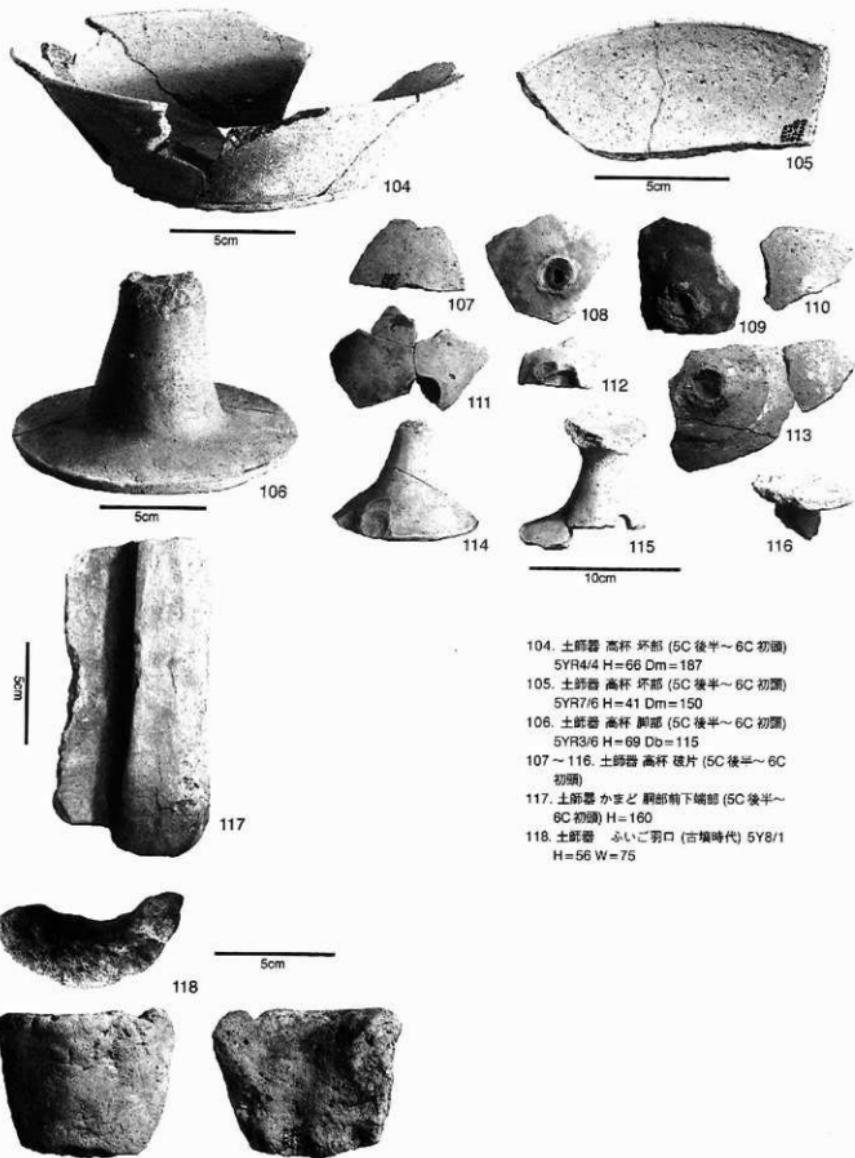


図3.20 出土遺物（6）



図3.21 出土遺物 (7)

## 第4章 上六万寺遺跡第4次発掘調査報告

### 4.1 はじめに

上六万寺遺跡は生駒山の西麓部に位置し、東大阪市東部の南四条町・上六万寺町・六万寺町に広がる弥生時代後期から中世にかけての複合遺跡である。

昭和40年に個人住宅施設工事に伴い弥生土器が確認された<sup>(1)</sup>ことに伴い、周辺の小字名から幸殿遺跡として範囲が設定され周知されるようになった。昭和48年個人住宅用地造成に伴って行われた試掘調査によって、弥生時代後期の各種の土器、鎌倉・室町時代の遺物や石組みの井戸等遺構が検出された<sup>(2)</sup>。この調査より、従来の幸殿遺跡の範囲を含め上六万寺遺跡とした。この時調査で、2次堆積層より一括出土したとされる弥生土器が<sup>(3)</sup>、都出比呂志（都出 1974）によって上六万寺式土器として紹介され、弥生時代後期後半の標識遺跡として顯著な遺跡となった。しかし、その後は昭和55年度に国庫補助事業での調査、平成3年度に下水道工事に伴う発掘調査の2回の調査が行われたに過ぎず、依然として遺跡の性格は不明である。

平成3年度の発掘調査から6年を経た今回、平成9年度東大阪市の下水道整備計画に伴い下水道敷設の計画が実施されることとなり、4回目の調査を行うことになった。

今回の下水道敷設計画では、上六万寺遺跡の遺跡範囲のはば中央を南北に縦断し、且つ北側の遺跡範囲外部分にも路線が延伸するものであった。この計画では、従来の遺跡範囲の南北限が確認可能であるとともに、隣接する新遺跡の発見の可能性が考えられることから、敷設路線の始点となる北側部分<sup>(4)</sup>についても、工事に並行して立会調査を行うことになった。本報告書はこの調査成果の概略を報告するものである。

### 4.2 位置と環境

調査を行った地点は、生駒山の西麓で東大阪市の東部、繩手中学校東方100mにあり、標高20~35mの扇状地上に立地する。地籍では南四条町12・5・11から六万寺町3丁目にあたる。調査地点は、相対的に南から北に向かって緩やかな下り勾配を呈しているが、南部では、南端部に向かい緩やかな下りの傾斜地形となっている。このような南高北低の地形形成には、調査地点の南端部に西流する長門川が形成する地形が大きく影響を及ぼしていると考えられるが、堆積環境および周辺地域の状況などからは、長門川の解析以前にすでに南高北低の地形が形成されていた可能性を示唆する状況も認められる<sup>(5)</sup>。

調査地点西方100m、標高15~20mの扇状地末端部分には繩手中学校を中心として広がりを持つ、繩文中期の標識遺跡である繩手遺跡が存在する。繩手遺跡からさらに西方には、弥生時代~古墳時代の五合田遺跡、繩文中期~中世の段上遺跡・下六万寺遺跡・北島池遺跡と遺跡が連続して広がる。また上六万寺遺跡北方から東方にかけての標高50~150mの所には、花草山古墳群・山畠古墳群をはじめとする古墳群や、弥生時代高地性集落跡を検出する岩滝山遺跡・山畠遺跡などの遺跡が広がる。南方には、繩文時代後期~鎌倉時代の船山

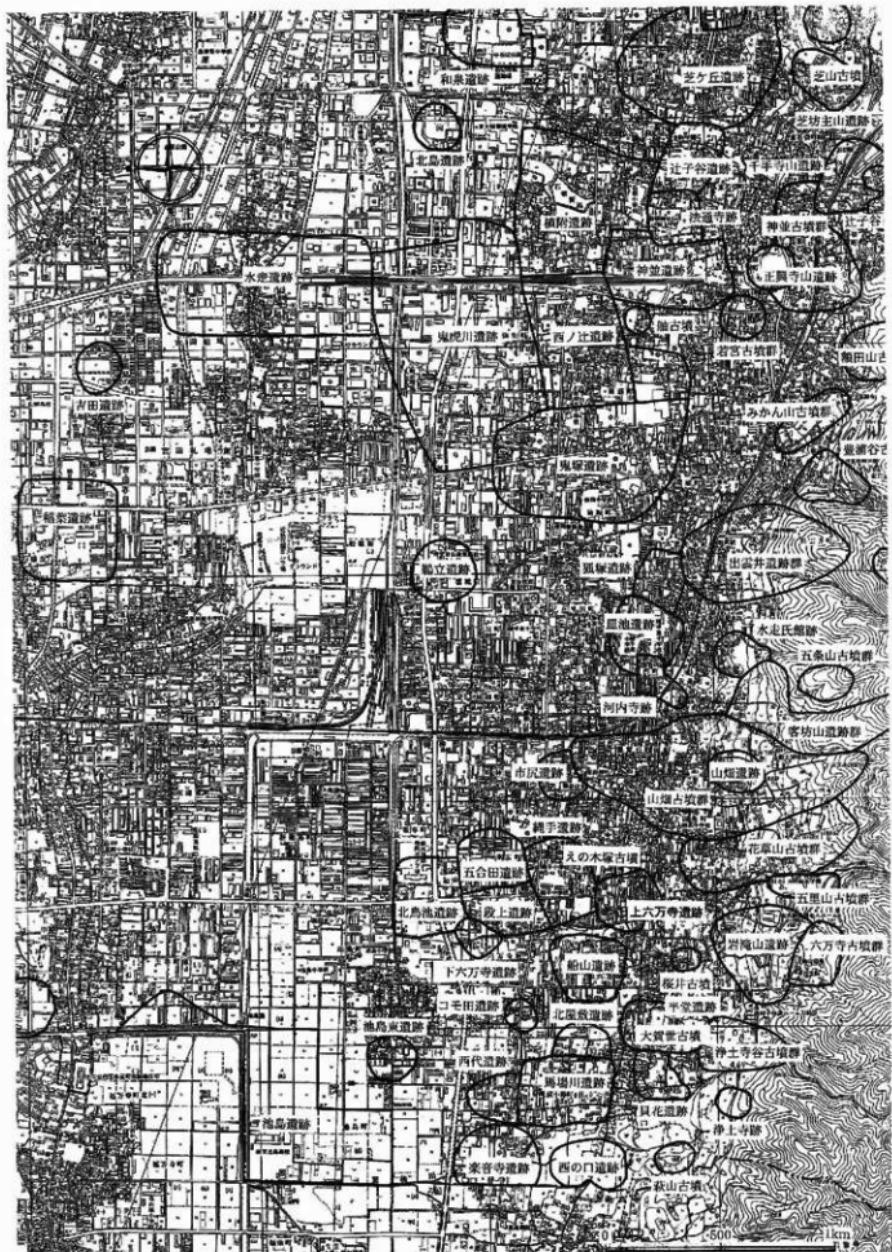


図4.1 調査地周辺遺跡分布図

遺跡・また縄文中期～古墳時代の馬場川遺跡などが広がる。このように上六万寺遺跡を取り巻く生駒西麓部の地域は、縄文時代から中・近世を経て現在に至るまでの間、連續と人間が生活を営んで來た土地であることがわかる。

今回の調査では、現行の遺跡範囲北限からさらに北方約150mにわたって立会調査を行い、弥生時代から近世に至る遺跡の広がりを確認することができた。同時にその北側の地形の大部分が、奈良時代以降に起きた土石流によって形成されたこともわかった。

また新たに、立会調査区間の南端部では、遺構こそ確認できなかったが、縄文時代後期の遺物を含む包含層を確認し、生駒西麓部における縄文時代の生活圏がさらに広がる可能性も明らかになった。

#### 4.3 調査の方法

今回の調査は、南四条町12と南四条町5と同11の境界にあたる、東西道路と南北道路とが交差する三差路交差点を工事の始点（以下起点という）として、上六万寺町と六万寺町の境界に当たる、東西道路交差点にかけての南北道路に、600mmの雨水管と200mmの下水管を敷設する作業に伴って実施した調査である。

調査を行うにあたり、工事工程の北側半分（起点から約150m南の部分まで）が遺跡範囲外であったため、その部分について工事着工以前に試掘調査を実施した。試掘調査では、遺物とともに遺構面の存在を確認したことから、その部

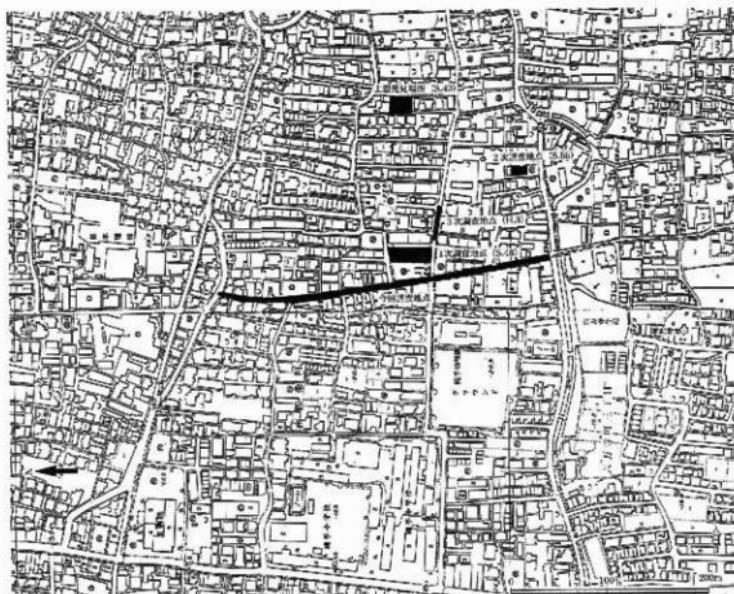


図4.2 調査位置図

分については工事工程に伴って立会調査を実施することになった。現地調査は、平成10年6月18日より平成10年9月30日まで実施した。

北半部の立会調査区間では、600mmと200mmの下水管を一度に敷設するため、1スパン幅約2m、深さ約2.5m、長さ2.5mの規模で行い、1日平均2～3スパンの工程で工事を進めた。立会調査という調査の性格上、工事工程を最優先に考えなければいけないことから重機の多用はやむを得なかった。したがって、調査の主眼を堆積環境の確認および、遺跡の広がりを確認することに置き、可能なかぎり出土する遺物と出土層位の記録は行うこととした。

南半部の本調査区間では、機械による掘削を併用しながら可能な範囲で人力掘削を行った。この部分は200mmの下水管のみの敷設であったため、1スパンの規模が幅約0.8m、長さ4m、深さ約1.5mと規模が縮小され、1日3～4スパンのベースで工程は消化された。

この本調査区間にについても、トレンチ規模と工事工程から全区間を通じた同一面の広がりを面的に押さえることは困難であった。そこで、立会調査区間同様断面による堆積環境の把握と、出土遺物と出土層位の相関関係を明らかにすることに努めた。

#### 4.4 層序

管敷設の路線は長く連続したものであることから、地層の堆積環境を見る上においては最良の条件であったが、前述の理由などから、全区間の連続した断面層序は記録することが不可能であった。可能な範囲で観察した断面を柱状化したものが付図1である。これは柱状断面図採取地点を、調査路線平面図とともに表記したものである。よって各地点の層序の詳細は、付図の記載を参考にされたい。

ここでは調査区全体を通して堆積環境について概観する。

調査区間全長340m間で現地表面での南端と北端の比高差は2.6m、南高北低の傾斜地形である。基本的にベースとなる地層は砂礫層であり、この砂礫層は扇状地地形の形成に伴うものである。北半部はベースの上に土石流起源の堆積物（砂礫層）が厚く堆積している。南半部では部分的に土石流起源と考えられる礫を含む堆積層は見られるものの、北半部のように広い範囲での分布は見られず、その規模や時期についても特定できる材料はほとんどない。南半部では、北半部の上石流堆積物に時間的に対応する地層は粘土～シルト質粘土層である。北半部南側から南半部にかけては、ベース層も比較的高く、特に平安時代以降は安定した上地として人々の生活に供したことが伺われる。また南半部南側では、南端部に向かってベース層が緩やかに傾斜している。同時に、南端部に向かうにしたがって砂礫の混入が多く見られる。これは、調査区南端部に流れる長門川の自然堤防の堆積物と考えられる。自然堤防による微高地が形成された南半部南側では、土石流等の自然災害の被害をあまり顕著に受けていないことから、遺構や遺物などの残りも比較的良好であった。

調査区全体に見られる南高北低の地形は、南半部と北半部の弥生時代包含層の検出レベルを比較してみると歴然とするが、この弥生時代の包含層が堆積す



図 4.3  
起点部分機械掘削状況  
(北から)

る時点ですでに形成されていることがわかる<sup>(5)</sup>。長門川が現在の位置を流れる時期はもう少し時代が下った頃と考えられることから、調査地の地形形成と長門川による地形形成とは時期的なズレが生じる。よって、調査区全体に見られる地形は、長門川の解析以前にすでに形成されていたものと考えられる。

以下では、遺構・遺物について述べる。

今回は調査範囲が長大であるため、便宜上検出遺構・包含層によって大きく6つのブロックに分けた。したがって今後の記述も、そのブロック分けに従って行う。

各ブロックの名称は、調査の起点から南に向かって順にA～Fとした(図4.1参照)。

#### 4.5 遺構と遺物

A～Bブロックで、主に確認できた遺構や遺物の時期は奈良時代～中世にかけてのものである。包含層としては弥生時代後期から古墳時代・奈良時代に比定可能な包含層は確認したが、明確な遺構等の検出はなかった。

C～Dブロックでは、奈良時代～平安時代の遺物包含層の下層から、弥生時代前期の遺物包含層や縄文時代後期の遺物包含層を検出した。また近世包含層や中世の包含層および遺構面が広く分布していることが確認できた。

E～Fでは、弥生時代後期の遺物包含層や遺構面の他、古墳時代～奈良時代および平安～鎌倉・中世の各時期の遺物包含層および遺構面を確認した。



図 4.4 Aブロック No. 2 トレンチ南断面

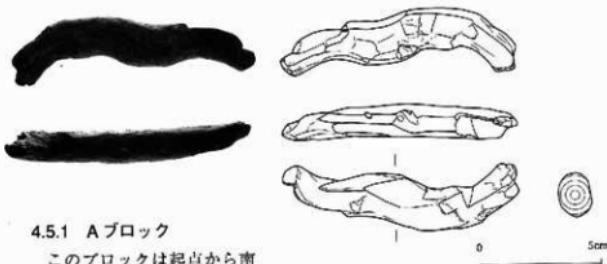


図4.5  
鳥形木製品

#### 4.5.1 A ブロック

このブロックは起点から南に約65mまでの範囲をいい（レンチ名では、No.1～15ト

レンチ、以下トレンチ名はNo.のみで記述する）、2回の土石流とその上位・下位に遺物包含層が認められる部分である。

#### 弥生時代

No.5～15では遺物包含層を確認した。主に砂礫を含む粘土質シルト～シルト層で、遺構は認められなかった。遺物は、鳥形木製品（図4.5）を始め弥生土器（遺物8・9・10）などが出土した。土器は弥生中期の特徴を有しており、弥生時代中期を下限とする遺物包含層と考えられる。

#### 古墳～奈良時代

No.9～15では、5世紀後半の須恵器を含む遺物包含層を確認した。主に粗砂～中粒砂層で河川の堆積物である。No.9では、下位の弥生時代包含層との層境部分に人間の踏み込みの痕跡を検出した。遺物は少なく、いずれも細片であり固化可能な遺物はない。

#### 平安～鎌倉時代

土石流は、出土した遺物と堆積環境から大きく次の2回起きたことがわかる。上位は主に13・14世紀の遺物が中心の上石流（以下中世上石流）であり、下位は主に12世紀以前の遺物が出土する土石流（以下平安・鎌倉土石流）である。

下位にある平安・鎌倉土石流は、No.2からNo.14の範囲で南北約60mの規模を確認した。堆積最大厚は1.7mに達する。堆積層には、人頭大から拳人の砾を多く含み、平安時代から鎌倉時代の瓦器や土器等遺物を少量含む（遺物4・5）。遺物の出土量は少なく、細片で残存状況も良

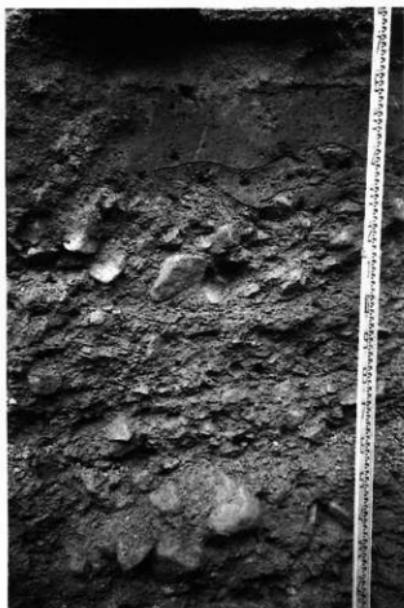


図4.6 A ブロック No. 9 トレンチ東断面

くない。しかし、13世紀以降の遺物を全く含まないことから、後述する上位の土石流とは時期的に分けることができる。

Aブロックのベースは前述した通り、荒砂～細砂を含む砂礫層からなる扇状地堆積物である。このベース層を削り込んだ形で平安・鎌倉土石流の堆積物は堆積している。

Aブロック南端部ではこの土石流堆積物は薄くなり、Bブロックに入ると全く見られなくなることから、Aブロック南端部をこの土石流の南縁部分と考えられる。そして最も深い起点部分を土石流の中心部分（流心部分）付近と考えると、今回検出した範囲は土石流のほぼ半分の規模と考えることができる。この考え方通りだと仮定すると、起点より北方に同様の規模の広がりを想定できる。したがってこの土石流の全幅は南北方向に120mに及ぶ規模が想定できる。遺跡の立地や堆積環境から、この土石流は東方の生駒山から西流したと考えられる。しかし、從前からこの付近は遺跡範囲外であったため調査が行われておらず、土石流の東西方向の広がりは現時点において押さえることはできない。同様の理由から、先に起点より北方への広がりを想定したが、発掘調査による確認はなされていない。

#### 中世

上位に位置する中世土石流はNo.2からNo.14の範囲で確認し、南北約65mの規模を確認した。堆積層は土石流の堆積物特有の人頭大から拳人の疊を多量に含む。遺物は瓦器や土師器を始めとした中世の遺物が含まれるが、残存状況も悪く細片で実測可能な遺物はほとんど無い（遺物1～3）。

No.8からNo.12の間は、中世土石流堆積物にかわってシルト質の遺物包含層が堆積している。この包含層直下にある平安・鎌倉土石流上面には削平を受けた形跡は見られず、遺物包含層堆積以前にも大きな削平が行われた形跡も見られない。

今回検出した中世土石流は、堆積環境から鑑みると土石流の流心から南岸にかけての部分を検出したものであり、土石流本来の規模（全幅）のほぼ南北半分であると考えられる。残りの北半分は、調査区起点より北方に広がる。今回未検出の部分の規模を仮に、今回検出した規模と同等とすると、中世土石流の全幅は、南北約120mを越える規模が推定される。

このブロックの北部では、土石流の上位の堆積層からも、砂や礫を多く含んだ層が堆積しており、それら堆積層の上面からは遺構は全く検出できなかつた。しかし、これに対して部分的に微高地になっている部分No.8からNo.12の間や土石流縁辺部にあたる、Bブロック部分（起点より65m南方付近）には中近世の包含層が発達していることから、このAブロックは総じて土石流が起った後も大雨の時には水の道として水が集まり、特に北側部分などは集落のなかでも居住地として不向きであると認識されていたのではないだろうか。

#### 近世

No.11で近世の遺物包含層を確認した。砂礫の混じるシルト層で、遺構は認

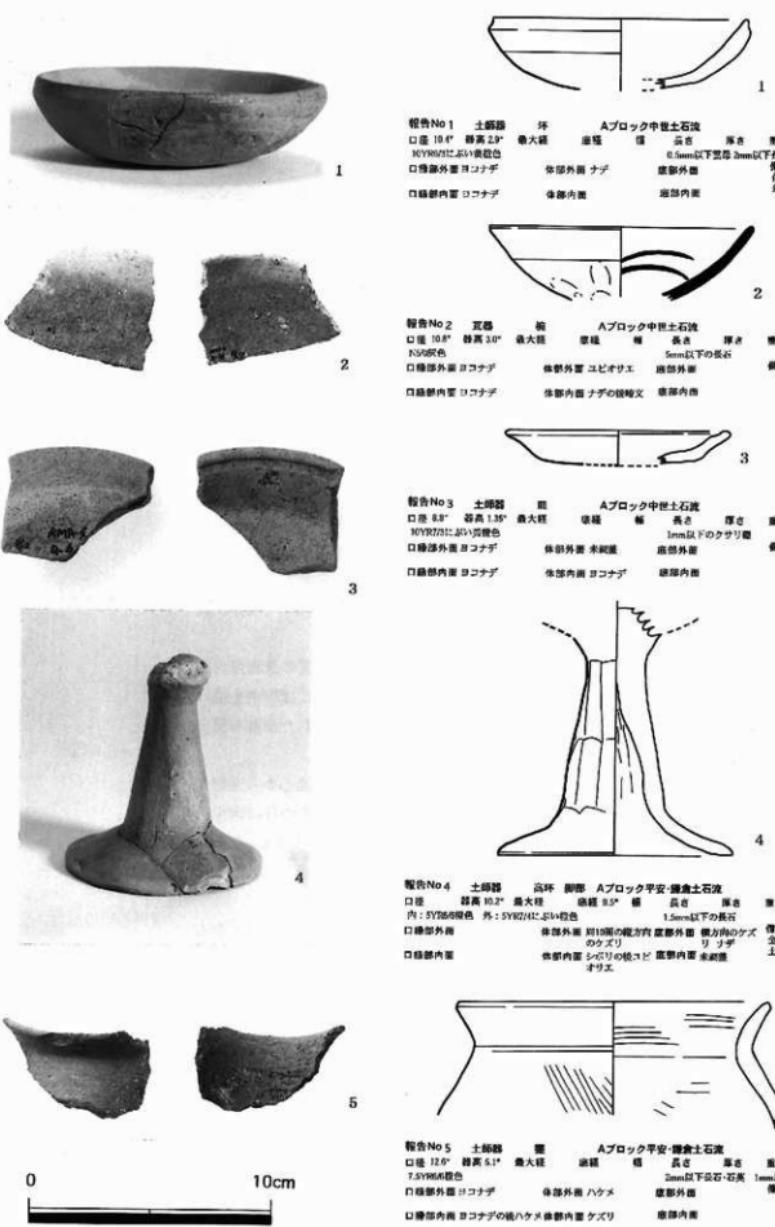


図4.7 A ブロック出土遺物実測図

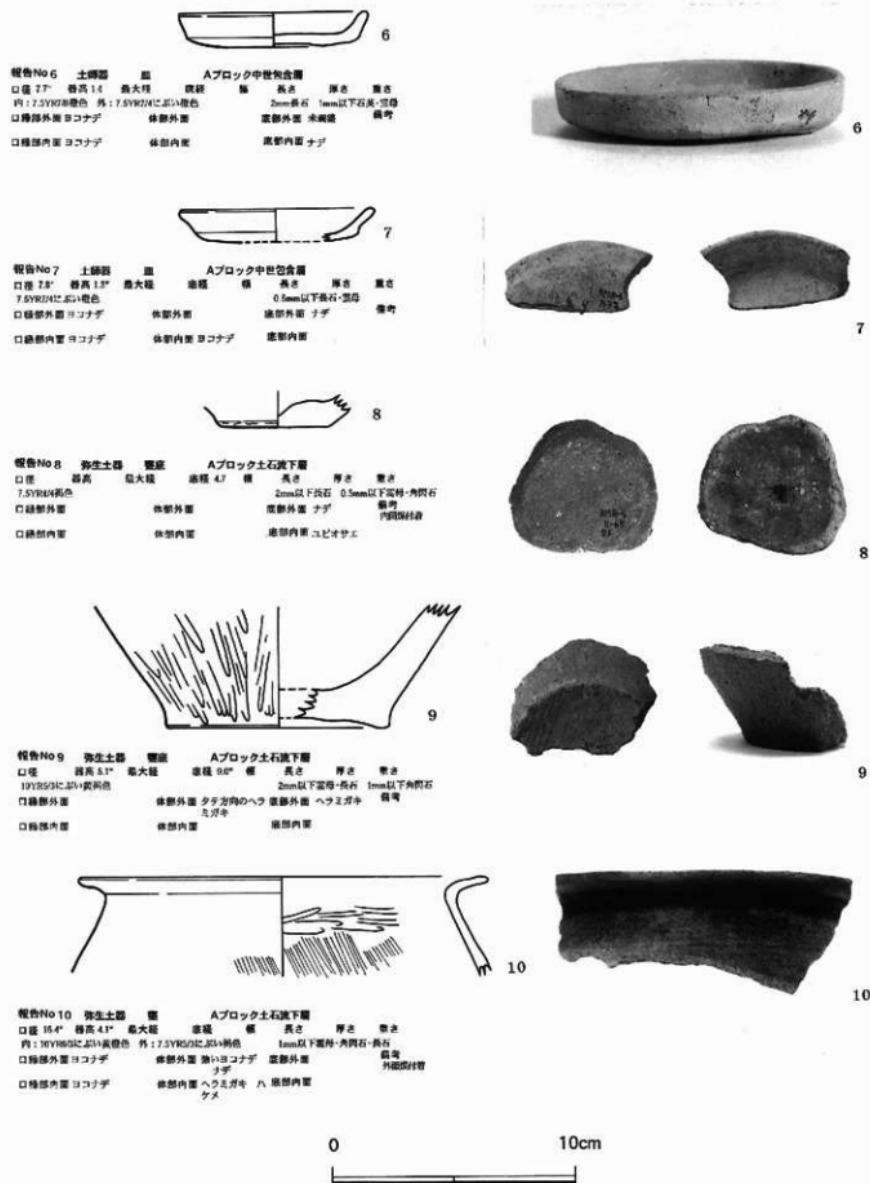


図 4.8 A ブロック出土遺物実測図

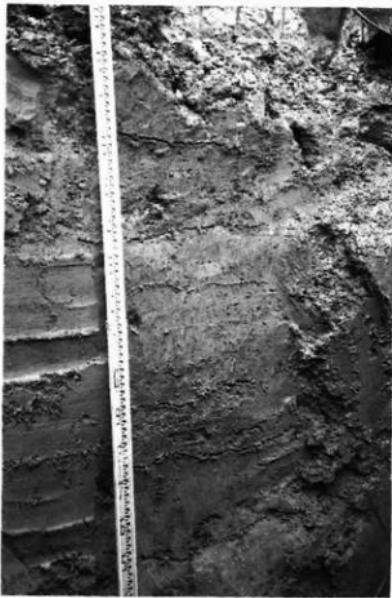


図4.9 B ブロック No.17 トレンチ東断面

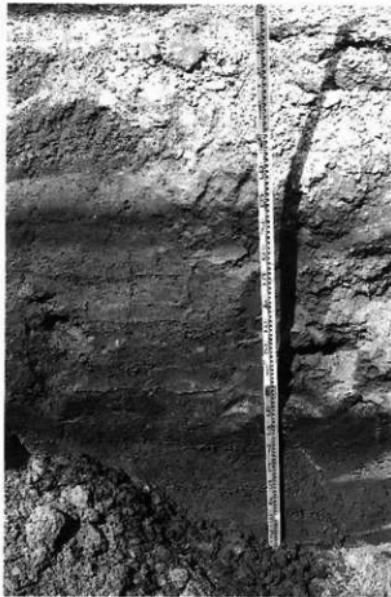


図4.10 C ブロック No.26 トレンチ西断面

められなかった。出土遺物も細片で、固化可能なものはない。

#### 4.5.2 B ブロック

B ブロックは、起点より 65m ~ 85m の区間を指す No.16 ~ 21。土石流の堆積物は見られず、特に平安～鎌倉時代の包含層が卓越する区間である。このブロックから明確な造構の検出はない。

このブロックのベースは、細砂～粗砂の混じる粘土からシルトの層であり、ベース層上面のレベルでは北から南へ徐々に高くなっていることがわかる。弥生時代

このブロックには弥生時代以前の造構や遺物包含層は認められなかった。

#### 古墳～奈良時代

No.16 では最下位で古墳～奈良時代の遺物包含層を確認した。荒砂の混じるシルト層で木製の杭などとともに、細片であるが土師器・須恵器などが出土した。造構は認められなかった。

#### 平安～鎌倉時代

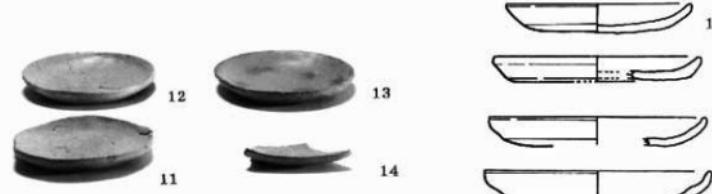
B ブロック全体を通じて、奈良・平安～鎌倉時代の遺物包含層を確認したが、造構は認められなかった。この包含層は主に砂礫を含むシルト層～粘土層で、No.16～18 では約 1m の厚みで堆積する。遺物は細片であり、固化可能なものはなかった。須恵器や土師器等古い遺物も混じるが、最新の遺物でも 12 世紀を下らない。

#### 中世

平安～鎌倉時代の遺物包含層の上位で中世の遺物包含層を確認した。この包含層は主に粘質のシルトから荒砂を含むシルト層で、堆積環境から耕作土と考えられる。瓦器椀や土師器を中心とした多くの土器とともに、砂岩製の砥石を検出した（遺物 11～17）。出土した遺物から 15 世紀以降に堆積したものと考えられる。

#### 近世

盛り土直下には近世の遺物包含層がある。包含層はシルト質で堆積は比較的厚く（平均 0.4m）、細片であるが多くの遺物が出土した。出土した遺物から、概ね 16 世紀以降に堆積したものと考えられる。



報告No11 土師器

口径 7.0" 器高 1.2" 細大紋  
内: 2.5YR7/2灰黄色  
口唇部外側ヨコナギ

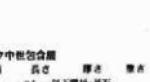
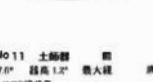
体部外側  
口唇部内側 ヨコナギ

12

13



14



15

報告No12 土師器

口径 6.4" 器高 1.0" 細大紋  
10YR8/2灰白色  
口唇部外側 ヨコナギ

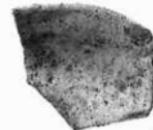
体部外側 ヨコナギ  
口唇部内側 ヨコナギ

16

17



18



19



20

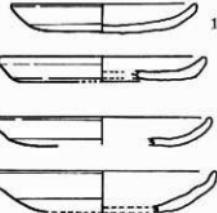
0

10cm

報告No13 土師器

口径 8.8" 器高 1.2" 細大紋  
内: 2.5YR7/2灰黄色  
口唇部外側ヨコナギ

体部外側  
口唇部内側 ヨコナギ



報告No14 土師器

口径 9.3" 器高 1.7" 細大紋  
内: 10YR8/2に近い灰白色 外: 2.5YR7/2灰黄色  
口唇部外側ヨコナギ

体部外側 ヨコナギ  
口唇部内側 ヨコナギ

報告No15 土師器

口径 6.4" 器高 1.7" 細大紋  
内: 10YR8/2に近い灰白色 外: 2.5YR7/2灰黄色  
口唇部外側ヨコナギ

体部外側 ヨコナギ  
口唇部内側 ヨコナギ

体部外側 ヨコナギ  
口唇部内側 ヨコナギ



15

報告No16 土師器

口径 7.5" 器高 1.6" 細大紋  
2.5YR7/2灰黄色  
口唇部外側ヨコナギ

体部外側 ヨコナギ  
口唇部内側 ヨコナギ



16

報告No17 石製品

口径 5.5" 器高 1.6" 細大紋  
10YR8/2に近い灰白色  
口唇部外側

体部外側  
口唇部内側

Bブロック中世包含層

0.5mm以下陶片  
0.5mm以下角片  
骨等  
口唇部外側 ヨコナギ  
体部外側 ヨコナギ  
口唇部内側 ヨコナギ

Bブロック中世包含層

0.5mm以下陶片  
0.5mm以下角片  
骨等  
口唇部外側 ヨコナギ  
体部外側 ヨコナギ  
口唇部内側 ヨコナギ

Bブロック中世包含層

0.5mm以下陶片  
0.5mm以下角片  
骨等  
口唇部外側 ヨコナギ  
体部外側 ヨコナギ  
口唇部内側 ヨコナギ

Bブロック中世包含層

0.5mm以下陶片  
0.5mm以下角片  
骨等  
口唇部外側 ヨコナギ  
体部外側 ヨコナギ  
口唇部内側 ヨコナギ

Bブロック中世包含層

0.5mm以下陶片  
0.5mm以下角片  
骨等  
口唇部外側 ヨコナギ  
体部外側 ヨコナギ  
口唇部内側 ヨコナギ

Bブロック中世包含層

0.5mm以下陶片  
0.5mm以下角片  
骨等  
口唇部外側 ヨコナギ  
体部外側 ヨコナギ  
口唇部内側 ヨコナギ

Bブロック中世包含層

0.5mm以下陶片  
0.5mm以下角片  
骨等  
口唇部外側 ヨコナギ  
体部外側 ヨコナギ  
口唇部内側 ヨコナギ

図4.11 Bブロック出土遺物



図 4.12 C ブロック No.23 トレンチ東断面

弥生時代から古墳～奈良時代にかけての遺物包含層がベース層直上に見られ、上位には平安～鎌倉時代・中世の造構面が認められる。このブロックから主に弥生～奈良時代包含層上面で比較的明瞭な造構が見られるようになる。このブロックの地盤、特にベース層上面の地盤は南に向かってますます高くなり、このブロック南端部分でピークを迎える。

#### 弥生時代

No.24～27・29・31・35で弥生時代の遺物包含層が認められた。荒砂～粗砂を含む粘土質シルト層であり、造構はない。遺物も細片で残存状況は極めて悪い。概ね弥生時代後期を下限とする遺物が出土する。No.35では、包含層より前期の台付鉢の底部（遺物49）が出土した。他に遺物は出土していない為、この遺物のみで時期を決めるのは非常に危険であるが、この部分はベース面が最も高くなっている部分であるため、前期の包含層と考えても層位的にも問題はないと思われる。

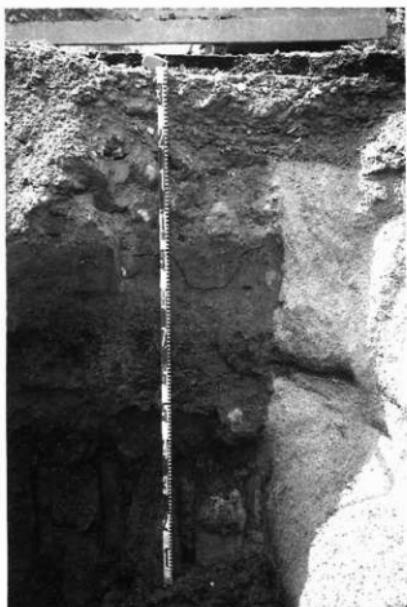


図 4.13 C ブロック No.30 トレンチ南断面

**4.5.3 C ブロック**  
C ブロックは、起点より 85m～210mまでの区間を指す No.22～37。本来 No.37 から南は本調査区間であり、次のブロックに入れるほうが適切かもしれないが、堆積環境をみると、No.37 と No.38 から南とでは違いが顕著であることから、ここ No.37 までをこのブロックに含めた。

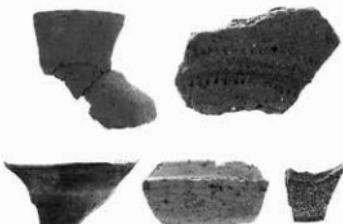
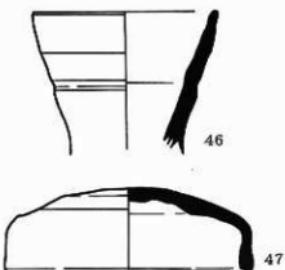


図 4.14 C ブロック出土遺物



報告No46 痢便器 平底 Cブロック  
口径 7.4cm 脱高 5.5cm 最大径 10.3cm 横 長さ 厚さ  
内: NS/0褐色 外: NH/0褐色 4.0mm以下石  
口縁部外側ナヂ ハリナナ 体部外側ナヂ  
底部外側  
口底部内面ナヂ 体部内面

報告No47 痢便器 扇形 Cブロック  
口径 10.9cm 脱高 3.4cm 最大径 12.5cm 横 長さ 厚さ  
内: NS/0褐色 外: NH/0褐色 2.0mm以下石・角石  
口縁部外側ナヂ 体部外側  
底部外側 ケツリ  
口底部内面ヨコナヂ 体部内面



報告No48 痢便器 扇形 Cブロック SK-01  
口径 10.5cm 脱高 3.8cm 最大径 12.5cm 横 長さ 厚さ  
内: NS/0褐色 外: NH/0褐色 2.0mm以下石  
口縁部外側ヨコナヂ 体部外側  
底部内面ヨコナヂの底不 体部内面ヨコナヂの底不  
方円のナヂ



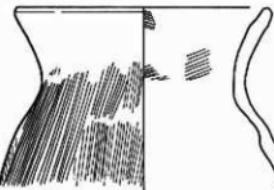
報告No61 痢便器 高杯(脚部) Cブロック古墳時代包含層  
口径 脱高 1.7cm 最大径 10.3cm 横 長さ 厚さ  
内: NS/0褐色  
口縁部外側 体部外側  
底部内面 体部内面

図 15



62

報告No62 痢便器 杯(身) Cブロック古墳時代包含層  
口径 11.2cm 脱高 4.1cm 最大径 13.8cm 横 長さ 厚さ  
内: SF07/明褐色  
口縁部外側ヨコナヂ 体部外側  
底部内面ヨコナヂ 体部内面



64

報告No64 土師器 樽 Cブロック古墳時代包含層  
口径 10.3cm 脱高 7.3cm 最大径 11.8cm 横 長さ 厚さ  
内: 7.5SYW6/灰褐色  
口縁部外側ヨコナヂ 体部外側  
底部内面ヨコナヂ 体部内面



65

報告No65 土師器 樽 Cブロック古墳時代包含層  
口径 11.1cm 脱高 4.4cm 最大径 13.8cm 横 長さ 厚さ  
内: SYW6/褐色  
口縁部外側ユビオサエ ハケ 体部外側 ユビオサエ  
底部内面 ヨコナヂ 体部内面



図 4.15 C ブロック出土遺物

0 10cm

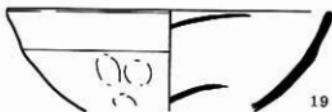


18

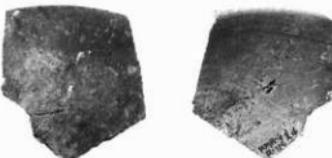
報告No18 瓦器 小皿 Cブロック中世包含層  
口径 8.3" 器高 4.2" 最大径 16.5" 直径 條 長さ 厚さ 高さ  
内: N60灰色 外: N60灰色 0.5mm以下鉄石  
口縁部外側 ヨコナダ 体部外面 ナダ 底部外面 備考  
口縁部内面 ヨコナダ 体部内面 ヨコナダの模様 底部内面 文



18



19



19

報告No19 瓦器 筋 Cブロック中世包含層  
口径 13.3" 器高 4.2" 最大径 16.5" 直径 條 長さ 厚さ 高さ  
N40灰色 0.5mm以下鉄石  
口縁部外側 ヨコナダ 体部外面 ユビオサエ 底部外面 備考  
口縁部内面 ヨコナダ 体部内面 ヨコナダの模様 底部内面 文



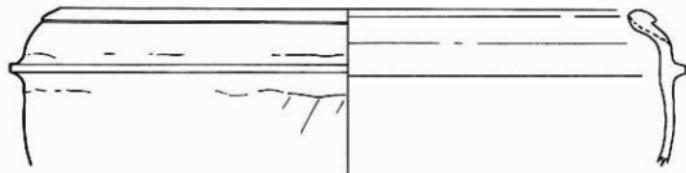
21



報告No21 土師器 皿 Cブロック中世包含層  
口径 7.8" 器高 1.6" 最大径 10.5" 直径 條 長さ 厚さ 高さ  
10YR2/0に近い黄褐色 1mm鉄石  
口縁部外側 ヨコナダ 体部外面 ユビオサエ 底部外面 備考  
口縁部内面 ヨコナダ 体部内面 ナダ 底部内面 土色



20



20

報告No20 土師器 瓢箪 Cブロック中世包含層  
口径 23.8" 器高 6.4" 最大径 28.0" 直径 條 長さ 厚さ 高さ  
内: 7.5YR2/4浅赤褐色 外: 7.5YR2/0浅赤褐色 2.0mm以下鉄石 1.0mm以下石英  
口縁部外側 ヨコナダ 体部外面 タズリ 底部外面 備考  
口縁部内面 ヨコナダ 体部内面 ナダ 底部内面

0

10cm



図 4.16 C ブロック出土遺物

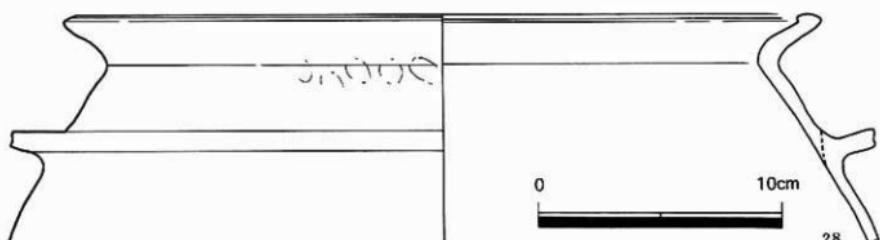
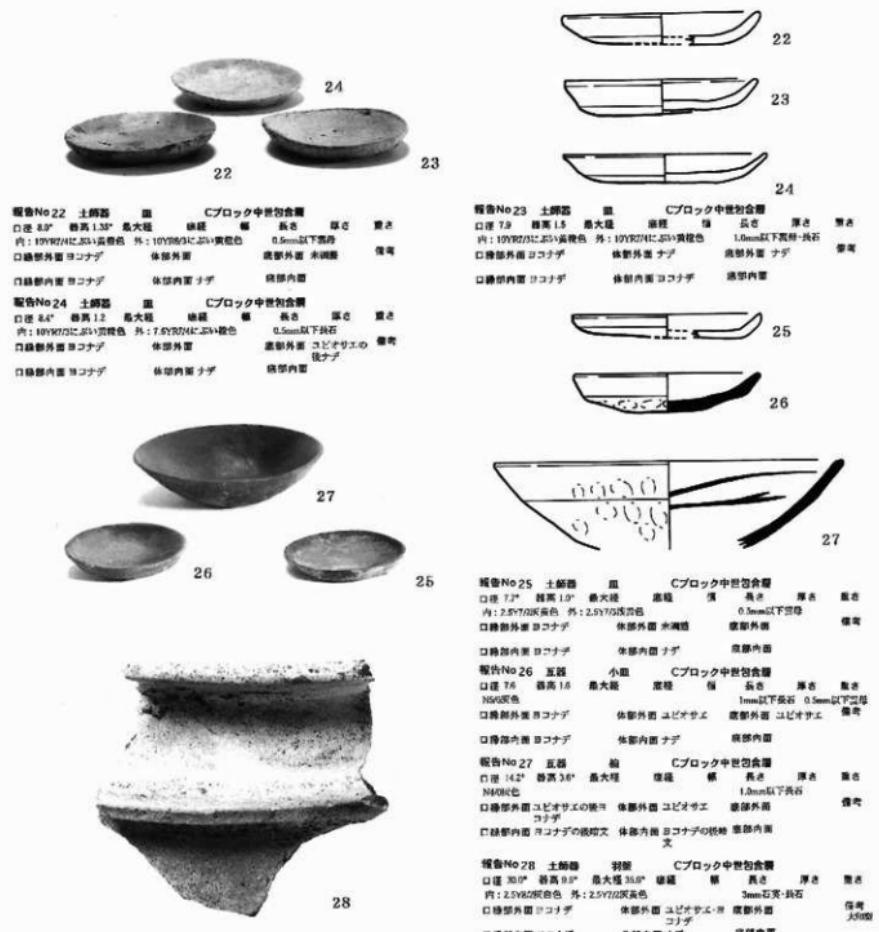
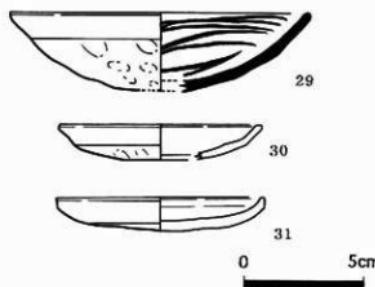
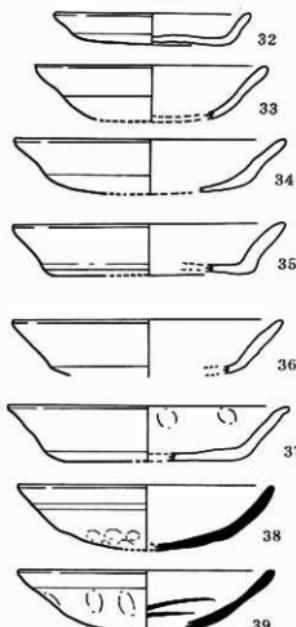


図 4.17 C ブロック出土遺物



報告No.29 互器 梶  
Cブロック中世包丁層  
口径 12.4cm 段高 3.2cm 最大深 底径 梶 長さ 厚さ  
内: N50灰褐色 外: N50灰褐色 1.0mm以下鉄石  
口縁部外側ヨコナデ 体部外側 ユビオサエ 底部外側 ヨビオサエ  
口縁部内面 ヨコナデの複数文 体部内面 不化方向のナデ 底部内面  
の複数文



報告No.32 土器器 梶  
Cブロック中世包丁層  
口径 7.5cm 段高 1.7cm 最大深 底径 梶 長さ 厚さ  
内: 10YR7/2Nに近い黄褐色 外: 10YR7/2Nに近い黄褐色 0.5mm以下鉄石  
口縁部外側ヨコナデ 体部外側 底部外側 未測定  
口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 底部内面 ナデ

報告No.33 土器器 梶  
Cブロック中世包丁層  
口径 9.5cm 段高 2.2cm 最大深 底径 梶 長さ 厚さ  
内: 10YR7/2Nに近い黄褐色 外: 10YR7/2Nに近い黄褐色 0.5mm以下鉄石  
口縁部外側ヨコナデ 体部外側 ナデ 底部外側  
口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 底部内面



報告No.30 土器器 梶  
Cブロック中世包丁層  
口径 8.2cm 段高 1.4cm 最大深 底径 梶 長さ 厚さ  
内: 10YR7/2Nに近い黄褐色 外: 10YR7/2Nに近い黄褐色 4mm以下鉄石 2.5mm石英 0.5mm以下雲母  
口縁部外側ヨコナデ 体部外側 ヨビオサエ 底部外側 ヨビオサエ  
口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ナデ

報告No.31 土器器 梶  
Cブロック中世包丁層  
口径 8.6cm 段高 2.2cm 最大深 底径 梶 長さ 厚さ  
内: 10YR7/2Nに近い黄褐色 外: 10YR7/2Nに近い黄褐色 2mm石英-長石 3mm雲母  
口縁部外側ヨコナデ 体部外側 ナデ 底部外側 ナデ  
口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 底部内面



報告No.34 土器器 梶  
Cブロック中世包丁層  
口径 11.1cm 段高 2.2cm 最大深 底径 梶 長さ 厚さ  
内: 10YR7/2Nに近い黄褐色 外: 10YR7/2Nに近い黄褐色 1mm以下鉄石  
口縁部外側ヨコナデ 体部外側 ナデ 底部外側 ヨビオサエ  
口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 底部内面

報告No.35 土器器 梶  
Cブロック中世包丁層  
口径 11.1cm 段高 2.1cm 最大深 底径 梶 長さ 厚さ  
内: 10YR7/2Nに近い黄褐色 外: 10YR7/2Nに近い黄褐色 0.5mm以下鉄石 2mm石英  
口縁部外側ヨコナデ 体部外側 ナデ 底部外側 ヨビオサエ  
口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 底部内面

報告No.36 土器器 梶  
Cブロック中世包丁層  
口径 11.1cm 段高 2.2cm 最大深 底径 梶 長さ 厚さ  
内: 10YR7/2Nに近い黄褐色 外: 10YR7/2Nに近い黄褐色 1mm以下シラリ石 0.5mm以下雲母  
口縁部外側ヨコナデ 体部外側 ナデ 底部外側 ヨビオサエ  
口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 底部内面

報告No.37 土器器 梶  
Cブロック中世包丁層  
口径 11.4cm 段高 2.3cm 最大深 底径 梶 長さ 厚さ  
内: 10YR7/2Nに近い黄褐色 外: 10YR7/2Nに近い黄褐色 2.5mm以下シラリ石 1mm以下の雲母  
口縁部外側ヨコナデ 体部外側 ナデ 底部外側 ヨビオサエ  
口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 底部内面

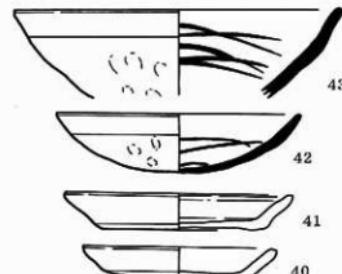
報告No.38 土器器 梶  
Cブロック中世包丁層  
口径 10.5cm 段高 2.7cm 最大深 底径 梶 長さ 厚さ  
内: 10YR7/2Nに近い黄褐色 外: 10YR7/2Nに近い黄褐色 3.0mm以下鉄石  
口縁部外側ヨコナデ 体部外側 ナデ 底部外側 ヨビオサエ  
口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ナデ 底部内面 ナデ

報告No.39 互器 梶  
Cブロック中世包丁層  
口径 10.4cm 段高 2.4cm 最大深 底径 梶 長さ 厚さ  
内: 10YR7/2Nに近い黄褐色 外: 10YR7/2Nに近い黄褐色 0.5mm以下長石  
口縁部外側ヨコナデ 体部外側 ヨビオサエ 底部外側 ヨビオサエ  
口縁部内面 ヨコナデ 体部内面 ナデ 底部内面 ナデ

図4.18 Cブロック出土遺物



報告No.40 土器器		Cブロック中世包含層					
口径	高さ	最大径	底径	幅	長さ	厚さ	重さ
口径 3.9	高さ 1.4	最大径	底径	幅	長さ	厚さ	重さ
内：10YR5/1に近い黄褐色	外：MYR10/1に近い黄褐色		1mm以下クリヤー	0.5mm以下薄片			
口縁部外側 ヨコナヂ	体部外側	底部外側 ナジの吸エビ	底面				
口縁部内側 ヨコナヂ	体部内側	底部内側 ユビオサエの	ナジ	ナジ	ナジ	ナジ	ナジ
報告No.41 土器器	皿	Cブロック中世包含層					
口径 9.2*	高さ 1.5	最大径	底径	幅	長さ	厚さ	重さ
10YR7/3に近い黄褐色		0.5mm以下クリヤー	底板・長石・石英				
口縁部外側 ヨコナヂ	体部外側	底部外側 木製底	底面				
口縁部内側 ヨコナヂ	体部内側	底部内側 ナジ	ナジ	ナジ	ナジ	ナジ	ナジ



報告No.42 瓦器		Cブロック中世包含層					
口径	高さ	最大径	底径	幅	長さ	厚さ	重さ
口径 9.8	高さ 2.4	最大径	底径	幅	長さ	厚さ	重さ
内：SYR10白色	外：SYR10灰色		0.5mm以下長石				
口縁部外側 ヨコナヂ	体部外側	ユビオサエの壁	底部外側				
口縁部内側 ヨコナヂ	体部内側	ヨコナヂの後縁	底部内側 ヨコナヂの後	文	文		
報告No.43 瓦器		Cブロック中世包含層					
口径	高さ	最大径	底径	幅	長さ	厚さ	重さ
口径 13.4	高さ 3.0	最大径	底径	幅	長さ	厚さ	重さ
内：NAW灰色	外：NAW灰色		0.5mm以下長石・雲母				
口縁部外側 ヨコナヂ	体部外側	ユビオサエ	底部外側				
口縁部内側 ヨコナヂ	体部内側	ヨコナヂの後縁	底部内側	文	文		



44

報告No.44 土器器		Cブロック中世包含層					
口径	高さ	最大径	底径	幅	長さ	厚さ	重さ
口径 10.0	高さ 3.0	最大径	底径	幅	長さ	厚さ	重さ
内：10YR10/1-JIV黄色	外：10YR10/1-JIV黄色		0.5mm以下長石・雲母				
口縁部外側 ヨコナヂ	体部外側	ナジ	底部外側				
口縁部内側 ヨコナヂ	体部内側	ナジ	底部内側	文	文		



45

報告No.45 瓦器		Cブロック中世包含層					
口径	高さ	最大径	底径	幅	長さ	厚さ	重さ
口径 12.0	高さ 3.4	最大径	底径	幅	長さ	厚さ	重さ
内：NAW灰色	外：NAW灰色		1.0mm以下長石				
口縁部外側 ヨコナヂ	体部外側	ユビオサエ	底部外側				
口縁部内側 ヨコナヂ	体部内側	ヨコナヂの後縁	底部内側	文	文		

図4.19 Cブロック出土遺物

#### 古墳～奈良時代

No.28～30・32・33・37で古墳～奈良時代の遺物が認められた。この包含層は主に砾から荒砂を含むシルト質粘土～粘土質シルト層で、須恵器壊身・高坏、土器器小型甕（遺物 61・62・64）などを始めとする遺物が比較的多く出土した。遺構はNo.33で溝状の切合が断面で認められたが、詳細は不明である。この遺構の時期は、遺構内からの遺物の出土はないが、直上の層から古

墳時代の土師器壺（遺物65）が出土していることから古墳時代以前に比定できる。このほか、No.37で掘り込み面は削平を受けており不明だが、この包含層上面で遺構を検出した。検出した遺構は北半分がトレンチ外に広がるため、正確な規模は掴めないが、直径1.5m、深さ0.5m以上の不正円形を呈した土壠もしくは井戸と思われる遺構である（SK-01。ここでは土壠としてSKを使用する）。遺構内に堆積した層の中位から、須恵器の壺身・壺蓋・平瓶（遺物46～48）などが出土した。古い遺物も混入しているが、出土遺物の下限年代が8世紀後半に比定できることから、それ以降に廃絶した遺構であることがわかる。

#### 平安～鎌倉時代

No.31～33・35で平安～鎌倉時代の遺物包含層が認められた。この包含層は主に荒砂～粗砂を含むシルト層で遺構は認められない。遺物も細片であり同化可能なものはない。

#### 中世

中世の包含層はこのCブロック全体を通じて確認することができ、部分的に1mの厚さで堆積するところもある。主に荒砂から粗砂を含むシルト～シルト質粘土層からなり、鉄分やマンガン分が多く含まれることなどから耕作土であったと思われる。堆積土中には瓦器碗や土師器皿を始めとする多くの遺物が出土した。（遺物18～45）またはほぼ全域で下位の包含層との層境部分を中心

に人為的な凹凸が認められる。しかし調査の性格上、その大部分は断面にて存在を確認したに過ぎず、遺構として平面で確認できたものは一部である。

No.22・23では現地表面から約1.2m下方付近で、溝や人間の足跡と思われる遺構を検出した。遺構内から遺物の出土はないが、これら遺構を覆う堆積層からは瓦器の小皿（遺物18）を始めとする13世紀末から14世紀にかけての特徴を有する遺物が出土した。

No.24～27では、No.23まで下位に存在した平安～鎌倉時代の包含層は無く、直接弥生時代の包含層となる。中世包含層の下端の高さは、Bブロックの中程よりあまり変化していないことから、地形形成時より地盤が高かったことが指摘できる。したがって平安～鎌倉時代の包含層は、この部分に当初から存在しなかったのか、もしくは中世の削平によって失われた可能性が示唆される。

層中からは、土師器の皿・瓦器碗や小皿の他、土師器羽釜等（遺物19～27）13世紀後半～14世紀前半の特徴を持つ遺物が多く出土した。



図4.20 Cブロック No.36 トレンチ

SD-01 検出状況(北から)

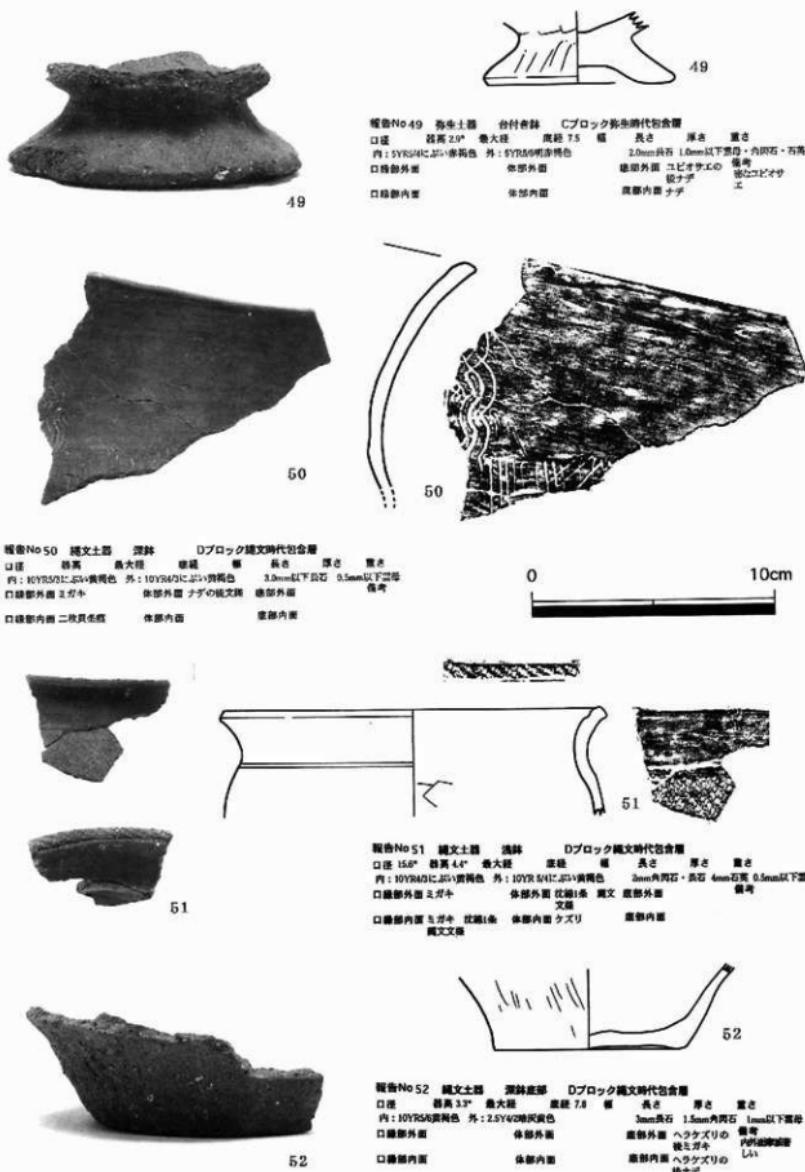


図4.21 D ブロック出土遺物



図 4.22 D ブロック出土  
縄文土器

No.28・29では断面において、下位包含層の上面に人為的な凹凸が顕著に認められたが、詳細は不明である。包含層中から瓦器椀・土師器皿（遺物 29～30）等13世紀後半から14世紀にかけての特徴を有する遺物が出土した。

No.30では、現地表面下約0.5mのところで幅0.2m、深さ0.1mの南北方向の溝を検出した。溝の中から遺物の出土はないが、溝を覆う堆積層からは馬の歯や、瓦器椀・土師器皿（遺物 32～38）など多くの遺物が出土した。この層から出土する遺物は、概ね13世紀末～14世紀初頭以降の時期のものであり、この溝のベースとなつた層からは13世紀後半を下限とした遺物が出土していることから、13世紀後半から末にかけてこの溝は稼働したことがわかる。同じ部分では、この溝の下位に古墳～奈良時代の遺物包含層を掘り込んで造られた落ち込みが見られる。幅約0.3m、深さ約0.15mを測る。これも遺構に伴う遺物の出土はないが、遺構を覆う堆積層から13世紀後半を下限とした遺物（遺物 40～43）が出土していることから、13世紀後半以前に廃絶したことがわかる。

No.33では、平安～鎌倉時代包含層を掘り込んだ南北方向の溝を検出した（SD-01）。幅0.5m以上、深さ0.17mを測る。溝を覆う堆積層からは13世紀末～14世紀初頭の遺物が出土しており、稼働の下限をこの時期以前に比定できる。

#### 近世

このブロックでは北端と南端の部分でのみ近世以降の遺物包含層が見られる。主に粗砂を含んだシルト層で畑作に伴う耕作土である。耕作に伴う若干の起伏が堆積中に見られるが、平面として明瞭な造構は認められなかった。遺物は、図化可能なものはないが、下駄や箸・染付陶器・瓦等が出土した。

#### 4.5.4 D ブロック

DブロックはCブロックに含まれ、起点から145m～170m（No.34を含む南北25m）の区間を指す。奈良～平安時代の遺物包含層の下層部分に、縄文時代の包含層が認められるため、新たなブロックを設定した。Dブロックは路線に搅乱が多く、地盤が非常に脆かったことから下層部分を含め、包含層や遺物が断面で確認できた所はNo.34の部分1ヶ所であった。しかし、断面本調査部分においても、No.34で確認した縄文時代包含層相当層より縄文時代後期の遺物を採集した。（図 4.22）

#### 縄文時代

現地表面下1.3mからは縄文時代の遺物包含層を



図 4.23 D ブロック No.34 トレンチ南断面



図 4.24 本調査区間（E ブロック）調査前風景



図 4.25 本調査区間機械掘削(北から)

確認した。暗オリーブ灰色荒砂混シルト質細砂層の包含層からは、縄文時代の浅鉢型土器（遺物 51）の他、波状口縁を有し、北白川上層式の特徴を呈する深鉢型土器（遺物 50）などが出土した。他の出土遺物も時期的に大きな差が見られないことから、この包含層は縄文時代後期に比定できる。断面および平面から遺構は認められなかった。



図 4.26 E ブロック SK-02 遺物出土状況(東から)



図4.27 E ブロック  
SD-02-03 検出状況  
(南から)

#### 平安～鎌倉時代

シルト質粘土が混る荒砂層で、遺構はない。遺物は細片で固化可能なものはないが、土師器や須恵器が出土した。

#### 近世

盛り土直下に近世の耕作痕跡を確認した。オリーブ色シルト質細砂～黒色シルト混荒砂層で1～2層の層境部分には若干の凹凸が見られる。堆積環境からこの耕作痕跡は、畑作に伴うものと考えられる。遺物は細片であり固化可能なものはない。直下の包含層から出土する遺物の下限年代は鎌倉時代であり、このブロックでは中世の遺構面および、遺物包含層は確認できなかった。

#### 4.5.5 E ブロック

このブロックは起点より南に240m～280mまでの部分No.38～43を言う。この区間以南は本調査の区間である。

#### 弥生時代

ブロック全体で赤生時代の遺物包含層が確認できた。主に中疊から粗砂を含む粘土質シルトから砂層で、台付鉢や体部にタタキメを有する甕など弥生時代後期の特徴を有する遺物が出土した（遺物56～59）。遺構は、土壙や溝を検出した。土壙（SK-02）は、搅乱等でトレーンチ幅（1m）で一端を検出したに過ぎず全体の規模は確認できなかった。この遺構からは弥生時代後期の特徴を有する器台（遺物60）が出土した。溝は、切合い関係を有する2条（SD-02・03）検出した。

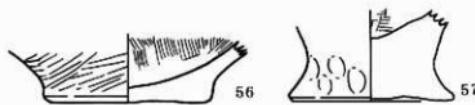
SD-02はSD-03埋没後その北の肩部分を掘り込んで造られ、幅0.4m、長さ0.6m以上、深さ0.15m以上の規模を呈し東西方向にトレーンチを横断する溝である。SD-03は幅0.6m、長さ0.6m以上、深さ0.2m以上の規模を呈し、SD-02同様トレーンチを東西方向に横断する溝である。SD-02・03とともに掘り込んだ面は古墳～奈良時代の包含層堆積以前に削平されており、本来の深さはわからな

#### 弥生時代

縄文時代後期の遺物包含層の上位には、平安～鎌倉時代の包含層まで無遺物の層が約0.5m堆積している。隣接するCブロックNo.35では、この無遺物層に相当する部分より弥生時代前期の遺物（遺物49）が出土していることから、この無遺物層の一部は弥生時代に相当する層である可能性が指摘できる。



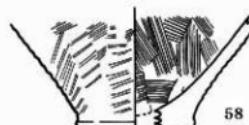
56



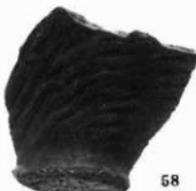
報告No 56 発生土器 底部  
Eブロック発生時代包含層  
口径 縦高 2.6° 最大径 10cm 厚さ 1.0mm  
内: 2.5YR5/2暗灰褐色 外: 10YR5/2に近い黄褐色 1.0mm以下石英  
口縁部外側 体部外側 ヘラミガキ 底部外側 ナデ作成  
Eブロック発生時代包含層  
口縁部内面 ハケメ 体部内面 ナデ  
報告No 56 発生土器 台付骨盤 Eブロック発生時代包含層  
口径 縦高 3.8° 最大径 8.4cm 厚さ 1.0mm  
内: 7.5YR5/6褐褐色 外: 7.5YR5/6に近い黄褐色 1.0mm以下石英・角閃・石英  
口縁部外側 ナデ ヒビオサ 底部外側 工具ナデの痕 ヒビオサ  
Eブロック発生時代包含層  
口縁部内面 ハケメ 体部内面 ナデ



57



報告No 57 発生土器 深底部 Eブロック発生時代包含層  
口径 縦高 4.5° 最大径 10cm 厚さ 2.0mm  
内: 10YR5/2暗灰褐色 外: 10YR2/2黒色 2.0mm以下石英  
口縁部外側 ハケメの跡タク 底部外側 ヘラミガキ? 内側剥片  
Eブロック発生時代包含層  
口縁部内面 ハケメ 底部内面 ハケメ



58



報告No 58 発生土器 横 Eブロック発生時代包含層  
口径 縦高 4.5° 最大径 10cm 厚さ 2.0mm  
内: 10YR5/2暗灰褐色 外: 10YR2/2黒色 2.0mm以下石英  
口縁部外側 ハケメの跡タク 底部外側 ヘラミガキ? 内側剥片  
Eブロック発生時代包含層  
口縁部内面 ハケメ 底部内面 ハケメ



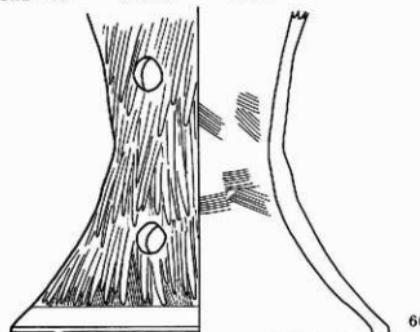
59



報告No 59 発生土器 横 Eブロック発生時代包含層  
口径 縦高 4.5° 最大径 10cm 厚さ 2.0mm  
内: 7.5YR5/6褐褐色 外: 7.5YR5/6褐褐色 2.0mm以下石英  
口縁部外側 ヒコナテ 体部外側 タタキス  
Eブロック発生時代包含層  
口縁部内面 ヒコナテ 体部内面 ナデ



60

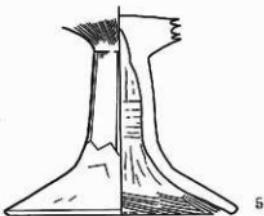


報告No 60 発生土器 頂台 Eブロック発生時代包含層  
口径 縦高 10.3° 最大径 15.4cm 厚さ 1.5mm  
内: 10YR7/3に近い黄褐色 外: 10YR2/2に近い黄褐色 2.5mm石英 1.5mm石英  
口縁部外側 体部外側 ヘラミガキ 底部外側 ハケメの痕へ  
Eブロック発生時代包含層  
口縁部内面 ハケメの痕ナデ 底部内面 ヒコナテ  
ナデ

0

10cm

図 4.28 E ブロック出土遺物



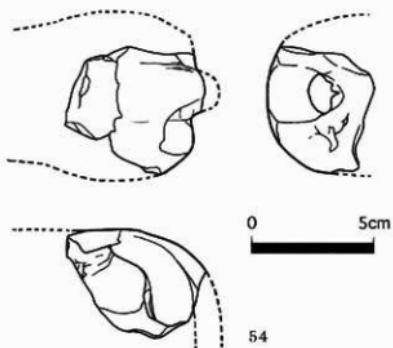
53

報告No 53 土器  
口径 番高 8.3°  
7.5YR6褐色  
口縁部外面  
口縁部内面

高杯脚部 Eブロック古墳～奈良時代包含層  
最大径 底径 9.2 傷 長さ 厚さ 重さ  
3mm石英・長石  
体部外側 ハケヌ、網目、体部外側 クズリの使力、偏光  
ズム、子  
体部内面 クズリ(網目) 底部内面 ハケヌの後ナメ



53



0 5cm

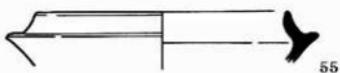


54

報告No 54 土器  
口径 番高 7.5YR6褐色  
口縁部外面  
口縁部内面

土馬 Eブロック古墳～奈良時代包含層  
最大径 底径 5.2° 傷 長さ 5.7° 厚さ 0.3° 重さ  
1.3mm以下長石  
体部外側  
体部内面  
底部内面

傷等  
大きさ欠損、  
部分にリアル  
な作り



55

報告No 55 頸部器 环舟 Eブロック古墳～奈良時代包含層  
口径 10.3° 番高 2.2° 最大径 底径 傷 長さ 厚さ 重さ  
内: 7.5YR6褐色 外: 2.5YR10白色  
口縁部外側ヨコナギ  
口縁部内面ヨコナギ

環舟 Eブロック古墳～奈良時代包含層  
底部外側  
底部内面



55

#### 図4.29 Eブロック出土遺物



図4.30 E ブロック SK-03 検出状況(東から)



図4.31 E ブロック SD-04 検出状況(南から)

い。遺構内からは、団化可能な遺物の出土はないが弥生時代後期の特徴を持つた遺物が出土している。遺構のベース層からは、平底で周間に右上がりのタタキメを有する壺（遺物58）や厚い台状の平底で、底部端部に指オサエの痕が明瞭な台付鉢（遺物57）などが出土していることから、これら溝の開削、廃絶の時期を弥生時代後期以降古墳時代以前の時期に比定できる。

#### 古墳～奈良時代

No.42・No.43 トレンチでは、古墳時代以降の遺物包含層が認められる。上に荒砂～粗砂を含むシルト層で遺構は認められない。遺物はNo.43 トレンチから尻の部分だけではあるが土馬（遺物54）や土師器高坏など須恵器・土師器を含む多量の遺物が出土した。古い遺物も混入するが概ね7世紀ごろのものと思われる。

#### 平安～鎌倉時代

No.39～41 トレンチで平安～鎌倉時代の遺物包含層を確認した。No.39・40では主に砂礫層からなり堆積環境から河川堆積物と思われる。No.41では中疊～荒砂を含むシルト層である。いずれのトレンチにおいても遺構は認められなかった。遺物は細片であり残存状態も悪い。団化可能な遺物はないが、土師器の高坏・須恵器等とともに黒色土器が出土した。

#### 4.5.6 F ブロック

このブロックは起点より南へ295m～工事区間最終の325mの部分No.44～46をいう。工事区間の最上流区間であることから、掘削深度も全工程を通じて最も浅い。また地形も南端部に向かって下がってゆくため、今回の掘削深度ではベース面は検出できなかった。

##### 古墳～奈良時代

このブロックでは各トレンチの最下層で古墳～奈良時代の遺物包含層を確認することができた。主に粗砂の混じるシルト～粘土質シルト層で、弥生時代後期の遺物とともに土師器や須恵器等6世紀後半～7世紀の遺物が出土した。

No.44トレンチでは、この遺物包含層を掘り込んだ土壤を検出した。この土壤は、東半分がトレンチ外に伸びるため全体の規模は不明であるが、直径0.9mの不定円形を呈し、深さは0.7m以上の規模を呈する。直上には、中世の遺物包含層があり、本来の掘り込み面は不明である。多くの弥生時代後期の土器とともに、奈良時代の土師器や須恵器が細片であるが出土した。出土遺物から奈良時代以降に廃絶した造構であることがわかった。

##### 平安～鎌倉時代

No.45で平安～鎌倉時代の遺物包含層を確認した。粘土質シルト層で固化可能な遺物はないが平安時代の土師器や須恵器が出土した。造構は認められなかった。

##### 中世

各トレンチで、約0.2mの盛り土直下より中世の遺物包含層を確認した。シルトから粗砂を含むシルト層で南側に向かって堆積の厚みを増す。遺物は細片で固化可能なものはないが、瓦器や土師器の他、染め付けや青磁等など多くの遺物が出土した。造構は、溝やピットが断面から確認することができたが、平面では確認できたものはほとんど無く、その規模および広がりについては不明である。唯一平面で確認した溝状の造構（SD-04）も、ほとんどが既設管の埋設時に搅乱を受けており、幅0.1m、深さ0.3m以上、長さ0.5mの部分を検出できたに過ぎない。造構内から遺物の出土は無く、検出面は後世の削平を受けており、掘り込み面も明らかでないことから、この造構の詳細な時期は不明である。

#### 4.6 まとめ

今回の調査は、下水管敷設工事に伴う調査であり、調査区間全体で工事工程を優先に進めなければならなかった点、深さはあるもののトレンチ幅が狭く造構や包含層の広がりを平面で捉えることができなかった点、敷設路線の北側半分が遺跡隣接地として本来の遺跡範囲外であったことから、立会調査と言う形にならざるを得なかった点、等調査の条件としては決して良好ではなかった。しかし、遺跡のデータ蓄積の一貫として遺跡の広がりと堆積環境の確認に主眼を置く調査を心がけた結果、今回の調査区間全体を通して、縄文時代後期から近世に至る複合遺跡であることを確認することができた。特に今回遺跡範囲外として立ち会い調査の区間であった部分においても、遺跡の広がり及び、地形

形成の一端を知ることができる堆積環境を確認できたことは、成果の一つとしてあげができるだろう。

最後に、調査区全体を通して各時期ごとにまとめてみたい。

#### 縄文時代

Dブロックで遺物包含層を検出し、後期（北白川上層式に相当）の遺物が出土した。遺構は確認できず、遺物包含層の広がりについても今回の調査では明確には確認できなかった。しかし、西方約100mにある縄手遺跡を含め、縄文時代の遺跡の広がりを考えるデータを供給することができたと考える。また堆積環境や立地等から考えても縄文時代の遺跡は、今回の東方に広がる可能性が考えられる。

#### 弥生時代

B・Fブロックを除くほぼ全域で確認することができた。特に、A・Eブロックでは卓越した状況を呈する。中でも遺構を伴うものはEブロックに限られ、出土遺物も後期の遺物に限定される。Aブロックからは中期、Bブロックからは前期の遺物が出土することから、遺物の時期によって出土する地区に違いがあることがわかる。しかしこれは、単に高い部分が後世に削平された結果であるのか、時期によって住み分けがなされていたのか、今回の調査結果からは判断できない。データの増加を待って今後の課題としたい。

#### 古墳～奈良時代

Dを除く各ブロックで遺物包含層および若干の遺構を確認できた。Aブロックでは、北側は平安～鎌倉時代の上石流によって削平され確認できなかつたが、南側は主に河川であった。下位との層境部分に人間の足跡を検出した。Cブロックでは北側には存在せず、南側に卓越する。Eブロックの南端からFブロックにかけて包含層を確認した。BブロックからCブロック北側およびEブロック北側で当該時代の包含層・遺構が確認できない理由として、後世の削平によることがあげられる。Cブロック南側およびFブロック北側で検出した遺構は、8世紀後半以前に稼働した遺構であり、周辺に同時期の集落の存在が想定できる。

#### 平安～鎌倉時代

A～Fの各ブロックで遺物包含層および遺構を確認しているが、後世の削平のためか各ブロックで確認できる所は部分的である。Aブロックでは、全幅120mを越える規模の土石流の痕跡を確認した。この土石流は、後世（中世）にも影響を与え、再び土石流をほぼ同地に起こす誘因となっている。Bブロックでは下位の包含層等を削平し、比較的良好な状態で遺存している。B～Fブロックでは、上位の包含層の影響を受け、削平や遺構の掘り込み等がなされているが、当該時代の遺構はない。全体的に遺構も少なく、遺物も細片のものが多い。堆積環境から見てもこの時代このあたりは、耕作域として利用されてい

たものと考えられる。

### 中世

A～C・Fの各ブロックで遺物包含層及び遺構が確認された。Aブロックでは遺物包含層の他に、遺構ではないが土石流の痕跡を確認した。推定の復元を加えると全幅120mを越える規模の土石流が想定でき、前代(平安～鎌倉時代)に起きた土石流とほぼ同じ所に発生したことがわかった。B・Cブロックでは、全体的に遺物包含層が確認できた。特にCブロックでは包含層とともに遺構が確認できた。しかし残念ながら、平面で遺構の広がりや深さを追うことは不可能であった。柱穴や溝等生活に関連する遺構が確認されていることから、周辺を含め集落の存在が伺われる。また、Eブロックでは後世の削平のためにこの時期の包含層および遺構は全く確認されなかった。Fブロックでは、逆に南に下がる環境から遺構を伴う厚い包含層の堆積を確認した。出土遺物から見ると、概ね13世紀後半から14世紀前半の遺物が多く、中でもBブロックから砥石等の出土が見られることから、13世紀後半～14世紀前半を中心とした集落が調査地を含む周辺に営まれていたことが想定できる。

### 近世

A～Dの各ブロックで遺物包含層等が確認された。Bブロックではほぼ全面で確認したが、AブロックではNo.11で確認したに過ぎない。またCブロックでは、北部と南部に一部確認した。明瞭な遺構としては確認できず、C・Dブロックで耕作に伴うと見られる凹凸が断面で確認されたに過ぎない。Bブロックでは、網片ではあるが多量の遺物が出土した。これらのことから、16世紀以降Bブロックを中心に南側の部分に耕作地として使用されていたことがわかった。

以上各時期ごとに全体の調査成果をまとめたが、各時代を通じて居住地とするよりむしろ、概ね耕作地として当地を利用してきたことがわかった。それは、同時に地形の形成過程と立地条件が大きく影響を及ぼしていることも明らかになつた。

複合遺跡としてのデータが少ない地域であることから、今回の調査は一片の成果に過ぎない、今後周辺アーティアの増加を待ち、遺跡の性格を解明していく。

なお今回の調査成果によって東大阪市教育委員会は、北側の従来遺跡範囲外の部分も遺跡としてとらえ遺跡範囲を拡大した。拡大した範囲は、縄手遺跡の北方で、今回の起点部分から立会調査部分を全て含んだ範囲まで拡大された。

### 註

- (1) 文化財要覧II 東大阪市教育委員会 1973
- (2) 上六万寺遺跡 東大阪市遺跡保護調査会 1973

この報告をみるとかぎり、一括資料とされている弥生土器の出土の状況には疑念が多い。瓦器や磁器なども含む中世以降の2つの包含層からの出土であり、二次堆積と

- される堆積環境の認識などの根拠が不明瞭であることから、調査成果の信憑性に疑問が持たれる為、今回の調査ではこの調査成果は全く無視した。
- (3) 単に遺物だけを見ると、一つのまとまりとして形式を設定することは不可能ではないが、(註2)でも述べたように、層位学的にもっとも重要視されるべき出土状況の信憑性が全くない。
- (4) 本来遺跡の範囲外であるが、遺跡隣接地として立会調査を行った。

- (5) 当協会松田順一郎氏のご教示による。
- (6) その時期については、今後周辺地域の詳細な調査によって明らかにされると思われるが、調査地中央部分で縄文時代後期の遺物包含層が確認され、調査地西方にも縄文時代中期以降の縄手遺跡の存在が明らかであることから、この地域の地形形成時まで遡りうる可能性が示唆される。

#### 参考文献

- 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号  
村本嘉雄・栗田秀明・瀬口雄一・中川一・細田尚・道奥康治 1998 「川のなんでも小事典・川をめぐる自然・生活・技術-」土木学会関西支部編 講談社  
大和古中近研究会 1991「大和の中世土器・瓦器椀・土師皿を中心として-」「大和古中近研究会研究資料1」  
古代の土器研究会編 1992「都城の土器集成」「古代の土器1」古代の土器研究会  
古代の土器研究会編 1993「都城の土器集成II」「古代の土器2」古代の土器研究会  
大和古中近研究会編 1991「大和の中世土器・瓦器椀・土師皿を中心として-」「大和古中近研究会研究資料1」大和古中近研究会  
中世土器研究会編 1995「概説 中世の土器・陶磁器」真隠社

1. 調査の実施にあたっては東大阪市建設局下水道部の援助とともに、施工業者である菊田建設・サンエス建設や、岡崎GPセンターを始めとする調査地周辺市民の方々には多大なご理解・ご協力を得た。ここに記して感謝の意に替えたい。
2. 本書に収録した遺構写真、遺物写真是ともに池崎智詞が撮影した。
3. 調査の際設置した基準点は、(株)サンヨーに委託し設置した。

## 第5章 段上遺跡第8次・下六万寺遺跡第3次調査報告

### 5.1 はじめに

本章では、下水道管理設工事にともなって実施した、段上(だんのうえ)遺跡と下六万寺遺跡における調査結果について述べる。段上遺跡は東大阪市下六万寺町3丁目、末広町、六万寺町3丁目に所在し、これまでの調査によって縄文時代から古墳時代までの遺構・遺物が検出されている。下六万寺遺跡は段上遺跡の南に隣接し、下六万寺町2・3丁目に所在する(図5.1)。長門川沿いの下六万寺墓地付近から刀子・有孔円板・勾玉・管玉・小玉などの滑石製模造品が表面採集されており、かつて付近には土師器・須恵器の破片が散布していたらしい。両遺跡とともに、生駒山地西斜面に集水域をもつ長門川(山地の溪流部は

図5.1 段上遺跡・下六万寺遺跡の周辺地形と調査地点の位置

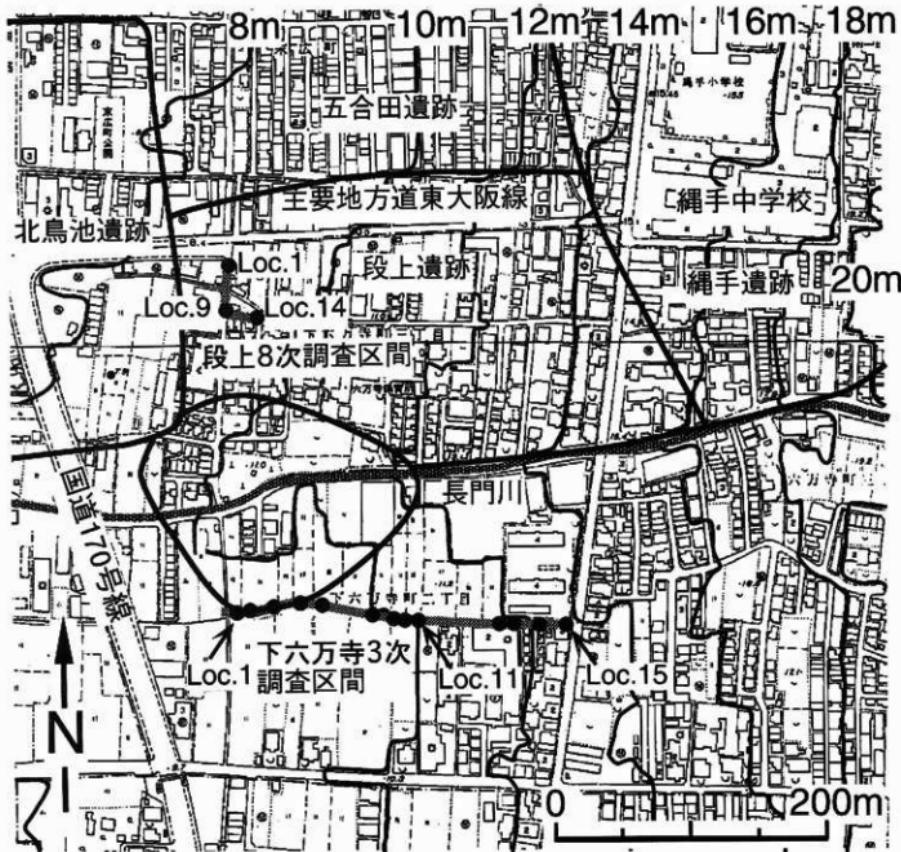




図 5.2 段上遺跡 8 次調査地点。南北区間(Loc.1～9)を北から撮影。



図 5.3 段上遺跡 8 次調査地点。東西区間(Loc.9～14)を東から撮影。



図 5.4 下六万寺遺跡 3 次調査地の掘削状況。Loc.11 付近を東から撮影。



図 5.5 下六万寺遺跡 3 次調査地の掘削状況。  
Loc.3 付近を北東方向に撮影。背景は生駒山地。  
調査地は山脚から発達した扇状地斜面にある。

鳴川)の堆積作用によって発達した扇状地緩斜面の南西下部から扇端部に位置する。段上遺跡の現地表面の標高 8～15m。下六万寺遺跡は 9～12m である。下水管埋設工事路線での調査は、この扇状地緩斜面にトレーナーを設けたかたちで掘削が進められ、長門川沿岸における両遺跡の微地形発達と遺跡形成過程にかかるわる、おもに弥生時代中期から奈良・平安時代までの堆積層の累重を観察することができた。

## 5.2 調査方法

段上遺跡の下六万寺町 3 丁目 4・5 では、平成 9 年 5 月 19 日から 6 月 5 日までの期間に、府道東大阪線から南に約 40m、さらに東に約 30m にわたり、幅 1.5m、平均掘削深度 2.5m で管路の掘削が行なわれた。下六万寺遺跡の下六万寺町 2 丁目 3・2 では、平成 9 年 9 月 3 日から 11 月 12 日までの期間に、遺跡範囲の中心を東西に流れる長門川の南約 100～150m の場所を同川と平行してのびる農道を幅 1.8m、平均掘削深度 2.5m で、管路長約 250m の掘削が行なわれた。調査ではこれらの下水管埋設の機械掘削に立会い、遺構・遺物の有無を確認した。一日の工事区間に終端部分では堆積層の観察を行ない、柱状図を作成した。

## 5.3 層序と地形発達

以下に調査地点間の層序対比の結果を図 5.9, 10 に示し、遺跡を構成する堆積層の特徴と地形発達の概略を述べる。以下、段上遺跡は DNU、下六万寺遺

跡はSMRと表記する。

調査範囲で、もっとも古い堆積層は、SMR, Loc.9～11の柱状下部でみられた、中粒の中疊以細の礫と砂を含み、泥質の堆積物である。土石流堆積物と思われるがひじょうにしまっていた。SMR, Loc.12の柱状下部では、この上位に載る土壤化した泥層、氾濫堆積物とみなされる砂層および流路を充填する砂礫層の累重がみられた。上述した土石流堆積物とともに縄文時代に堆積したと考えられる。SMR, Loc.6～9には、現地表面ばかりでなく、伏在する地層にも、地形面に段をともなうような著しい高度差がある。縄文時代から弥生時代におけるこのような層状地前線の緩斜面と、より下位の地形面との高度差の成因については、さらに調査が必要である。段上遺跡調査地点付近では、10数m東に隣接する第3次発掘調査区との間にこのような高度差が知られている。この調査範囲では、弥生時代中期より古い堆積層の深度には至らなかった。

弥生時代中期(あるいは縄文時代晚期以来とも考えられる)から後期にかけては、DNU, Loc.9以北とSMR, Loc.1～6のそれぞれの場所で、下位の泥がちな堆積層を下刻した流路が充填され、上方細粒化する累重がみとめられる。DNU, Loc.4, 7では、弥生時代中期の流路充填堆積物を下刻し、後期の堆積物が充填され、上方細粒化している。DNU, Loc.10～14にみられる上方粗粒化した砂礫質泥の堆積は、弥生時代中期の流路の埋積と並行して、低湿な湿地状の氾濫原から氾濫堆積物の累重によって離水してゆく過程を示すと解釈される。この氾濫堆積物の累重は新たな層状地面を形成するが、側方よりも上方への堆積作用を主とするものであろう。

DNU, Loc.1～9の弥生時代中期から後期にかけての埋没河道は、東側に隣接する同遺跡第3次・4次発掘調査区の南側を東南東-西北西、あるいは北西方向に屈曲して流下していたと推定される。低地側の流路および氾濫原での堆積速度は比較的速く、また泥質堆積物が卓越することから、この時期には基準面が上昇していたと推測される。弥生時代後期末あるいは古墳時代前期の流路充填堆積物と氾濫原堆積物の累重の最上部、およびこれらと同時期の層準とみなされるSMR, Loc.9～12のより古い層状地面では、土壤化した、有機物に富む泥質堆積物がみとめられる。この層準より下位には、根の痕跡が多くの場合で高密度にみとめられた。部分的には、樹木の根系を識別できるところもあった。以上の弥生時代から古墳時代に古い層状地の前線に発達した新たな層状地斜面の土壤帶は、低地の広い範囲にみられる亜泥炭層に漸移すると考えられる。同層準には、直上の堆積物の堆積時期に生じた地震による変形構造がみとめられた(図5.7)。

古墳時代中期あるいは後期の層準では、両調査地ともに、流路充填堆積物と比較的粗粒の氾濫堆積物が広い範囲でみとめられた。前者の古流向にはばらつきがあり、層状地斜面方向にはほとんど直交する地点もあった。また、流路充填堆積物の洗掘と充填が頻繁に繰り返されており、一つの流路の継続期間が短い



図5.6 DNU, Loc.2の盛土より  
下の柱状上部にみられる古墳  
時代の遺構断面。

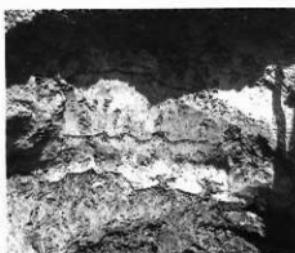
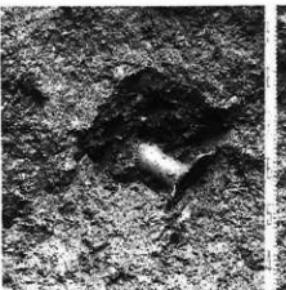


図5.7 DNU, Loc.10付近の  
弥生時代後期から古墳時代にかけ  
ての層準にみられた地盤による  
変形構造。

図5.8 DNU, Loc.2の弥生土器  
出土状況。



ことを示していた。このようなことから、古墳時代後半に両調査地周辺を覆う砂礫層を形成した流路は、小規模で分岐と屈曲の多い網状流路であったと推測される。しかし、未確認であるが、両調査地の間に、より規模の大きな流路があり、調査地で観察された小規模な流路はその分流路である可能性もある。DNU, Loc.7~10では1本の流路が古墳時代後期に埋積され終わっている。いっぽう、流路縁にあたるLoc.13, 14では、逆級化成層をなす氾濫原堆積物が上流側で変更された流路からもたらされたことを示している。両遺跡の境、DNU, Loc.14の南方30mの地点では、過去の調査で幅5~6m、深さ約1mの古墳時代後期の埋没河道が検出されており、その充填後、さらに中軸の中疊に細い河川堆積物を材料とする粗粒の耕作土層が累重していた。これらのことと、地形図にみられる現在の長門川沿岸の等高線が低地側に著しく突出していることから、同川の河道固定と天井川化以前に、局的に扇状地斜面が古墳時代以来、低地側に前進したと考えられる。

#### 5.4 出土遺物

調査地では、弥生時代中期、後期の土器、古墳時代のおもに後期の土師器、須恵器が出土した。段上遺跡の調査によって出土した遺物を図11~13に示す。

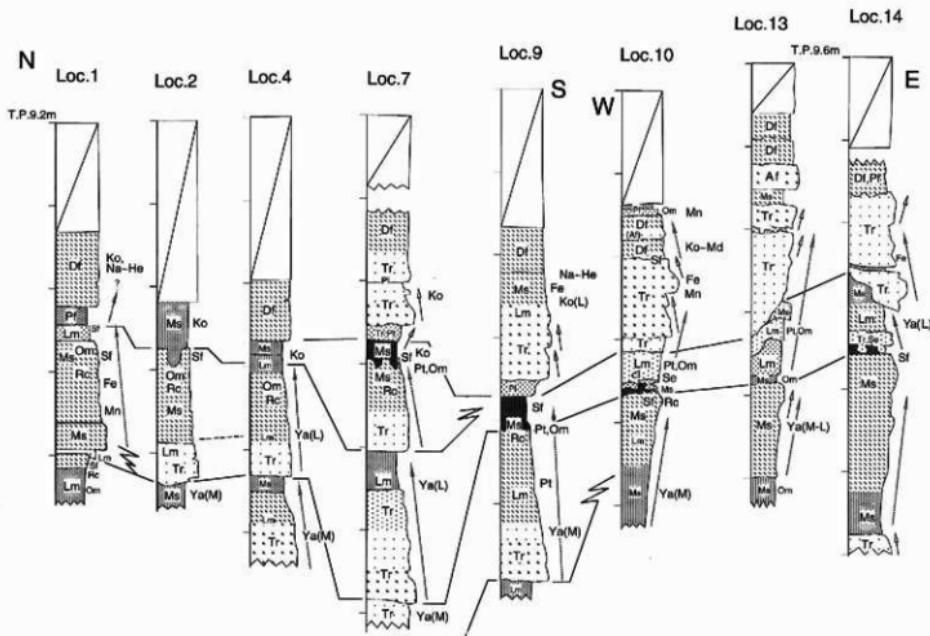


図5.9 段上遺跡第8次調査地における堆積層の柱状断面図。凡例は図5.10と同じ。

出土遺物は機械掘削中に採取されたものであるため、詳しい出土層準は特定できないが、出土直後に掘削された堆積層を確認し、図5.9, 10に記載された時期を決定した。幸運にも、埋没状況が原位置で確認されたこともある(図5.8)。

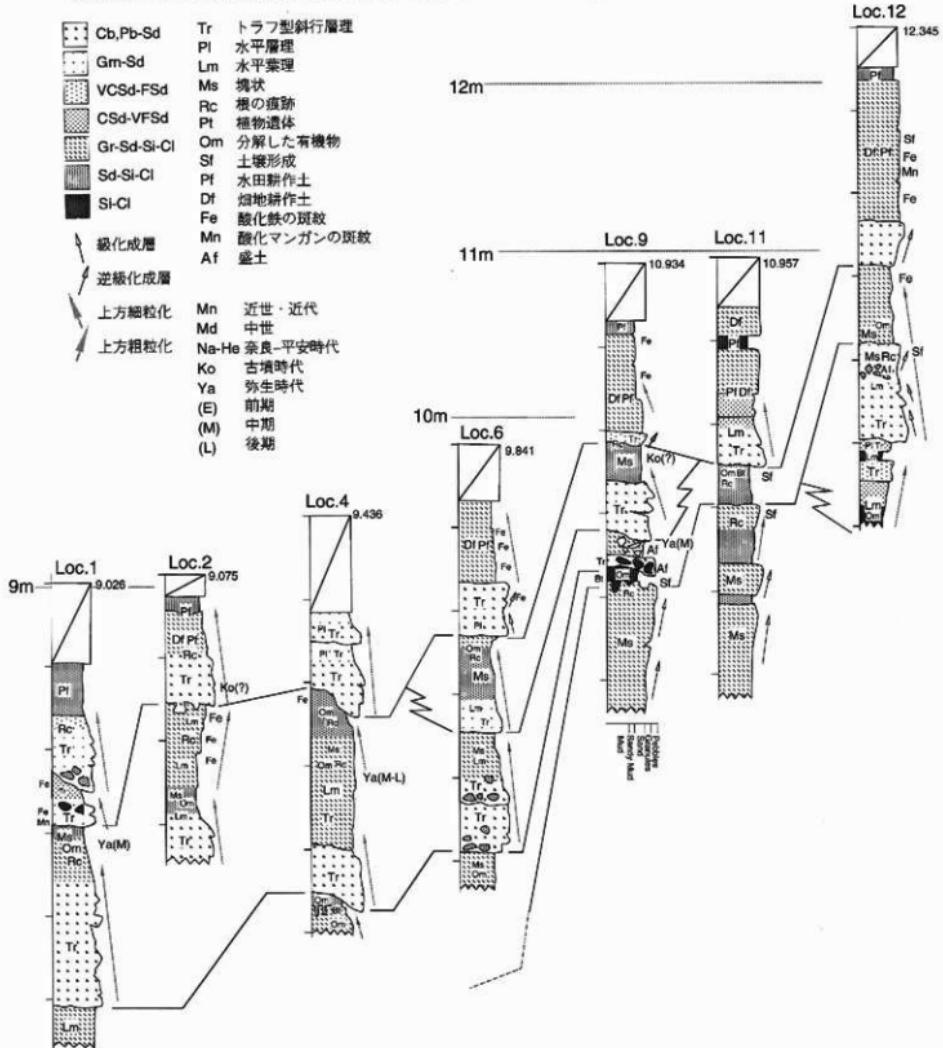
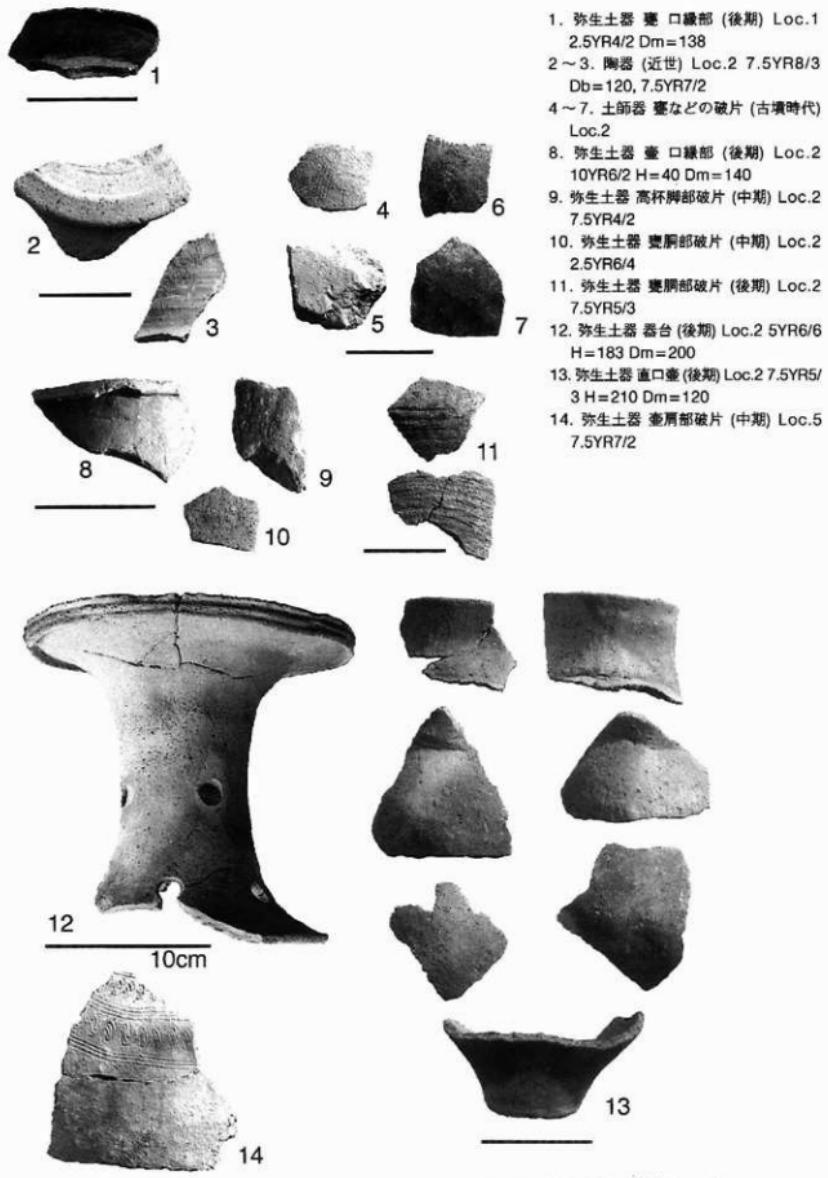


図5.10 下六万寺遺跡第3次調査地における堆積層の柱状断面図。



スケールは表記されたもの以外はすべて約5cm。

図 5.11 段上遺跡出土遺物 (1)



スケールは表記されたもの以外はすべて約5cm。

図5.11 段上遺跡出土遺物 (2)



図 5.11 段上遺跡出土遺物 (3)

## 第6章 その他の試掘・立会調査結果

### 6.1 高井田元町内遺跡立会調査

所在地: 高井田元町1・2丁目、永和1・2丁目地先

面積: 約75m<sup>2</sup>

期間: 平成9年5月29日～6月10日

概要: 通称産業道路の高井田交差点から、近鉄奈良線河内永和駅を経て、商工会議所付近までの道路敷の3か所(図6.1)で、推進工事用の竖坑掘削とともに、夜間の立会調査を実施した。本調査地は従来、いわゆる「周知の遺跡」外であり、いうまでもなく遺跡が所在するかしないか、わからなかった。しかし、3か所の調査地点の内、北端の高井田元町1丁目9地先の竖坑では、地表下約3.5mで河川堆積物と考えられる砂礫層の上面に形成された溝状の凹みを充填する有機物に富むシルト質粘土より古墳時代後期の須恵器、土師器の破片が出土した(図6.2)。同層のいたるところに踏込によると考えられる擾乱がみとめられ、色調の異なるシルト質粘土のブロック土を含むことから、同地点とその周辺が人間活動の範囲であったと考えられる。下位の砂礫層の上面高度がさらに高いと考えられる西方に集落跡などが埋没していると予想される。

### 6.2 小若江遺跡隣接地立会調査

所在地: 近江堂3丁目1北・小若江3丁目24南地先

面積: 約64m<sup>2</sup>

期間: 平成9年8月21日～9月29日

概要: 小若江遺跡として周知される遺跡範囲の南端より約100m隔たった地点(図6.3)で行なわれた竖坑掘削工事に立ち会い、遺構・遺物の有無および堆積層を調査した。工事の掘削底である地表下約12mまでに観察された堆積層の柱状図と層相から推定される堆積環境を図6.8に示す。地表下約1.9mまでは現代の盛土、擾乱層で、その下位の2.2mまでは足跡や浅い溝をともなう中・近世の耕作土層がみとめられた。その下位の砂質シルト質粘土層および氾濫堆積物と考えられる漂質砂層の下、地表下約3m付近には、古墳時代前

図6.1 高井田元町内遺跡立会

調査位置

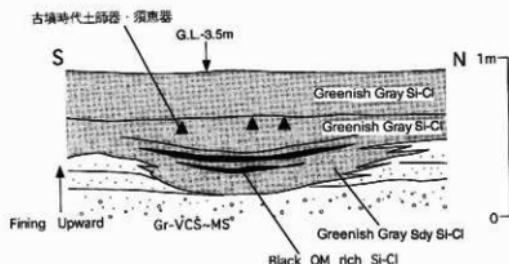


図6.2 古墳時代遺物出土層準の略図



図6.3 小若江遺跡跡地立会調査地点



図6.4 狐塚遺跡跡地立会調査位置

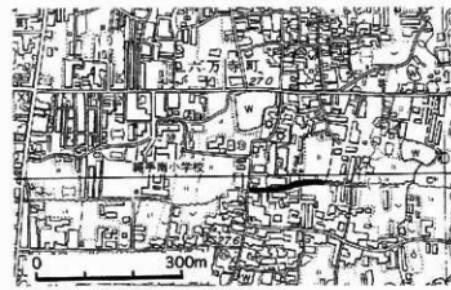


図6.5 半堂遺跡跡地立会調査位置図

期の土師器片を含む土壤化したシルト質粘土層があり、下位の浅い流路の充填堆積物と考えられる礫質砂層下約3.5mでも同様のシルト質粘土層に土器片が混在していた。同層は下方の地表下約6.2mを基底とする層厚約70cmの礫質砂層から上方細粒化する累重をなし、流路充填堆積物から湖沼ないしは河川の後背湿地の泥層への変化を示す。地表下約6.2~8mには、不明瞭な泥と砂の葉理の互層をなし、巣穴を含む生物擾乱をうけた潮汐性堆積物と考えられる砂質泥がみられた。より下位の掘削底までは、貝殻や植物遺体を含み、浅海底の堆積物と考えられる泥層がみられた。

この調査地点で中世・古墳時代の堆積層が検出されたことから、「周知」される範囲より小若江遺跡が南に拡大することが明らかになった。また、調査地点の堆積層の累重は、河内平野中央部の古地理復原にとって有用なデータと思われる。

### 6.3 狐塚遺跡跡地立会調査

所在地: 喜多川町14・15北側地先

面積: 約20m<sup>2</sup>

期間: 平成9年9月10日~10月8日

概要: 調査地は標高45~55mにあり、これより東側で上位のより急傾斜の扇状地面と、西側で下位の緩傾斜の扇状地面の傾斜変換点付近に位置する(図6.4)。ただし、空中写真では、この比高は現在の豊浦川両岸の扇状地面形成時に古い扇状地面が開析されて生じた崖とも、この地下に伏在し、南北に伸びる断層による変異とも読み取られる。

地表下約1.1m以下では更新統最上部に相当し、土石流堆積物と考えられる砂礫質泥がみられた。この上位に層厚約40cmの砂礫質泥からなり、下位層の再堆積と土壤化によって形成されたと考えられる堆積層が載り、その中位より古墳時代のものと思われる土器細片が出土

した。より上位には、層厚約20cmの耕作土層が載るが、時期は不明である。本調査地より上部の扇状地面および山脚の崩積成堆積物からなる斜面には古墳時代後期の群集墳、出雲井古墳群が分布し、本調査地点近傍は古墳の立地にかかる人間活動の領域と思われる。

#### 6.4 半堂遺跡試掘・立会調査

所在地: 横小路町2丁目45・27等北側地先

面積: 約80m<sup>2</sup>

期間: 平成9年11月21日～平成10年3月10日

概要: 大賀世古墳(大賀世神社)の北側で、住宅地を挟んで東西に通る道路の下水道管理設工事に際し、延長約180m、標高約27～35mの区間にについて試掘・立会調査を行なった(図6.5)。道路ぎわでは、かつて埴輪が多数出土したが、本調査区間に沿って埋没河道が検出され、構造・遺物を含む堆積層はみとめられなかった。最大掘削深度は調査地西端で約3.5mであったが、埋没河道の基底には至らなかった。河道は、おそらく古墳時代以後に形成され、充填されたものと思われるが、年代測定のため河道内に堆積した有機物に富む泥を探取した。

#### 6.5 植附・神並遺跡試掘調査

所在地: 西石切町3丁目2・3東側地先、11東側地先

面積: 約10m<sup>2</sup>

期間: 平成9年12月8日～12月10日

概要: 近鉄東大阪線新石切駅北東方の旧東高野街道と旧国道170号線の道路敷(図6.6)で、それぞれ2か所の埋設管試掘調査に立ち会い、土層の観察を行なった。掘削深度は最大で1.7mであった。いずれの調査地点でも、道路建設時および既設管理設時の盛土・埋土、近代の水田耕作土層、更新統最上部に相当すると思われる砂礫まじりの粘土質シルトが累重しており、発掘調査の対象となる構造・遺物はとくに検出されなかった。



図6.6 植附・神並遺跡試掘調査  
地点

#### 6.6 布市町、和泉遺跡近接立会調査

所在地: 布市町3丁目1

面積: 35m<sup>2</sup>

期間: 平成9年11月25日～平成10年2月14日

概要: 日下川に沿う布市集落の南、外環状線道路敷西半から道路外の隣接地にまたがる推進工事の堅坑掘削に際して立会調査を行なった(図6.7)。その結果、地表下1.8mに、近隣の調査においてもみとめられた1569年の地震による変形を受けた泥層があり、その上位に1枚、下位に2枚の畑地耕作土層がみとめられ



図6.7 布市町立会調査地点

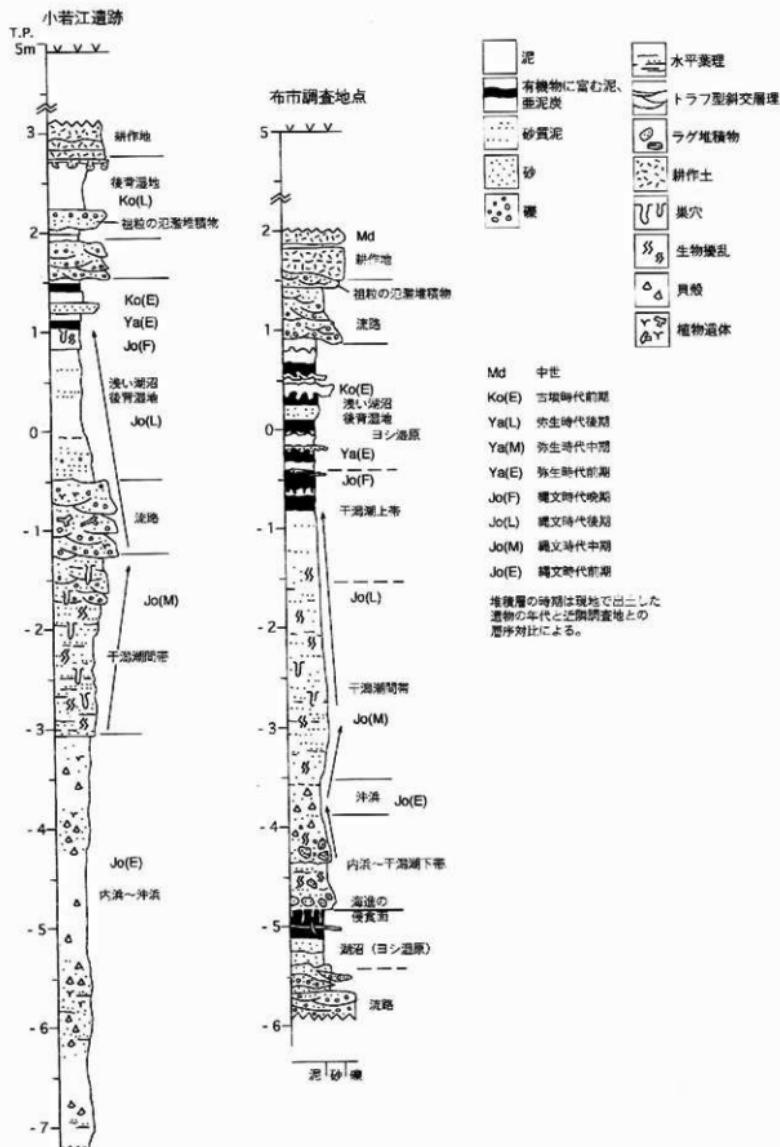


図 6.8 布市町調査地点と小若江遺跡調査地点の堆積層柱状図

た。前者からは、中世のものと思われる土器器片が、後者からは平安時代の黒色土器破片が出土した。下位の耕作上層の基底をなす堆積層の上面には、作土の土砂取りのためか、畑地の排水のために掘られた溝が数条、東西方向に平行してはしっていた。これらは幅約60cm、深さ20~30cmであった。その下方の地表下約5mまでは、近隣の調査地との層序対比可能な縄文時代晩期から古墳時代までの堆積層がみとめられ、これらの累重中には地震による変形構造や、足跡などが観察された。さらに下方の地表下9.9mまでの上部では、干潟の堆積層と考えられる泥質砂、中部では貝化石を含み、内湾で沖浜の堆積物と考えられる砂質泥、下部には海進とともに侵食によって生じた偽礫やふるい分けの悪い砂礫を含む泥層がみられた。これより下方の地表下13mまでは、更新統最上部の沖積基底疊層に相当すると考えられる砂礫と泥の互層がみとめられた。以上の堆積層の累重を図6.8に示す。

なお、1974年にマッコウクジラの骨が発見された地点は、本調査地点の南南東約150mに位置し、その出土層準は、地表下約6mであった。本調査地点の層序をその深度にあてはめると、クジラの骨はT.P.-1~2mで、干潟潮間帯から潮上帯にかけてのひょううに水深の小さい条件のもとで堆積したことになる。のことから、クジラはより冲合いで座礁し、その体が腐敗し、完全に散逸する以前に一部が暴浪で運搬・堆積したものと想像される。

## 6.7 水走遺跡立会調査

所在地: 水走 448~330

面積: 約20m<sup>2</sup>

期間: 平成9年12月3日~平成10年1月20日

概要: 水走清掃工場西側を通って国道308号線に向かう南北道路の推進工事において掘削された堅堀3か所で立会調査を行なった(図6.9)。清掃工場の南約200mの地点では、地表下約3.0mまでの堆積層を観察した。地表下約1.7m~1.2mまでの盛土・搅乱層の下面までは、後背湿地の泥層から自然堤防堆積物あるいは後背湿地に流入した粗粒の氾濫堆積物と考えられる泥質砂へと上方粗粒化する累重がみとめられた。おもに近世以後の堆積物と考えられる。地表下1.7mより下方には河道を充填したと考えられる礫質砂層が掘削底まで続いたが、その中位には、層厚約20cmの泥層が挟まれ、上面には足印が、直下には層厚約20cmの砂質泥のブロック土層がみとめられた。これらの入間活動の痕跡は、かつて308号線関係の調査で検出された中世の埋没河道や、それとともに堰造構と同一層準にあるものと考えられる。より南に他の2か所の同じ深度では、礫質砂層を欠き、人間活動の痕跡をとどめない泥層がみとめられた。



図6.9 水走遺跡立会調査地点



図6.10 鬼塚遺跡試掘調査地点

### 6.8 鬼塚遺跡試掘調査

所在地: 南荘町 11-5 地先

面積: 2.5m<sup>2</sup>

期間: 平成 10 年 2 月 19・20 日

概要: 鬼塚遺跡の北東部にあたる標高約 30m の道路敷で(図 6.10)、既設管に試掘に立ち会

い堆積層を調べた。鬼塚遺跡第13次発掘調査区の南西部に隣接する場所であつた。その調査においても検出された平安時代～室町時代の遺物を含む土壤化した黒褐色の砂質粘土質シルト層が地表下約 60cm にみとめられた。遺構を検出することができなかつたのは、調査範囲が狭かったことによると思われる。



図6.11 善根寺遺跡立会調査地点

### 6.9 善根寺遺跡立会調査

所在地: 善根寺町 2 丁目 4-24 地先

面積: 40m<sup>2</sup>

期間: 平成 10 年 2 月 27 日～3 月 10 日

概要: 孔舎中学校の西南西方約 250m の地点(図 6.11)で行なわれた推進工事の堅坑掘削に際して、立会調査を実施した。調査地点は孔舎中学校と南東方にある池之端集落が所在する、古い段丘構成層(未確認であるが中位段丘と思われる)からなる尾根状地形に挟まれた谷の中央、標高約 9.5m に位置する。掘削の結果、

地表下約 5.6m まで砂礫、泥の互層が累重していた。この累重の上部は完新統で、下部は更新統最上部の沖積基底礫層に相当するものと思われる。これらは最終氷期に開拓された幅広い谷を埋積する堆積物であろう。



図6.12 III池遺跡立会調査地点

### 6.10 皿池遺跡立会調査

所在地: 河内町 7-6 地先

面積: 約 10m<sup>2</sup>

期間: 平成 10 年 3 月 9 日、12 日

概要: 縄手北中学校南側の東西道路で、河内寺跡に隣接する地点の下水道管理設工事に立ち会い、地層を観察した。その結果、最近の耕作土層下、地表下約 80cm に、中世の土師器皿破片を含む暗色の砂礫質泥がみとめられた。その下位の地表下約 2.0m までは、土師器片や弥生土器片を含む砂礫層の累重がみとめられた。これらの中には掃流性堆積物ばかりでなく、泥のマトリクスをともなう石礫性の土石流堆積物と考えられる堆積層もみとめられた。

## 報告書抄録

ふりがな	ひがしおおさかしげすいどうじぎょうかんけいはくつちょうさがいようほうこく		
書名	東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1998年度—		
副書名	鬼虎川遺跡第40次発掘調査報告		
卷次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	若松博恵/井上伸一/安部みき子/パリノ・サーヴェイ株式会社		
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会		
発行機関	財団法人東大阪市文化財協会		
発行年月日	1999.03.31		
作成法人ID	42710		
郵便番号	577-0843	電話番号	06-6736-0346
住所	東大阪市荒川3-28-21		
ふりがな	きとらがわいせき		
遺跡名	鬼虎川遺跡		
ふりがな	ひがしおおさかしたからまち・やよいちょう		
遺跡所在地	東大阪市宝町・弥生町		
市町村コード	27227	遺跡番号	35
北緯	34.40.28.	東経	135.38.22.
調査期間	1996.04.30 - 1996.06.11	調査面積	50m <sup>2</sup>
調査原因	下水道管渠築造工事		
種別	集落		
主な時代	縄文/弥生/古墳		
遺跡概要	縄文・縄文土器・弥生・溝+ピット+落ち込み・弥生土器+石器+土偶+骨角器+動物遺体+紡錘車/古墳・溝・埴輪+製塩土器		
特記事項	弥生時代前期土器一括		

ふりがな 東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1998年度—

書名 ひがしおおさかしげすいどうじぎょうかんけいはくつちょうさがいようほうこく

副書名 上六万寺遺跡第4次発掘調査報告

卷次

シリーズ名

シリーズ番号

編著者名 池崎智司

編集機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行年月日 1999.03.31

作成法人ID 42710

郵便番号 577-0843 電話番号 06-6736-0346

住所 東大阪市荒川3-28-21

ふりがな かみろくまんじいせき

遺跡名 上六万寺遺跡

ふりがな ひがしおおさかしみなみしじょうちょう・ろくまんじちょう

遺跡所在地 東大阪市南四条町12・5・11番・六万寺町3丁目

市町村コード 27227 遺跡番号 61

北緯 34.39.14. 東経 135.38.44.

調査期間 1998.06.18-1998.09.30 調査面積 100m<sup>2</sup>

調査原因 下水道管渠築造工事

種別 集落/耕作地

主な時代 繩文後期/弥生前期/弥生中期/弥生後期/古墳後期/奈良後半/平安・鎌倉/中世(13世紀後半-14世紀)/近世

遺跡概要 繩文後期-繩文土器/弥生前期-弥生土器+木製品/弥生中期-弥生土器+木製品/弥生後期-土壙-弥生土器/古墳後期-須恵器+土師器/奈良後半-土壙-須恵器+土師器/平安・鎌倉-土石流堆積物-黑色土器-須恵器+土師器/中世-土石流堆積物+溝+ビット+耕作地跡-瓦器+土師器/近世-耕作地跡-染付+瓦+土師器

特記事項 弥生時代鳥形木製品出土 この調査により本遺跡の範囲が北に約150m拡がった。

ふりがな 東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1998年度—

書名 ひがしおさかしげすいどうじぎょうかんけいはっくつちょうさがいようほうこく

副書名 北島遺跡第2次発掘調査報告

卷次

シリーズ名

シリーズ番号

編著者名 松田順一郎

編集機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行年月日 1999.03.31

作成法人ID 42710

郵便番号 577-0843 電話番号 06-6736-0346

住所 東大阪市荒川3丁目28-21

ふりがな きたじまいせき

遺跡名 北島遺跡

ふりがな ひがしおさかしなかいしきりちょう

遺跡所在地 東大阪市中石切町7丁目3・4

市町村コード 27227 遺跡番号 121

北緯 34.40.56. 東経 135.38.15.

調査期間 1997.05.26-1997.07.20 調査面積 304m<sup>2</sup>

調査原因 下水道管渠築造工事

種別 水田/湿地

主な時代 弥生/古墳

遺跡概要 弥生中期・水田・弥生土器/弥生後期・木道/古墳前期・土師器

特記事項 弥生時代後期の木道検出

ふりがな 東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1998年度一  
書名 ひがしおおさかしげすいどうじぎょうかんけいはくつちょうさがいようほうこく  
副書名 植附遺跡第14次発掘調査報告  
巻次  
シリーズ名  
シリーズ番号  
編著者名 松田順一郎  
編集機関 財団法人東大阪市文化財協会  
発行機関 財団法人東大阪市文化財協会  
発行年月日 1999.03.31  
作成法人ID 42710  
郵便番号 577-0843 電話番号 06-6736-0346  
住所 東大阪市荒川3丁目28-21  
ふりがな うえつけいせき  
遺跡名 植附遺跡  
ふりがな ひがしおおさかしなかいしきりりょう  
遺跡所在地 東大阪市中石切町3丁目4  
市町村コード 27227 遺跡番号 29  
北緯 34.40.54. 東経 135.38.43.  
調査期間 1997.02.11-1997.02.20 調査面積 36m<sup>2</sup>  
調査原因 下水道管渠塗造工事  
種別 耕作地/集落  
主な時代 古墳/飛鳥～奈良  
遺跡概要 古墳中期～後期・溝+土器溜まり・須恵器+土師器/飛鳥～奈良・棚田状耕作地  
特記事項 最終氷期に開析された谷底の堆積にともなう遺跡形成が明らかになった

ふりがな 東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1998年度—

書名 ひがしおおさかしげすいどうじぎょうかんけいはくつちょうさがいようほうこく

副書名 下六万寺遺跡第3次・段上遺跡第8次発掘調査報告

卷次

シリーズ名

シリーズ番号

編著者名 松田順一郎

編集機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行年月日 1999.03.31

作成法人ID 42710

郵便番号 577-0843 電話番号 06-6736-0346

住所 東大阪市荒川3丁目28-21

ふりがな しもろくまんじいせき

遺跡名 下六万寺遺跡

ふりがな ひがしおおさかししもろくまんじちょう

遺跡所在地 東大阪市下六万寺町2丁目3・2

市町村コード 27227 遺跡番号 63

北緯 34.39.01. 東経 135.38.24.

調査期間 1997.09.03-1997.11.21 調査面積 450m<sup>2</sup>

調査原因 下水道管渠築造工事

種別 扇状地扇端部

主な時代 弥生/古墳～奈良

遺跡概要 弥生中期・弥生土器/弥生中期～後期・弥生土器/古墳後期～奈良・須恵器+土師器

特記事項 扇状地扇端部の堆積層と微地形発達が明らかになった

ふりがな 東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1998年度一

書名 ひがしおおさかしげすいどうじぎょうかんけいはっくつちょうさがいようほうこく

副書名 下六万寺遺跡第3次・段上遺跡第8次発掘調査報告

巻次

シリーズ名

シリーズ番号

編著者名 松田順一郎

編集機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行年月日 1999.03.31

作成法人ID 42710

郵便番号 577-0843 電話番号 06-6736-0346

住所 東大阪市荒川3丁目28-21

ふりがな だんのうえいせき

遺跡名 段上遺跡

ふりがな ひがしおおさかしもろくまんじちょう

遺跡所在地 東大阪市下六万寺町3丁目4・5

市町村コード 27227 遺跡番号 62

北緯 34.39.07. 東経 135.38.21.

調査期間 1997.05.19-1997.06.05 調査面積 110m<sup>2</sup>

調査原因 下水道管渠築造工事

種別 集落

主な時代 弥生/古墳

遺跡概要 弥生中期-河道-弥生土器/弥生後期-河道-弥生上器/古墳後期-ピット+河道-須恵器  
+土師器

特記事項 扇状地緩斜面の微地形と遺跡形成過程が明らかになった

---

東大阪市下水道事業関係

発掘調査概要報告—1998年度—

発行年月日 1999年3月31日

発 行 財団法人東大阪市文化財協会

〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21

印 刷 株式会社ミラテック

〒534-0025 大阪市都島区片町2丁目9-9

紙 質 本文 ニューエイジ90kg/m<sup>2</sup>

---

付図 1

